鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（54）

国道10号姶良バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

NAKA HARA

中 原 遺 跡

姶良郡姶良町脇元

付篇　国道10号バイパス（姶良地区）関係埋蔵文化財調査総括

― 第３分冊 ―

２００３年３月

鹿児島県立埋蔵文化財センター

第３分冊　目次

第Ⅳ章　考察・研究・分析 …… 1
　中原遺跡の地形環境　森脇　広 …… 1
　古道を探る方法　平田信芳 …… 7
　南九州の古代交通と中原遺跡　永山修一 …… 12
　周辺地形より見た道路遺構の考察　下鶴　弘 …… 19
　中原遺跡の近世における歴史的位置　松尾千歳 …… 24
　中原遺跡出土土器に塗彩された赤色顔料の分析について …… 28
第Ⅴ章　発掘調査のまとめ …… 29

写真図版 …… 35
付篇　国道10号バイパス（姶良地区）関係埋蔵文化財調査総括 …… 89
　1　国道10号バイパス（姶良地区）関係の埋蔵文化財調査 …… 89
　2　加治木町干迫遺跡出土の縄文土器 …… 92

挿図目次

第１図　中原遺跡周辺の平野の地形 …… 2
第２図　姶良平野の地形地質断面 …… 3
第３図　中原遺跡の堆積物と考古遺物の層位 …… 4
第４図　鹿児島湾北西岸地域における縄文時代以降の汀線変化 …… 5
第５図　南九州における古代の駅および駅路 …… 14
第６図　明治35年の測量図 …… 21
第７図　周辺小字図 …… 21
第８図　脇元・溝原地籍図 …… 21
第９図　大字脇元地内の大口筋Ⅰ …… 23
第10図　大字脇元地内の大口筋Ⅱ，Ⅲ …… 23
第11図　『重富郷絵図』 …… 27
第12図　X線分析によるスペクトル図 …… 28
付篇　第１図　国道10号バイパス関連図 …… 90
　第２図　小倉畑遺跡出土の転用硯 …… 92
　第３～76図　縄文土器（１）～（74） …… 96～169

表目次

第１～５表　出土遺物観察表（１）～（５） …… 170～174

図版目次

写真資料　『重富郷絵図』ほか …… 20
図版１　中原遺跡遠景ほか …… 35
図版２　A地区北西壁土層断面ほか …… 36
図版３　中原遺跡上空より桜島をのぞむ …… 37
図版４　Ⅶ層調査風景ほか …… 38
図版５　調査前のB地区ほか …… 39
図版６　１号石組遺構検出状況ほか …… 40
図版７　土坑１発掘状況ほか …… 41
図版８　石鏃集積検出状況ほか …… 42
図版９　畠跡（１）～（３） …… 43
図版10　大型道路遺構埋土断面ほか …… 44
図版11　大型道路遺構検出状況ほか …… 45
図版12～53　遺物写真 …… 46～87

第Ⅳ章　考察・研究・分析

中原遺跡の地形環境

森　脇　　広（鹿児島大学法文学部）

1　はじめに

地形環境は人々の生活・文化と密接に関わっている。考古遺跡から知られる当時の人々がどのような地形環境下で生活していたかという点は，過去の人間と自然との関係をみる際の重要な視点の一つである。中原遺跡の立地する臨海の平野は縄文時代以降，河川や波の作用などにより形成されてきたもので，現在も形成途上にある地形である。平野は地形環境の中ではこの時期においてもっとも大きく変化してきた地形であることから，その静的な地形環境のみならず，動的な地形環境の変化は平野に基盤をおいた当時の人々の生活と密接に関わっている。したがって，当時の人々の生活や文化と自然環境の関係を考える上で，平野の地形とその堆積物によって明らかにされる地形環境とその変化の知見は大切である。

本稿では中原遺跡およびその周辺の地形環境と縄文時代早期以降の海岸環境変化について述べ，中原遺跡がどのような地形環境変化のなかで形成されたかを考える。

2　平野の地形・堆積物と中原遺跡の立地

平野周辺の地形地質：中原遺跡の立地する鹿児島湾北西岸の平野は姶良カルデラの火山区域にあり，日本の平野形成環境の中でも特異な環境にある（町田ほか，2001）。平野周辺には，溶岩や火砕流堆積物など火山噴火に関わる噴出物からなる山地・丘陵・台地が広く分布し，さらに第四紀の海成層からなる丘陵が特徴的に出現している。また平野形成の最前線である現在の海岸沖には，カルデラ底が迫り，水深100m以上に及ぶ急深な海底地形が広がる。

本地域の低地周辺の基盤地形は全体としては低高度の山地・丘陵・台地からなる。それらは主に中期更新世の国分層群および第四紀前期以降に形成された火山・溶岩・火砕流堆積物によって構成される（大塚・西井上，1980）。本低地流域でもっとも高度が高いのは，烏帽子岳・矢止岳などの山体を中心とした600～700mの山頂高度をもつ北山の山塊で，第四紀前期に形成された火山群からなる。当時ここに霧島火山を小型にしたような火山群が形成された。その後の長期にわたる浸食によって山体はかなり開析が進んでいるが，火山としての山容は残存している。

本地域に広く分布する台地は，主に姶良カルデラ最新の巨大噴火によって噴出した入戸火砕流堆積物からなる。この火砕流堆積物は，約2.5万年前の最終氷期最大海面低下期ごろ，すなわち沖積層堆積開始直前に噴出したことと，極めて厚い火砕流堆積物であるにもかかわらず溶結していないことから，その後の平野形成に大きな影響を与えてきた。

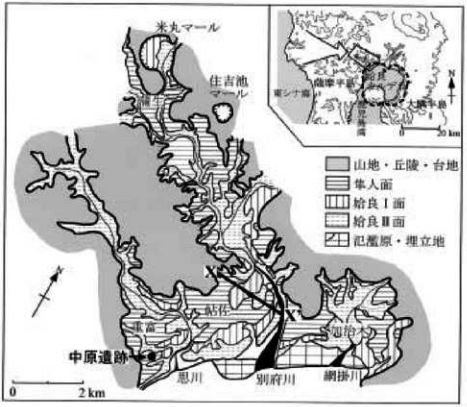
本地域中・北部の平野は，北山の山地を流域とする別府川と網掛川が流入する。別府川は鹿児島湾北西岸の平野を形成した最大の河川で，その河床勾配は本地域の平野域ではもっとも小さい。平野南部は思川によって形成された。思川は南側の第四紀前期・中期の火山・火砕流からなる低山地・

丘陵からなる流域をもつ。中原遺跡は思川の下流域の平野に立地する。

平野の地形：思川・別府川流域の平野は内陸の谷底域の平野と臨海平野に大きく分けられる。内陸の平野は扇状地状地形をなし，とりわけ思川流域は，比較的急勾配な扇状地地形が形成され，現在の河川堆積物も粗粒な砂礫からなっている。網掛川流域の臨海平野は背後が急な海岸崖と急流の滝によって境され，臨海平野は内陸の谷底平野とスムースに連続しない。

臨海の平野は南西端の重富から北西端の加治木まで連続し，鹿児島湾北西岸－姶良カルデラ北西縁－において一連の三角州を形成している。

平野の地形区分：本地域の大きな特徴は，本地域の平野が段丘化していることである（第１図）。段丘は３段に区分され，それらが模式的に発達する地名をとって，上位から隼人面，姶良Ⅰ面，姶良Ⅱ面と呼ばれている（森脇ほか，1986）。



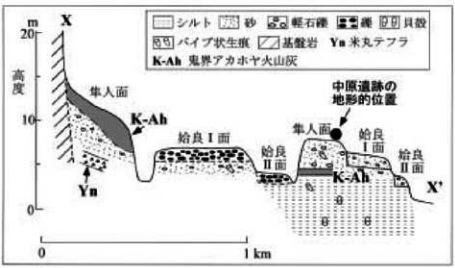
第１図　中原遺跡周辺の平野の地形（森脇ほか，2002を改変）
※ X-X´は第２図の地形地質断面位置

隼人面の地形：隼人面は天降川平野の隼人の街がのっている面を模式とし，鹿児島湾北岸から本地域の北西岸まで広く分布する。臨海部で最高10～15mほどの海抜高度をもつ。この面は過去に形成された三角州が隆起してできたもので，この面の海岸側末端付近には当時の海岸に形成された砂堤の小さな高まりが現在の海岸に平行に延びている。

内陸の平野ではこの面は別府川の流域によく発達し，蒲生の盆地で海抜およそ15～20mの高さで広がる。思川流域の内陸低地では顕著な段丘はみられない。これは，後述のように三角州形成中に蒲生の米丸で噴火が起こり，別府川流域ではその火山噴出物が厚く堆積し，これが段丘化を顕著にしているのに対し，思川流域ではこの噴出物が厚くなく，しかも内陸域での現在の河川による砂礫

の堆積作用が活発で，現在も埋積が生じていることによる。

隼人面の構成堆積物：この面を構成する堆積物は，縄文海進にともなって堆積した三角州性海成堆積物を主体とする。下部は砂質・泥質，表層付近は軽石の礫を多く含む砂からなる。ここには表層付近に米丸マールのテフラ（7,300^{14}C yrs B P；暦年に換算すると8,100cal B P（森脇ほか，2002））と鬼界アカホヤ火山灰（6,500^{14}C yrs B P；7,300cal B P（奥野，2002））が挟まれ，縄文海進最盛期頃の堆積物であることがわかる（第２図）。隼人面構成層の上部は，内陸の平野では厚い米丸テフラによって占められる。それはスコリア質の細粒火山灰を主体とするテフラで，米丸マー



第２図　姶良平野の地形地質断面（森脇ほか，2002に補筆）
※ 断面位置 X-X´ は第１図参照

ルのマグマ水蒸気噴火に伴う横殴りの噴煙－ベースサージ－によってもたらされた。蒲生の市街地ではこの噴出物の厚さは10mほどあり，下流の臨海部でも最大３mほどの厚さが認められている。内陸の平野では厚い米丸テフラの下位に広く浅海性の泥質堆積物が堆積する。この中には多量の貝殻が含まれる。その最上位の年代は米丸テフラが噴出した約7,300^{14}C 年前（8,100cal 年前）で，このころ広い内湾が形成されていたことがわかる。この面は6,500^{14}C年前から3,500^{14}C年前にかけて離水していった（森脇ほか，2002）。

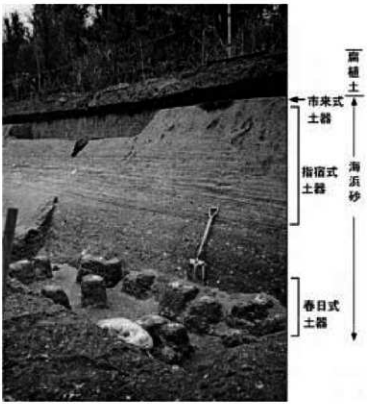
姶良Ⅰ面，姶良Ⅱ面：隼人面の下位にある姶良Ⅰ面は，姶良町帖佐を模式としている。この面は現在の海岸や別府川河口周辺では海抜高度５～７mで，帯状に発達する。ここの姶良Ⅰ面は隼人面が海食によって作られた浸食段丘面で，その構成物質の厚さは１～２mと薄い。姶良Ⅱ面もこの区域で姶良Ⅰ面の海岸側に模式的に発達する浸食段丘面である。その海抜高度は３～５mである。各面の離水年代は，姶良Ⅰ面が3,000～2,000^{14}C年前（縄文晩期～弥生時代），姶良Ⅱ面が1,000年前ごろである（森脇ほか，2002）。

３　中原遺跡の地形と堆積物

中原遺跡は隼人面上に位置する（第１図）。この地点は隼人面の海岸側にあり，隼人面の離水がもっとも遅かった場所である。遺跡は現在の海岸に平行につらなる砂堤状の微高地にあり，遺跡が

営まれていた当時ここは海岸付近にあった。ここの海岸側には深く刻まれた小河谷が海岸に平行に走る。それは当時の堤間湿地に由来するとみられる。遺跡の東方には姶良Ⅰ面と境される小崖－海岸崖－がある。思川沿いの右岸には姶良Ⅰ面が分布する（第１図）。

中原遺跡でみられる隼人面の構成堆積物と考古遺物の関係は興味深い（第３図）。ここの表層は１ｍほどの厚さで黒色の腐植層が形成されている。その下位は全体として軽石礫と砂からなる淘汰のよい海浜堆積物からなり，斜交層理がよく発達する。この海浜の軽石礫質砂層中に春日式，指宿式，市来式の各土器がそれぞれ下位から時代別に順序よく堆積している。このように，海浜堆積物の中に各層準に特定の時期の遺物が古い方から新しい方に順序よく集中して挟まれていることは，時代を異にする土器がある時期同時にここに供給されたものではなく，当時ここに近接した陸上に各時期の縄文人が占拠するに伴って，当時の海浜に土器が順次供給されたものと考えられる。腐植層直下にある海浜成の軽石礫質砂層に市来式土器が出土することから，ここの離水は縄文後期中葉ごろである。以上のことはこの付近の内陸－当時の陸地－に当時の遺跡が立地していることを示唆している。



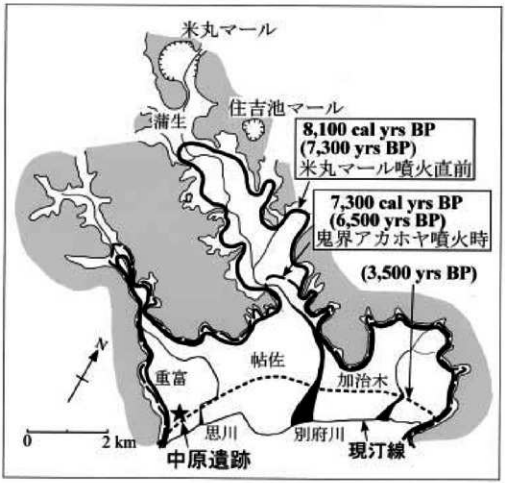
第３図　中原遺跡の堆積物と考古遺物の層位

歴史時代の桜島の火山活動と姶良カルデラの地盤変動の観測によると，桜島火山の噴火時には姶良カルデラ全域にわたって急激に沈降し，火山噴火の休止期間には逆に緩慢な隆起が生じている（加茂・石原，1980，泉ほか，1991）。上記の完新世海成段丘によって示されるこの地域の隆起は桜島の火山活動が関わっているとみられており（森脇ほか，2002），本地域も，縄文時代にこのような火山活動に伴う地殻変動が生じたに違いない。この遺跡に関係する縄文中期～後期にかけては，テフラ編年から知られる桜島の噴火は，桜島高峠２（Ｐ７）テフラ噴火が主要なものである。その年代は4,500年前（永迫ほか，1999）で，春日式の時期に当たる。この時，姶良カルデラ縁辺にある中原遺跡でも急激な沈降が起こったものと推定される。中原遺跡で見られるような春日式土器の埋没はこのような地核変動が関わっているのかもしれない。

本地域の縄文時代以降の隆起はこのような急激な沈降と緩慢な隆起の総和として生じた可能性が高い。全体として隆起量が沈降量を上回ったため，本地域の平野が段丘化したものといえよう。

4　海岸地形環境の変化

本地域に縄文海進がもっとも内陸に入ったのは，最終氷期最盛期以降に生じた急激な海面上昇がピークに達した時に対応する。鹿児島湾北西岸において海進がもっとも内陸深く及んだのは別府川流域で，ここでは蒲生の市街付近まで海進が及んだ（第４図；森脇ほか，1986）。その距離は現在の海岸から８km ほど内陸にあり，南九州でも甲突川低地や大隅半島の肝属低地とともにもっとも内陸に海進が及んだ地域となっている。それは海進前にこれらの地域を流れていた河川の勾配が緩



第４図　鹿児島湾北西岸地域における縄文時代以降の汀線変化（森脇．2002に補筆）

やかであったことによる。別府川流域での海進ピークの年代は，最内陸の海成層の直上を米丸マールの噴出物が覆っていることから，米丸マール噴火と同じで7,300^{14}ＣyrsＢＰ（8,100calＢＰ）（森脇ほか，2002）－縄文時代早期後葉－である。

思川流域でも別府川流域ほどではないが，この時期現在の海岸から５km 内陸にまで海進が及んだ。網掛川流域の加治木では臨海の平野は背後の谷底低地とは比高差の大きい遷急点で境されいるため，海進はこの崖下で止まり，内陸に深いおぼれ谷は形成されなかったが，現在の臨海平野全域が浅海域となった。

縄文海進ピーク頃に蒲生の米丸でベースサージ噴火が起こり別府川流域の内湾はこの噴出物により埋積され，この時海岸は急激に沖に前進した。思川流域ではこのテフラの分布軸からそれたため，

海岸変化への影響も少なかった。一般に日本列島では縄文海進がもっとも内陸に及んだ時期は，米丸マール噴火時期より少し後，鬼界アカホヤ噴火（6,500^{14}CyrsＢＰ：7,300calＢＰ）のころ，すなわち縄文早期末から縄文前期初頭のころである。晩氷期に急速に上昇を続けてきた海面は，この時期以降現在の海面位置付近で安定し，現在に至っている。米丸マール噴火の影響を受けた別府川流域以外の思川や網掛川流域の臨海平野では，ほぼ鬼界アカホヤ噴火頃に海進のピークが生じた（第４図）。縄文海進ピークの頃，南九州ではこの米丸マール噴火のほかに鬼界カルデラ，池田カルデラ，桜島においてテフラ噴火が生じ，当時形成されていた内湾は大きく埋積され，これにより海岸環境は大きな影響を受けた（森脇，2002）。

縄文前期以降の海面安定期にはいると，流域の河川からの土砂供給により当時の浅海は埋積され，三角州が形成されていった。縄文後期ごろには三角州は現在の海岸近くまで進出し，平滑な汀線が形成された（第４図）。中原遺跡周辺に人々が住み着くようになったのは汀線がかなり現在の海岸近くまで進出していた時期である。その後，海岸は水深が急激に大きくなる姶良カルデラ底近くまで及んだため，沖への海岸進出は緩慢となった。また姶良Ⅰ，Ⅱ面の低段丘崖で示されるように，一時期海岸後退も生じた。網掛川，別府川，思川の作る現在の三角州は沖側への前進がほとんど阻止され，海岸変化は平衡状態に近くなっている。

【引用文献】

泉　拓良・小林哲夫・松井　章・諏訪　浩・江頭庸夫・加茂幸介　1991　「桜島における縄文人の生活と火山災害」『京都大学防災研究所年報』№34A　p81-190

加茂幸介・石原和弘　1980　「地盤変動からみた桜島の火山活動」『桜島地域学術調査協議会調査研究報告』p19-28

町田　洋・太田陽子・河名俊男・森脇　広・長岡信治　2001　「九州・南西諸島」『日本の地形』７　東京大学出版会　p355

森脇　広・町田　洋・初見祐一・松島義章　1986　「鹿児島湾北岸におけるマグマ水蒸気噴火とこれに影響を与えた縄文海進」『地学雑誌』95　p94-113

森脇　広・松島義章・町田　洋・岩井雅夫・新井房夫・藤原　治　2002　「鹿児島湾北西岸平野における縄文海進最盛期以降の地形発達」『第四紀研究』第41巻第４号　p253-268

永迫俊郎・奥野　充・森脇　広・新井房夫・中村俊夫　1999　「肝属平野のテフラと低地の形成」『第四紀研究』第38巻第２号　p163-173

奥野　充　2002　「南九州に分布する最近約３万年間のテフラの年代学的研究」『第四紀研究』第41巻第４号　p225-236

大塚裕之・西井上剛資　1980　「鹿児島湾北部沿岸地域の第四系」『鹿児島大学理学部紀要（地学・生物学）』３　p35-65

古道を探る方法

平　田　信　芳（古代交通研究会員）

1　律令期の大隅国・薩摩国の官衙・官道について

奈良・平安時代、大隅国・薩摩国にあった官衙・官道の遺構については断片的に知られているにすぎない。考古学のメスが入ったのは薩摩国府[1]・薩摩国分寺[2]・薩摩国分寺瓦窯跡[3]・大隅国分寺[4]・大隅国分寺瓦窯跡[5]だけである。郡家遺構にしても大隅国８郡・薩摩国13郡の中で、郡家関係の遺構と知らず[6]に発掘した結果、調査担当者の個人的見解で薩摩郡家・阿多郡家・揖宿郡家と結び付くのではないかとの情報が漏れて来る状態である。

官道については、延喜式巻二十八兵部省にある下記の記事が基本であるが、確実に判明したのは、

大隅国駅馬　　蒲生・大水、各五疋。

薩摩国駅馬　　市来・英祢・網津・田後・櫟野・高来、各五疋。

伝馬　　市来・英祢・網津・田後、各五疋。

蒲生駅から大隅国府に向かう官道の一部についてだけである。これの発見に至る経緯を知っているのは筆者だけであるので、そのことをまず紹介しておきたい。1993年２月、木下良氏（古代交通研究会長）が木本雅康・中村太一（当時國學院大學、院生）両君・橋村修君（國學院大學、学生）を引率して、九州各国の官道調査をされた。薩摩国・大隅国調査の際は筆者も同行した（２月27日～28日）。その時に姶良町船津で大隅国駅路の痕跡とみられる地割を確認した。平成４年(1992)～平成11年(1999)、鹿児島県教育委員会は文化庁の補助事業として、歴史の道調査および歴史の道整備活用推進事業総合計画を実施した。筆者は調査委員の一人であったので、平成５年度歴史の道調査報告書[8]に姶良町船津にある大隅国駅路の痕跡とみられる地割の写真を掲載した。この報告書にもとづいて平成13年末に姶良町教育委員会が発掘調査を行い、道路遺構を確認したとみられる。調査担当者からの平成14年年賀状で「船津の道路遺構を確認しました。現場は埋め戻しました」とのことを知った。詳細は姶良町教育委員会の発掘調査報告を待つ以外にないが、大隅国・薩摩国で駅路遺構が明らかになった最初の場所である。これを起点として周辺に調査が拡がることが期待できる。まずそのことを慶びたい。

西海道諸国の駅路想定図は、鹿児島県の場合いろんな概説書・歴史地図のどれを見ても文字通り各種各様である。市来駅[7]・田後駅・高来駅・大水駅の所在地をつき止めなければ、問題は解決しない。県立埋蔵文化財センターをはじめ市町村教育委員会に多くの埋蔵文化財担当職員が配置されているが、積極的に駅家や官道を追求する姿勢は感じ取れない。官道を抑えることは、郡・郷の中心を探る捷径である。歴史地理学・歴史考古学の基本から入って行くことが着実な探査方法と考える。

2　古道を探る方法

古代・中世・近世各時代の道は、現在ではすべて古道になった。道路そのものはどのような時代であっても、政治的要地や経済的要地を結ぶものである。その視点に立つと、道路は古代・中世・近世を通じて大きく変わるものではない。古代の道（駅路・伝路）は「すべて国府に通じる」とみ

なしてよい。中世の道は古代の道を踏襲したものであり、軍事的要衝には必ず山城が築かれ、守護大名・戦国大名の居城・居館が交通路の結節点になっていたと考えるべきである。近世の道は元禄絵図・天保絵図・伊能測量図なども現存しているので、本稿では取り上げない。古代の道を探る方法についてのみ意見を述べる。

（1）注目すべき史料

1029年（長元２）　平季基等が大隅国府・守館・官舎・民烟・藤原良孝宅を焼き払う（小右記）
1132年（天承２）　往古の大路、宮坂の麓の石躰に八幡の御名顕現す（石清水文書）
1177年（治承１）　島津庄……とかみ・けしきの森……正八幡宮……（長門本平家物語）
1197年（建久８）　帖佐郡371丁、蒲生院119丁……加治木郷121丁７反……（建久図田帳）

日本史上最大の荘園となった島津庄の開発者平季基が、1029年に大隅国府を焼き討ちしている。この時の大隅国府がどこであったか、都城盆地から大隅国に攻め込んだ道はどの道であったかは将来考えなければならない素材である。また藤原良孝宅が焼かれているが、春日神社の存在が藤原氏の拠点を探る手がかりになる と考える。江戸時代、各郷に総廟（惣廟・鎮守神・総鎮守・総鎮・宗廟・宗社ともいう）が置かれているが、春日神社を総廟とするのは加治木郷だけであり、加治木と藤原氏の結び付きが深かったことを示している。今後の検討材料になろう。

石清水文書に見える「往古の大路、宮坂」という1132年の史料は、大隅国から肥後国・日向国へと北上する駅路が12世紀前半には「往古大路」と呼ばれる存在になっていたことを示す。隼人町にある石躰神社の前に「宮坂橋」が現存している。

長門本平家物語に見える1177年俊寛らが流されて来る道の記事がある。俊寛配流の道を大隅国・日向国を結ぶ駅路とみる見方もあるが[8]、バイパスの一つと考えたい。

1197年の大隅国図田帳記載の桑原郡各郷の田数を見ると、帖佐が最大であり、しかも帖佐郡と記されているので、桑原郡家は帖佐にあった可能性が大である。蒲生駅・桑原郡家・藤原良孝宅探しを大隅国駅路と併行させることも必要だろう。

（2）八幡社の分布から考える　―― 歴史地理学的方法（その１）

西海道諸国の一之宮を列挙すると、次のようになる。筑前（筥崎八幡・住吉大社）、筑後（高良大社）、豊前（宇佐八幡）、豊後（柞原八幡）、肥前（千栗八幡）、肥後（阿蘇神社）、日向（都濃神社）、薩摩（枚聞神社）、大隅（鹿児島神宮：大隅正八幡）、壱岐（天手長男神社）、対馬（海神神社）。これらを見ると、八幡社が多いことに気付く。八幡信仰は宇佐八幡に始まり、９世紀になると国分寺の鎮守神として勧請されて国分八幡と呼ばれるようになる。西海道諸国すべてについて眺めていないので言及は出来ないが、大隅国・薩摩国の場合は大隅国府（大隅正八幡）・薩摩国府（新田八幡）・蒲生駅（蒲生八幡）・出水郡家（箱崎八幡）・鹿児島郡家（荒田八幡）などが八幡社と結びついており、郡家・駅家など官衙の所在地に八幡神が勧請された所が多いと見当をつけることが出来る。

《薩摩国＝大隅国を結ぶ道》

薩摩国府	……	塔之原	……	蒲生	……	鍋倉	……	木田	……	高井田	……	内	……	大隅国府
新田八幡		若宮八幡		正八幡若宮		新正八幡		弓箭八幡		高倉八幡		大隅正八幡		府中

《大隅国＝日向国・肥後国を結ぶ道》

大隅国府……内……万膳……米永……川西……鶴丸……日向国
府中　大隅正八幡　八幡神社　正若宮八幡　箱崎八幡　八幡神社

市山……目丸……太田……山野……肥後国
箱崎八幡　西原八幡　郡山八幡　八幡神社

《薩摩国＝肥後国を結ぶ道》

薩摩国府……草道……大川……山下（阿久根）……野田……西出水……鯖渕……肥後国
新田八幡　若宮八幡　八幡宮　若宮八幡　若宮八幡　箱崎八幡　若宮八幡

八幡社の分布を調べることは、八幡社を直接結ぶという意味ではない。所在する郷や村の中に残っている道を古道として見直すことである。なお鹿児島県内の八幡社についてはリスト＝アップしてあるが、ページ数の都合上、割愛する。

（3）「大人足」地名の分布から考える ――― 歴史地理学的方法（その２）

平成14年正月、前述した木下良古代交通研究会長からの年賀状に「大人足」地名のことが記されていた。「30年前の調査で肥後国の駅想定地に大人足地名があることを知りましたが、意味は判りませんでした。昨年、木本雅康君（前述）が古代駅制と巨人伝説の関係を雑誌『本郷』に書きました。……駅路の大規模な切通しを巨人の足跡と見たようです」と。その返事に地名カードに記録してあった県内の「大人足」地名を眺めると、すべての道路と結びつくと回答した。

（大隅国）
1．大人形――牧園町下中津川
2．大人形――横川町上ノ
3．大広形――菱刈町徳辺
4．大人足形――福山町佳例川
5．人足形――垂水市牛根境
6．大　人――末吉町二之方
7．大人足――志布志町安楽

（薩摩国）
8．大人足――出水市武本
9．大　人――野田町下名
10．大　人――阿久根市大川
11．大人跡――串木野市下名
12．定之足形――川辺町野間
13．大広形――鹿児島市犬迫
14．大人足形――鹿児島市川上

これらのうち、１・２・３は大隅国＝肥後国を結ぶ駅路と、８・９・10は薩摩国＝肥後国とを結ぶ駅路（もしくは伝路）との関連が考えられる。民俗学の対象であった巨人伝説地名が、古道を探す歴史地理学的な視点で注目されることになった。

（4）交通要衝の立地から考える ――― 歴史地理学的方法（その３）

鹿児島県96市町村の立地を見ると、２／３が海岸線をもっている。今までは陸上交通のみにとらわれていた嫌いがある。海上交通を重視すると違った視点が生まれて来る。県内の主な市・町は、ほとんどが水陸交通の要衝に位置している。その視点に立つと、古道・駅家を探すには水陸交通の要衝に目を配る必要がある。以下、目配りの要項を箇条書きにしてみる。

1．港町として栄えた――大隅国・薩摩国の場合はほとんどが河口港であった。
2．河川の分岐点（本流・支流の合流点）――近くに中世の山城が築かれている例が多い。
3．豊富な清水――沿岸航路の場合は泊地で飲料水を得ることが出来るが、外洋航海となると飲料水の確保は必須条件となる。陸路の場合でも清水・泉の存在は無視出来ない。

4．渡河地点の確認―――昔の渡河地点は限定された。随所に渡し船があったのではない。

5．峠に連なる道―――国境を越える道は、大隅国＝日向国を除けばほぼ決まっている。

大隅国＝薩摩国の駅路―――新留峠を越えたと考えられる。

大隅国＝肥後国の駅路―――亀嶺峠を越えて水俣・佐敷に出た。加久藤峠を越えて人吉に出るルートは日向国真幸駅を経由しなければならない。

薩摩国＝肥後国の駅路―――海岸沿いの道に峠はない。但し、バイパスの場合、川内・出水の間には横座峠、出水・水俣の間に芭蕉越があった。

大隅国＝日向国への道―――いろいろなルートが考えられる。

①国分……敷根……福山……亀割峠……牧之原……都城（島津駅）

②国分……敷根……門倉薬師……上之段……牧之原……都城――（上井覚兼日記）

③国分……止上……財部……都城――――――――――――――（長門本平家物語）

④国分（浜之市）……松永……大窪……日向国高原――――――（西藩野史）

⑤国分……溝辺……横川……栗野……吉松……日向国真幸

⑥国分……松永……牧園……栗野……吉松……日向国真幸

⑦国分（浜之市）……（途中不詳）……栗野……日向国白鳥岳

①近世の高岡筋（日向街道）、②中世の日州通道、③俊寛配流の道、④島津義弘の関ヶ原から帰還の道、⑤天降川右岸を北上する道：宇佐八幡の密使が大隅正八幡を焼き払い、討たれたとの伝説（十三塚）が溝辺にある、⑥天降川左岸を北上する道：松永に「古道」の地名がある、⑦元禄時代に東大寺再建用の材木を運び出した道。その他にも二・三あるが駅路・伝路とは結び付かないので省略する。

航空写真を利用する方法もよく言われるが、慣れないと難しい。立体鏡を購入して試みるが持てあましている。本稿では触れない。研究者が上空から観察できると違う視点も出て来るだろう。

（5）墨書土器・蔵骨器の出土分布から考える ――― 歴史考古学的方法（その1）

上記（2）～（4）で述べたルートについて機会があるたびにトレンチによる確認調査を実施し、消去法でしぼっていけば、おのずから結論を見いだせるであろう。他県では墨書土器の出土例が多いので、考察のてがかりとはなりにくいだろうが、鹿児島県の場合、墨書土器・蔵骨器などの出土分布は官衙・官道の存在と結び付いている。参考文献名[9]をあげておくのでそれに依られたい。

（6）地割の方位・直線的道路に留意する ――― 歴史考古学的方法（その2）

奈良・平安時代の建物や地割の方位には真北すなわち北極星を見通した方向をよく用いていた。このことは薩摩国府・国分寺、大隅国府・国分寺の地割にも用いられていた。真北の方位は鹿児島県の場合は磁北から西に5度乃至6度振っている。すなわちN５° E～N６° Eの範囲とみられる。５万分之１図や２万５千分之１図に「６° 西偏している」などと注記されている。鹿児島市の場合は現在は「６° 西に振る」とあるが、昭和40年代の地形図では「５° 20′ の偏り」となっている。時期的に若干のずれがあるのであろう。クリノメーターで方位を見る時は５度と６度を厳密に見分けることは困難であり、おおよその数値で判断せざるを得ない。

西出水小学校脇の道を正午すぎに歩いていた時、自分の影が道路と併行しているのに気付いた。何気なく顔をあげて道路の延長を見やると、鳥居が見える。足を伸ばして行くと、箱崎八幡（出水

郷の総廟）だった。しかもその道路は直線的な道。後日、クリノメーターで測ると大体Ｎ５°Ｅ、真北の道路と知った。その道路を反対方向に南に約３km 行くと、道から少し降りた平良川の岸に小字「市来・上市来」がある。市来駅の有力比定地とのことで、出水市教育委員会によって発掘調査もなされた。発掘現場を見学したが、氾濫原に営まれた水田の中であり駅家跡に結び付くのかと、首をひねらざるを得なかった。その道路の延長は横座峠を越えて、後の高城麓や薩摩国府に向かう道である。仮に駅路とすると英祢駅を通らない道になる。但し、高城麓に高来駅があったと仮定すると意味もある道になる（近世では高尾野往還と呼ばれる道で伊能地図にも記載ある）。またその南北路とほぼ直交して出水高校の前を東西に走る直線的な道路は近世の出水筋（薩摩街道）であった。昭和10年代までは松並木が残っていたという。

西出水小学校一帯の小字は「政所（マドコロ）」。政所に隣接して小字堀ノ内（出水工業高校敷地）小字関屋町（出水高校敷地）がある。この一帯に出水郡家を求めるべきと考える[10]。

古代の官道は数多くの調査例から直線的である場合が多い。直線的な道路が真北の方向にもとづくものであったり、少しずれて春分の「日の出」の方向であることに気付けば、古道とみなしてよいだろう。

３　大隅国・薩摩国の駅家追求の問題点

従来、延喜式記載の駅名の順序が「市来」から始まっているために出水市内に求めなければならないとの先入観に支配されて来た。市来駅を先頭に考える論者たちが末尾に記されている高来駅の位置を考慮に入れないのは不思議な話である。字義通りの地名を考えると、高城郡家の地が最有力候補となり、網津駅と田後駅の間に求めるのが筋だと考える。また駅家所在地が水陸交通の要地であったと仮定すると、中世・近世を通じて水陸交通の要地であった市来院の地に市来駅を求めるのは自然の推理でもある。薩摩国の入口にあった出水郡家の地が駅名記載にもれていたと考えてよいと思う。市来駅出水市内説を打破するためには、諸国の駅家比定地で小字名をもって駅家に当てる例がどれほどあるかをチェックする必要がある。

大水駅・高来駅の所在地をはじめ、大隅国・薩摩国の官道は難問の山積みが現実である。この一文か解決の突破口となれば望外の喜びである。

【　註　】

1～3　『薩摩国府跡・国分寺跡』　鹿児島県教育委員会　1975
4　『大隅国分寺跡』　国分市埋蔵文化財発掘調査報告書（７）　国分市教育委員会　2002
5　『宮田ケ岡窯跡』　姶良町埋蔵文化財発掘調査報告書（７）　姶良町教育委員会　1999
6　『歴史の道調査報告』第２集「大口筋・加久藤筋・日向筋」　鹿児島県教育委員会　1994
7　『市来遺跡・老神遺跡』　出水市埋蔵文化財発掘調査報告書（４）　出水市教育委員会　1995
8　小園公雄　「大隅国府と日向国島津駅との古代官道について」『鹿大史学』第39号　1991
9　池畑耕一　「文字資料土器と蔵骨器の出土分布」『南端の文字文化』　1996　所収
　平田信芳　『地名が語る鹿児島の歴史』春苑堂出版　1997　p78に上記分布図を引用
10　平田信芳　ibid.　p124-p128　「出水郡家と市来駅の問題」

南九州の古代交通と中原遺跡

永　山　修　一（ラ・サール学園）

はじめに

古代交通についての研究は近年急速に深化してきた。古代の日向・大隅・薩摩に関しても研究が蓄積されつつある状況である[1]。古代交通については，陸上交通と水上交通やその結節状況　について見ていく必要があるが，本稿では，南九州の陸上交通について概観し，その後，中原遺跡が立地する鹿児島県姶良郡姶良町の古代の歴史的環境について見ていくことにする。

1　南九州における陸上交通

（1）律令制下における陸上交通

律令制下における陸上交通の基本的な内容については，養老令の厩牧令14須置駅条と16置駅馬条が重要である。それによれば，諸道には，原則として30里（約16km）毎に駅を置いて，駅馬を備え(備えるべき駅馬の数は大路20疋，中路10疋，小路５疋)，駅の利用者に便宜を供することになっており，また郡ごとに５疋の伝馬を置くことになっていた。

古代官道に関する現時点における研究成果を大まかにまとめると次のようになる[2]。

1　官道には駅路と伝馬路があり，それぞれ駅馬・伝馬が置かれていた。駅路と伝馬路は本来別の性格を持って成立した[3]。

2　駅制は都と国府相互の通信制度であり[4]，30里ごとに駅家を設置し一定数の駅馬を置き，駅鈴を携行する官人の旅行や緊急連絡の馳駅，文書の逓送に利用された。財政的には，駅起田・駅起稲が設定されるなど，郡から相対的に孤立した位置づけがなされた[5]。また，駅路には軍用道路としての機能もあった[6]。

3　伝馬制は，国造以来の供給制度を継承した[7]各郡の「伝」の機能の一部を律令国家が掌握するかたちで[8]，都からの使者の送迎制度として成立し，各郡に５疋の伝馬が置かれ，国司の赴任や罪人の護送に用いられ，また国府と郡家を結ぶものでもあった[9]。

4　都と国府を結ぶ駅路は，最短距離で結ぶために直線的路線をとって設定された計画道路であり，８世紀代には平野部で12m前後の道幅を有していた。郡家を結ぶ伝馬路・伝使往来路は，地方豪族の拠点を結んでいた自然発生的な道路を下敷きとし，改良して一部には直線道路などとして設定された。道幅は，６m前後の場合がある。

5　８世紀末～９世紀初頭に駅家・駅路の整理が行われ，駅路が伝馬路に統合され，道幅も６m前後になることもあった。この変化以前を「前期駅路」，変化以後を「後期駅路」として把握することができる[10]。そして，『延喜式』に見える官道は，さらに変更を加えられた「後期駅路」ととらえることができる。

（2）南九州の官道

10世紀に成立した『延喜式』兵部省の諸国駅伝馬条には次のような記載がある。

薩摩国駅馬【市来，英祢，綱津，田後，櫟野，高来各五疋】　伝馬【市来，英祢，綱津，田後駅各五疋】

大隅国駅馬【蒲生，大水各五疋】

日向国駅馬【長井，川辺，刈田，美祢（美祢），去飛，児湯，当磨，□田（九条家本「広田」・流布板本「石田」），敕麻，敕茂，亜耶，野後，夷守，真研，水俣，島津各五疋】

伝馬【長井，川辺，刈田，美祢，児湯，去飛各五疋】

このうち，櫟野駅については，『日本後紀』延暦二十三年（804）三月庚子（25日）条に「太宰府言す。「大隅国桑原郡蒲生駅と薩摩国薩摩郡田尻駅と相い去ること遙かに遠し。運送に艱苦す。伏して望むらくは駅を薩摩郡櫟野村に置き，以て民苦を息めんことを」と。之を許す。」との記事があり，９世紀初頭に設置されたことがわかる。

南九州の伝馬制の大きな特徴の第一は，本来郡に置かれる伝馬が駅に置かれていることである。日向国の場合は，郡域が広大なため，運送能力を維持するために，伝馬を駅に置いたと考えることができるが[11]，薩摩国の事情については明らかでない。特徴の第二は，駅路が複線的に設定されていることである。これは７世紀末から８世紀前期にかけてしばしば隼人と律令政府との武力衝突が起こっていることからすれば，軍事的な要請によって複線的なルートが設定されたと考えられる。特徴の第三は，大隅国の駅が２駅と極端に少なく，また伝馬の記載が見えないことである。この問題については後述する。

第５図は，これらの『延喜式』所載の駅を可能な限り地図に落としたものである。南九州における駅路の名称については，一般に肥後国府・薩摩国府を経由して大隅国府に至るものを西海道西路，豊後国から日向国府を経て大隅国府に至るものを西海道東路とよぶ。また，水俣から東に向かい日向国府に至るものを肥後日向路という。この肥後日向路から南下して大隅国府に至るものを大隅路とし[12]，大隅路を経て肥後水俣に至るルートを肥後大隅路，同じく日向児湯に至るルートを日向大隅路としておく。

７世紀段階で存在の推定できるルートは，『日本書紀』の景行天皇巡幸ルートから，真研以東の肥後日向路，『続日本紀』文武三年（699）十二月甲申条から三野城と稲積城とを結ぶルートである。三野城は日向国児湯郡三納郷（宮崎県西都市周辺），稲積城は大隅国桑原郡稲積郷（鹿児島県国分市周辺）と，ともに国府所在郡内に比定されており，この両城を結ぶ軍用道路の存在が想定できる。

肥後国府と薩摩国府を結ぶルートは，大宝二年（702）の薩摩国の成立を契機として設置されたと考えられ，また薩摩国府及び日向国府と大隅国府を結ぶルートも，和銅六年（713）の大隅国の成立を契機にするものと考えられる。

さて，南九州において，駅路は複線的に設定されていたが，大隅国からの駅路の中でどれが主要なルートであったかが問題になる。これに関して，『延喜式』（主計上）を手がかりに考えてみたい。『延喜式』（主計上）には管内各国の調・庸等を運送する際の太宰府間の所要日数が記されており，薩摩・大隅・日向の３国についてはともに「上十二日　下六日」となっている。大隅国府から西海道西路をとって太宰府に向かった場合，その所要日数は薩摩国府～太宰府に大隅国府～薩摩国府のそれを加えたものにならなければならないが，『延喜式』（主計上）では，薩摩国府～太宰府と大隅

第５図　南九州における古代の駅および駅路

国府～太宰府の所要日数は同じになっている。すなわち，９世紀段階で，少なくとも調・庸を太宰府に運ぶ場合，西海道西路ではなく肥後大隅路が主に用いられていたことがわかる。

現時点でこの肥後大隅路上に比定されている駅は，肥後国の仁主（正しくは仁王）駅しかない[21]。大隅国の蒲生・大水の２駅のうち，先述のように蒲生駅は西海道西路上に所在した。大水駅については，西海道西路上・肥後大隅路上・西海道東路上に求める説があり，定説を見ていない。また，大隅国内に，西海道西路・西海道東路・肥後大隅路があることからすれば，16km ごとに置かれるはずの駅は，数駅以上あったはずであるが，『延喜式』に２駅しか載せられていないのは，後期駅路への転換に際して一部廃止され，なおかつ『延喜式』に脱漏があると考えなければならない。

（3）駅路以外の道

すでに指摘しておいたように，南九州の場合伝馬が駅に置かれていることから，駅路と伝馬路はほぼ一致すると考えられる[14]。また，国府と各郡家や各郡家間を結ぶ伝路（伝使往来路）もあったが，南九州ではその存在を直接的に示す文献史料は管見にふれない。ただし，近年薩摩半島各地で「厨」墨書土器が出土している。地図中の，薩摩国府（川内市）・安茶ケ原遺跡・市ノ原遺跡（市来町）・一之宮遺跡（鹿児島市）・橋牟礼川遺跡（指宿市）がその出土遺跡であり，平川南氏の研究によれば[15]，「厨」墨書土器は国府・郡家あるいは交通路上から出土することが多いという。安茶ケ原遺跡出土の土器には「日置厨」とあり，一之宮遺跡は甕嶋郡家と，橋牟礼川遺跡は揖宿郡家との関連が指摘されているから，８世紀末の時点で薩摩半島の南端に至るまで郡家の施設が設けられ，そうした郡家間をつなぐ道路も整備されていたと考えることができる。

（4）考古学から見た古代の道路

南九州で確認されている古代の官道については，城ヶ崎遺跡（姶良町）・中原遺跡（姶良町）・草刈田遺跡（宮崎県えびの市）・並木添遺跡（宮崎県都城市）・湯牟田遺跡（宮崎県川南町）が注目される。このうち，城ヶ崎遺跡・草刈田遺跡・並木添遺跡は駅路の想定ルート上から検出されている[16]。湯牟田遺跡では，古墳時代以降の遺跡が東西方向に重なり合って検出されているが，推定されている駅路とは重ならない。しかし，古代の道は両側に側溝を持つ幅５ｍほどの規模であり，駅路・伝馬路とは言えないまでも，伝路（伝使往来路）の可能性は考えてみる必要があろう[17]。中原遺跡については後述する。

2　中原遺跡の歴史的環境

（1）大隅国の成立と移民による郷

『続日本紀』和銅六年（713）四月乙未条の「日向国肝坏・曽於・大隅・姶羅の四郡を割きて，始めて大隅国を置く。」という記事によって，大隅国は，和銅六年四月に日向国の四郡を割いて設置されたことがわかる。『続日本紀』同年七月丙寅（５日）条には隼賊（隼人）を討った将軍以下士卒に至るまで，戦陣に功有った者1280余人に勲位を授けることが見えるから，この設置に際して，隼人の抵抗が起こっていたことがわかる。『続日本紀』の翌七年三月丁酉条によれば，政府は，隼人を教導するために豊前国から200戸の移民を行った。730年代の状況を示すという『律書残篇』には，大隅国が５郡，19郷，27里から成るとの記載があるから，建国時点から増加したのは，桑原郡と考えられる。10世紀の状況を示すとされる『和名類聚抄』には，桑原郡の郷として大原・大分・豊国・答西・稲積・広西・桑善・仲川の８郷が記されており，このうち大分は豊後国大分郡との関連が，豊国は豊前国との関連が知られるため，移民は『続日本紀』に見える豊前国だけでなく豊後国からも行われていたことが分かる。

大分・豊国の両郷の所在地については明らかでないが，国分市上井に所在する韓国宇豆峯神社は豊前系の神社とされているから[18]，あるいはこの付近に豊国郷を比定することが可能かもしれない。もう一つの大分郷については後述する。

（2）姶良町域の歴史的環境

中原遺跡の所在する姶良町域が古代の何郷であったかについては明らかでないが，宮田ケ岡窯跡

の存在から大分郷をここに比定する説がある[19]。この説が，妥当であるか否かについて考えてみる。

給良町域には，萩原遺跡・宮田ケ岡窯跡・小瀬戸遺跡・小倉畑遺跡など特筆すべき遺跡がいくつか存在する。

萩原遺跡では，奈良・平安時代の石室墓が検出されており，これは，同時代の薩摩・大隅では確認されていない墓の形態である。また須恵器・内黒土師器・刀子などが出土しており，なかには判読できないものの墨書・線刻土器が含まれている。

宮田ケ岡窯跡は，大隅国分寺の瓦を焼いた窯跡である。この窯は，先行する須恵器窯などの伝統の上に立って成立したというよりは，国分寺などの瓦を生産する必要性のもとに造られたと言え，律令制度の諸原則が適用されていた地域の中に位置していたと考えられる[20]。

小瀬戸遺跡では，掘立柱建物跡，井戸跡などの遺構が検出され，須恵器・土師器・瓦・越州窯青磁・「雄」「原」などの墨書土器・「仲家」「大伴」などの刻書土器が出土しており，官衙的色彩の強い遺跡だとされている。

小倉畑遺跡で検出された古代の遺構は，方形周溝墓であったが，遺物としては，ピンササラの部品かとされる付札状木製品，灯明皿，須恵器・内黒土師器などが出土しており，なかには「寺」と判読できそうな墨書土器が含まれている。近接地点に，寺などの施設があった可能性がある。

薩摩・大隅両国に対する班田制の適用は，延暦十九年（800）のことであり，これ以前には，両国内に律令制度が完全に適用される地域とそうでない地域が並存したと考えられる。

上述した現在の給良町域の様相からすると，当該地域は，桑原郡内でも先進地帯であったと考えられ，移民によってつくられた郷であった可能性が高いと言える。ただしそれが大分郷であるかは，今のところ明らかではないし，今後，加治木町・蒲生町域での調査成果によっては再考の必要性が生じる可能性がある[21]。

（3）中原遺跡の道路状遺構について

中原遺跡の道路状遺構は，城ヶ崎遺跡の駅路遺構と時期的には並行するものと考えられる。城ヶ崎遺跡は，駅路痕跡遺跡と考えられているので，中原遺跡で確認された道路遺構を駅路とすることはできない。

さて，宮田ケ岡窯跡・小瀬戸遺跡・小倉畑遺跡など公的性格を帯びた施設へは，駅路から分かれた道路が延びており，これらは大隅国府への連絡路としての道路であったと考えられる。中原遺跡は，国府から見てこれらの遺跡より以遠に所在する。したがって，問題は，この道路が思川沿いに北行し駅路に合流するのか，あるいは近世の白銀坂のルートと同じように，南行して薩摩国甕嶋郡方面へつながるのかである。

『出雲国風土記』には，駅路以外にも他国に通じる道路があったこと，そしてそのいくつかには常置あるいは臨時の戍が置かれていたことが知られている[22]。これを参考にすれば，大隅国桑原郡と薩摩国甕嶋郡を結ぶ道路があったとしても不思議ではなく，今後の調査に期待がかかるところである。また，この地域が国境に位置するものとして，戍が置かれた可能性も考えてみる必要がある。

おわりに

以上，南九州の古代交通について概観し，中原遺跡の歴史的背景について見てきたが，いずれも不充分な考察に終始してしまった。特に姶良町域の歴史環境については，静態的な考察になってしまった。また，『三代実録』貞観二年（860）十月八日条に見える大隅国の吉多・野神二牧についても[27]，道路と密接な関係を持つと考えられることから関説すべきであったが，こうした点については他日を期することとしたい。

今後，考古学の面での調査が進み，地方におけるいろいろなレベルの道路についての研究が進展することを期待して，擱筆することにする。

【 註 】

1 陸上交通に関する，1970年代の歴史地理学による研究成果としては，藤岡謙二郎「日向国」「大隅国」「薩摩国」（藤岡謙二郎編 1979 『古代日本の交通路Ⅳ』大明堂）があるが，1990年代以降歴史地理学，歴史学，考古学の各分野で積極的な研究が見られるようになった。その成果の主なものをあげると，以下のようになる。柳雄太郎 1990 「古代西海道の交通制度－伝制を中心に－」『宮崎県史研究』第４号，池畑耕一 1991 「英祢駅考」『肥後考古』８号，小園公雄 1992 「大隅国府と日向国府との古代官道について」『鹿大史学』39号，武久義彦1992 「明治期の地形図にみる大隅国の駅路と蒲生郡家」『奈良女子大学地理学研究報告』Ⅳ，平田信芳「大隅国府は帖佐に移動していた」（1993年５月４日付『南日本新聞』文化欄），平田信芳 1993 「古代の薩摩」（歴史の道調査報告書 第１集『出水筋』鹿児島県教育委員会），武久義彦 1994 「明治期の地形図にみる大隅国北部の駅路と大水駅」『奈良女子大学研究年報』第38号，茉畑光博 1994 「並木派遺跡が語るもの（上）」『季刊南九州文化』第61号，中村明蔵 1996 「隼人二国の公民移配地と官道について－律令国家の辺境支配に関連して－」『季刊社会学部論集』第15巻第３号 鹿児島経済大学社会学部，江平望 1996 「島津本荘から太宰府への道」『鳥津忠久とその周辺』高城書房出版，日野尚志 1996 「西海道」（木下良編『古代を考える 古代道路』吉川弘文館），木本雅康「古代日向国諸県郡の歴史地理」（第五回宮崎県墨書土器研究会（1996.8.11）口頭報告），平田信芳 1997 「地名が語る鹿児島の歴史」春苑堂出版，木本雅康 1997 「古代伝路の復元と問題点」『古代交通研究』第11号，永山修一 1998 「駅と交通」「日向の官道」『宮崎県史 通史編 原始・古代２』第２章第１節６項：特論Ⅰ，中村明蔵 2000 「九州西岸路道程の歴史的考察－古代薩摩・太宰府間の行程への一つの試み－」『地域総合研究』第27巻第２号 鹿児島経済大学2000年），永山修一「南九州の古代交通」・渡部徹也「南九州の道路の事例について」（ともに古代交通研究会 第11回大会（2002.9.15）における口頭発表，『古代交通研究』12号に掲載予定）

2 永山修一「日向国の官道」 p711～712

3 従来，「伝路」という語が用いられていた。しかし，この語は古代の史料にはほとんど見られない語であり，「都から」の使者の「送迎」制度として「伝馬」の置かれた道と各国における国府～各郡家の伝使の往来する道の区別があいまいになるとの指摘がある（1997年古代交通研究会 第六回大会の共同研究「律令国家と古代道－駅路・伝路の成立－」）。そこで本稿では，「都から」の使者の「送迎」制度として「伝馬」の置かれた道を伝馬路とし，各国における国府～各郡家の伝使の往来する道を伝使往来路とする。伝馬路と伝使往来路は一致する場合もある。

4 永田英明 1992 「律令国家における伝馬制の機能」『交通史研究』28号

5 市大樹 1996 「律令交通体系における駅路と伝路」『史学雑誌』第105編第３号 p59

6 木下良 1991 「古代官道の軍用的性格－通過地形の考察から－」『社会科学』47 同志社大学人文科学研究所

7 佐々木虔一 1995 「律令伝馬制の特色」『古代東国社会と交通』校倉書房 初出は1984年，p274

8 馬場基 1996 「駅と伝と伝馬の構造」『史学雑誌』第105編第３号 p75～77

9 永田英明 1992 「律令国家における伝馬制の機能」『交通史研究』28号

10 中村太一 1996 「計画道路体系の展開過程」『日本古代国家と計画道路』吉川弘文館 p51

11 永田英明 1993 「駅家経営の特質について」『古代交通研究』第２号 p2

12 大隅路については，平田信芳氏が，『宮寺縁事抄』所載の天承二年（1132）四月二十三日付正八幡宮牒に見える「於往古大路字宮坂麓」の記載から大隅国府より北へのびるルートの存在を想定し（『地名が語る鹿児島の歴史』，武久義彦氏が明治期の地形図等を利用して，歴史地理学の手法を用いてルートの推定を行った（「明治期の地形図にみる大隅国北部の駅路と大水駅」）。

13 木下良 1979 「肥後国」（藤岡謙二郎編『古代日本の交通路Ⅳ』大明堂）

14 木本雅康 1997 「古代伝路の復原と問題点」『古代交通研究』第７号に，よれば，肥後国から薩摩国へ入るルートについては，駅路は矢筈岳の東側を，伝路は矢筈岳の西側をというように異なるルートをとっていたという。

15 平川南 2000 「「厨」墨書土器論」『墨書土器の研究』吉川弘文館 初出は1993年

16 城ケ崎遺跡については本報告書掲載の下鶴弘氏の論考を参照されたい。草刈田遺跡については，『宮崎日日新聞』2002年12月４日付けの記事による。並木派遺跡に関しては，都城市教育委員会 1993 「並木派遺跡」『都城市文化財調査報告書』第24集，茉畑光博 1994 「並木派遺跡が語るもの（上）」『季刊南九州文化』第61号 南九州文化研究会，重永卓爾 1996 「島津本庄

島津院・北郷の開発と日置氏」『季刊南九州文化』第68号　南九州文化研究会を参照のこと。

17　吉本正典氏は，官道クラスのものとは見なしがたいとしている（「旧日向国における調査成果」『第５回西海道官衙研究会資料集』2002年９月15日）。

18　『鹿児島県の地名』（平凡社　1998　p657）韓国宇豆峯神社の項。

19　平田信芳　1997　『地名が語る鹿児島の歴史』春苑堂出版　p79。

20　永山修一　1999　「奈良・平安時代の大隅国分寺について」（始良町教育委員会『宮田ケ岡窯跡』）。

21　加治木町の高井田遺跡では，９世紀後半～10世紀前半の造水状遺構が検出されており，遺跡の性格として国司館・前司浪人等の豪族の居館・寺院などが考えられている。

22　内田律雄　1995　『出雲風土記』「志都美麦」推定地の調査」『古代交通研究』第４号

23　この２つの牧は，馬が繁殖しすぎて百姓の作業の障害となったためこの時廃止された。

周辺地形より見た道路遺構の考察

下　鶴　　弘（姶良町教育委員会）

1　はじめに

筆者は，本遺跡発掘中に道路遺構を見学する機会を得た。当時はどうしてこんな立派な道跡がここにあるのだろうという漠然とした感想しかもたなかった。しかしながら，その後「歴史の道大口筋白銀坂整備事業」に関連して，周辺の脇元や重富麓を調査した際に二，三気づいた点があるので，以下に記述しておきたい。今回検出された道路遺構の性格解明の一助となれば幸いである。

2　江戸時代の絵図

まず最初に，道路遺構のある脇元周辺の地形を考えるために江戸時代の絵図を確認してみたい。写真１は元文２年（1730）の『重富郷一所之地絵図』（姶良町歴史民俗資料館蔵）である。図中の鹿児島湾に注ぐ思川河口は，現在よりも南の脇元浦近くを流れている。写真２は天保年間頃の『重富郷絵図』（東大史料編纂所蔵）である。図中の黒い実線は村境を示し，内側は脇元村である。

「町」と記載された場所は脇元の「町」であり，四つの長方形街区によって町が構成されていることがわかる。町中を抜け帖佐境へ延びる道は大口筋であり，両側に並木が表現してある。

写真２では思川河口は二つに別れ，南は「古川跡」北は「新川筋」と朱書きがある。写真２以前の絵図には「新川筋」は認められない[1]。この河川変更が自然作用によるものか，又は人為的な「川直し」によるものかは定かでないが，周囲にも大きな影響を与えた出来事だったと想像される。恐らく今日我々の見慣れた風景も各時代に様々な地形の改変を受けてきたに違いない。

3　明治時代の測量図と小字図

第６図の明治35年測量図を見ると，「天保郷絵図」に見られた「古川」の痕跡は認められず，すでに水田化している。重富麓の成立は，江戸中期の元文４年（1739）に越前（重富）島津氏が創設され，私領として重富郷が与えられ，館（平松城・現重富小学校）及び麓（小字名「星原」）をこの地に構えた。浦町であった脇元は，重富郷創設により元文４年以降に整備し直されたと推測される。

ここで，第７図周辺小字図を第６図測量図と対比しながら見てみたい。思川の「古川跡」に対応する小字名は，「洲崎・旧塩屋・平俣・渡瀬」（耕地整理により字界変更の可能性がある）である。

「渡瀬」の南隣には「橋ノ口」があり，「古川」に関係した地名と考えられる。思川右岸の大きく蛇行した所には，「下水流」「中水流」という河川氾濫原に由来する字名があり，左岸側を長い年月をかけて浸食した経緯が読み取れる。今回の道路遺構は「白金原」に位置する。

また，周辺の地籍図を検討中に気付いたのだが，「西溝原・東溝原」に古い町割りの痕跡が認められた。第８図脇元・溝原地籍図がそれである。中央に道路が走り，短冊状の町割りと両端の横丁に特徴がある。近世の典型的な長方形街区とはやや異なり，ひとつ時代が古い印象を受ける。

写真１　『重富郷一所之地絵図』（姶良町歴史民俗資料館蔵）

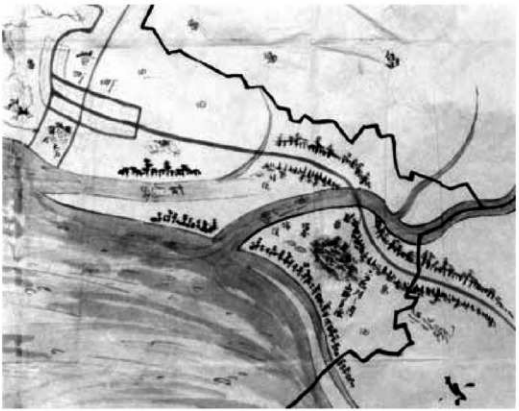
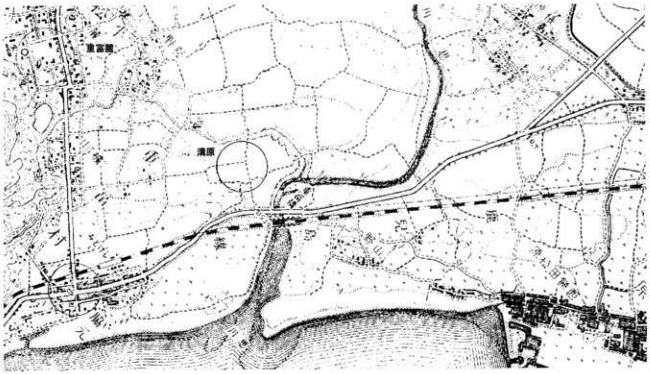


写真２　『重富郷絵図』（東京大学史料編纂所蔵・部分拡大）



第６図　明治35年の測量図（大日本帝国陸地測量部「加治木」二万分の一抜粋）

第７図　周辺小字図

第８図
脇元・溝原地籍図

4　脇元地区における大口筋の変遷

今回検出された道路遺構は，その規模と構造から鹿児島における近世の幹線道路と考えられる。しかしながら，現在この地を通る大口筋の想定ルート（旧国道10号）から170mほど離れており，そのまま接続していたとは考えにくい。街道は時代とともに変遷があったのではないだろうか。資料・文献が少なく論証は困難であるが，検出道路遺構の位置づけを大胆に以下推定してみたい。

第９図は，思川河口近くの蛇行がまだ見られない頃の大口筋想定路である。Ａ地点が今回の検出道路遺構箇所である。白銀坂からの降り口も愛宕神社の西側Ｓ（布引滝入口）を巡っていた可能性がある。降り口からＡ地点を経由して思川までは直線道路となり，Ｂ古川を直角に渡り，Ｃ－Ｄ－ア（高樋）を抜ける道を大口筋Ⅰと想定したい。Ｃ地点はその後に浸食されたと考えている。大口筋Ⅰの成立は，戦国時代末から江戸初期を想定している。

第10図によりＣ地点浸食後の大口筋Ⅱについて述べたい。白銀坂からの降り口は大口筋Ⅰと同じく，Ｓ－Ｅ（現町道）－脇元Ⅰ（溝原町割）－Ｆ（国道10号バイパス）－Ｇ－Ｈ（現青木水流橋）－アというルートである。街道上に脇元Ⅰという町割の創設と渡河点の変更が特徴である。なお，脇元Ⅰは地籍図のみを根拠に想定したので，今後の考古学的調査により検証する必要がある。

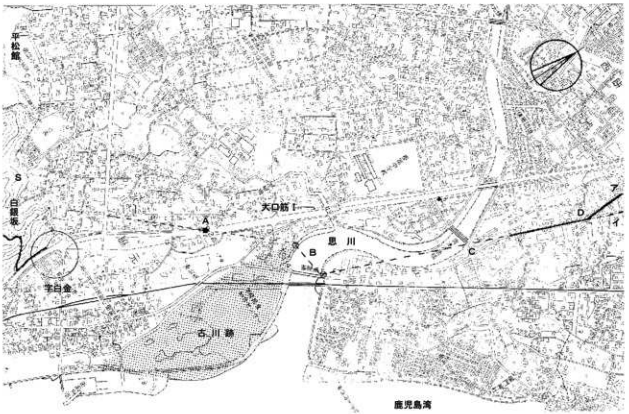
この大口筋Ⅱのルートも思川の氾濫により被害を受けたのであろう。特に，脇元Ⅰは標高が4.5ｍしかなく，東側Ｌには小河川（小字「橋ノ口・堀田・田尻」）が流れていた可能性があり，西側の狩川とともに「中の島」状の低位立地であった。このため早い時期に脇元Ⅰは見捨てられ，脇元Ⅱへの移住が行われたと思われる（規模はほぼ同じ）。これに伴い，大口筋の付け替えも行われたと推定される。つまり，白銀坂Ｒ－脇元Ⅱ・Ｋ－Ｌ（－Ｆ－Ｈ）の大口筋Ⅲである。この成立時期は，写真１の元文以前（1739）であり，脇元Ⅱも新しい街路Ⅴ（20間×60間の長方形街区）と古い街路Ｋ（短冊地割のみ。重富麓成立以前）に分かれるので，大口筋Ⅲは17世紀後半を想定し，元文以後に脇元Ⅱの新しい街路Ⅴが重富麓や栫山集落と共に計画的町割に基づき成立したと推定される。

天保年間には，写真２のとおり思川河口の変更があり，古川から新川筋となる。これによって再び大口筋の付け替えが行われ，脇元Ⅱ－Ｍ渡河点－Ｑ－イの大口筋Ⅳとなる。道路線形としては直線箇所がなくなり，脇元Ⅱが海へ張り出した形となった。大口筋Ⅳは明治６年以降も国道としてその役目を果たした。

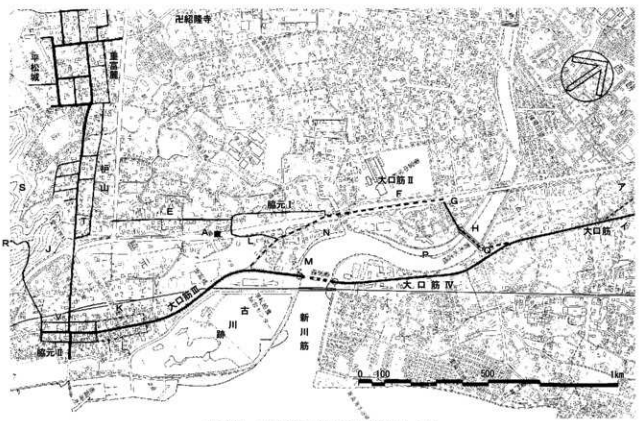
以上のとおり，脇元町・重富麓・思川の変化を基に大口筋の変遷を大口筋Ⅰ～Ⅳ期に想定してみた。その結果，今回の検出道路遺構は，現在知りえる最古の大口筋の一部である可能性が高く，貴重な発見であったと思う。勿論，前述の想定根拠が不十分であることは承知しているが，今後の調査課題として敢えて提起した次第である。

【　註　】

1　鹿児島県教育委員会　1997　「元禄十五年　薩摩國・大隅國・日向國　国絵図解説書」『歴史の道整備活用推進事業　鹿児島藩国絵図解説書』。川筋は「元禄国絵図」を参照した限りでは，『重富郷絵図』と同様（古川脉）の表記に見える。



第９図　大字脇元地内の大口筋Ⅰ



第10図　大字脇元地内の大口筋Ⅱ，Ⅲ

中原遺跡の近世における歴史的位置

松　尾　千　歳（尚古集成館）

近世における歴史的環境

近世，中原遺跡がある一帯は，大隅国脇元村に属していた。脇元村は，薩摩国との国境に位置する交通の要衝で，南部および南西部は薩摩国吉野村（現鹿児島市）・同宮之浦村（現吉田町）と，北部は大隅国平松村（現姶良町），北東部は思川を挟んで同西餅田村（同）と接し，東部は錦江湾に面していた。

中原遺跡の位置は，脇元村の北西部，平松村との村境近くである。ただ寛文４年（1664）の「寛文郷帳」（『鹿児島県史料集』23）で1,218石余りもあった村高が，天明３年（1783）の内高によったとされる「三州御治世要覧」（『鹿児島県史料集』25）ではわずか283石余りとなっており，逆に隣接する平松村の村高が350石余りから2,038石余りへと増加しているので，村境は変わった可能性もある。

さて，薩摩藩は外城制度という独自の領国支配体制をとっていた。これは領内（琉球国を除く）を外城（のち郷と改称）という百余りの行政区画にわけ，外城衆中（のち郷士と改称）を配置して，その地域と行政と防衛に当たらせるというものである。外城は１村ないし十数ケ村からなり，中心となる村に武家集落の「麓」が置かれた。農業地は「在」と呼ばれ，商業地の「野町」，漁業・水運業を生業とする浦人たちが住む「浦」がある場合があった。外城の数は，近世前期は再編成が繰り返され一定ではなかったが，延享元年（1744）の今和泉郷（現指宿市）創設を最後に113に落ち着いた。また，外城には藩直轄地のもと，一門・一所持という上級家臣が領有する私領があり，麓に置かれた役所も直轄地の場合は「地頭仮屋」，私領の場合は「領主仮屋」と称した。

近世初頭，この脇元村が属していたのは帖佐外城（郷）であった。帖佐外城は脇元村の他，平松村・春花村・船津村・西餅田村・東餅田村・三拾町村・鍋倉村・豊留村・中津野村・深水村・増田村・住吉村・永瀬村の14ケ村かになり（いずれも姶良町），藩直轄の外城であった。地頭仮屋は，帖佐外城の東端に位置する鍋倉村の現帖佐小学校敷地に置かれ，その周囲に麓と納屋町という野町が形成されていた。脇元村は帖佐外城の西端に位置しており，中原遺跡からこの地頭仮屋までは５kmほどもあった。また，浦町は，鍋倉村の南側に位置する東餅田・西餅田村にまたがって松原浦が，脇元村に脇元浦が置かれていた。

元文２年（1737），22代島津継豊は，弟忠紀に越前家の名跡を継がせて，１万石を与え一門家に列せさせた。越前家は初代島津忠久の次男忠綱を祖とする家で，忠久が越前国守護職も兼任していたことから，その守護代として越前国を統治していた。鎌倉時代末，越前家の拠点は播磨国下揖保荘に移り，天文３年（1534），15代忠長が播磨国朝日山で討ち死にして家は断絶していた。その名跡を継がせたのである。そして元文３年には，１万石の内として帖佐外城から脇元村・平松村・春花村・船津村を，薩摩国吉田外城から東佐多浦村内触田村を割いて忠紀に与え，新外城を創設，同４年，新外城を重富と命名した。重富の名は，越前家が鎌倉時代に本拠としていた越前国重富（現福井市）にちなんだものである。重富外城は越前家の私領で，平松村の平松城跡（現重富小学校）

に領主仮屋が置かれ，その周囲に武家集落が形成されていた。中原遺跡から領主仮屋や麓地区までは西北西へ約700m，越前島津家の菩提寺・紹隆寺へは北西へ500mほどしか離れていない。帖佐外城時代と違い，外城の中心地近くに位置することになったのである。

大口筋と脇元浦

そもそも脇元村は，陸上交通路と海上交通路が交わる交通の要衝で，主要街道の一つ大口筋が村を東西に貫き，思川河口付近に形成された脇元浦は鹿児島城下と重富・帖佐・蒲生方面とを結ぶ港町として栄えていた。

大口筋は，鹿児島城下から重富・加治木・横川・大口を経て肥後国水俣に至る街道である。肥後街道とも称された。その経路は，鹿児島城（鶴丸城）から東に進み，柳町から北へ向かって鹿児島城下北東部の島津家菩提寺福昌寺（現鹿児島市立玉龍高校）の脇を抜け，たんたど坂を登って吉野台地に入り，台地の東端近くから白銀坂の峡険を下って大隅国脇元に至る。白銀坂の途中には薩摩国と大隅国の境を示す境石があった。脇元から思川を渡って帖佐・加治木に至り，加治木で日向方面へと進む日向筋と分岐した。加治木からは大隅国内を北上し，溝辺・横川に入り，ここで日向国人吉方面へと向かう加久藤筋と分かれた。さらに横川から湯之尾（現菱刈町）・馬越（同前）などを抜け薩摩国山野郷小川内村（大口市）に至り，ここから亀坂を登り亀嶺峠を境に肥後国水俣へ入る。なお，日向筋は加治木から浜之市（現隼人町）・敷根（現国分市）・福山・財部などを経て日向国都城に入り，高岡・倉岡（現宮崎市）を抜け，佐土原城下へ至った。また加久藤筋は，横川から栗野・吉松を経て日向国加久藤（現えびの市）に入り，加久藤峠を越え肥後人吉へと至る。

鹿児島城下から陸路で大隅・日向方面へ向かう場合，ほとんどこの大口筋が利用された。また肥後方面へは，伊集院・串木野・阿久根・出水などを経て肥後水俣に至る出水筋が主に利用されたが，大口筋もよく利用されていた。

また，薩摩国と大隅国との間に横たわる鹿児島湾は，内海で波も静かであるため，湾内の海上交通も盛んで，脇元浦も鹿児島往来の発着所としてにぎわっていた。さらに脇元浦の西にある白銀坂は大口筋の難所の一つで，ここを嫌って鹿児島と脇元間は海路をとる場合もあった。なお，現国道10号の鹿児島から鹿児島湾沿いに脇元にいたる道は，明治６年（1873）に開通したものである。

文化７年（1810），脇元村一帯を測量した伊能忠敬の関係資料「九州東海辺沿海村順」（『鹿児島県史料集』Ⅹ「伊能忠敬の鹿児島測量関係資料並に解説」）に「脇元村家数百五十九軒，内二十六軒本村，百七軒浦町，七軒白浜，八件山野，十一軒椿山」とある。脇元村の三分の二ほどの世帯が脇元浦に住んでいたわけである。さらに，「要用集」（『鹿児島県史料集』29）に収録された嘉永５年（1852）の宗門手札改の記録をみても，島津周防私領重富の総人口が3,075名で，この内847名が浦人である。郷全体でも人口の28パーセントが脇元浦に集中していたことになり，浦の繁栄ぶりがうかがえる。また士族階級のものは1,239名，その多くは麓地区に住んでいたと思われる。中原遺跡は，麓地区と脇元浦地区という２つの人口密集地に挟まれた格好になっていたのである。

中原遺跡の道路遺構について

東京大学史料編纂所が所蔵する島津家文書の中に，天保８年（1837）の「重富郷絵図」がある。同図の右手に思川，その途中から古川筋が分かれその河口近くに脇元浦が描かれている。その脇元浦の中央を大口筋が東西に貫いている。『姶良町郷土誌』によれば，この道筋は旧国道10号の一つ海側寄りの道だという。浦の西側では北の平松村の方へ曲がり，白銀坂を登り，鹿児島城下へと通じている。東側では古川路沿いに東へ向かい，思川を渡り，平松村山野を抜け帖佐境へと至る。また脇元浦から北へ平松村の麓地区へ伸びる道が描かれている。この道は県道57号に相当する道と思われる。中原遺跡付近は田と記されている。

しかし，中原遺跡からは，近世のものと思われる幅６ｍの道路遺構が約50ｍにわたって出土した。災害等より損傷し，使用できなくなって放棄されたような状況がうかがえるものだという。大口筋の中で昔の面影をよくとどめている加治木の竜門司坂の道幅が約６ｍ，出土した道路遺構とほぼ同じ道幅である。さらに，白銀坂に近く，西餅田の方へ伸びていることなどから道路遺構は大口筋の一部ではなかったかと推測されている。

街道を付け替えた例はいくつか確認されている。まず薩摩国市来村（現市来町・東市来町）周辺の道については，東市来町在住の臼井氏が所蔵していた「臼井仁平太聞書」に安永６年（1777）街道を南側に造り直したことが記されている。そして，安永６年以前に使用されていた出水筋の一部と思われる道路遺構が，東市来町市ノ原遺跡から出土している。この道路遺構は幅1.5ｍ～２ｍ，長さ60ｍほどのものである。また「元禄大隅国絵図」（内閣文庫蔵）と「天保大隅国絵図」（同前）とを比較しても，小田村（現隼人町）辺りで日向筋か付け替えられていることが確認できる。「元禄国絵図」では海岸線沿いの道として，「天保国絵図」ではずっと北の野久美田村近くを通るように変わっているのである。距離にして１㎞ほど北へ付け替えられている。

両国絵図を比較しても，脇元村辺りの街道には変化が見られない。国絵図の縮尺は21,600分の１（１里６寸），中原遺跡の道路遺構と「重富郷絵図」に描かれた大口筋とのずれはおよそ300ｍほどで，国絵図の縮尺・精度を勘案すると変化が見られなくとも付け替えられた可能性はある。道路遺構が大口筋の一部であったかいなかは，新たな資料の発見もしくは，道路遺構の延長部分を発掘しなければ明らかにすることはできない。

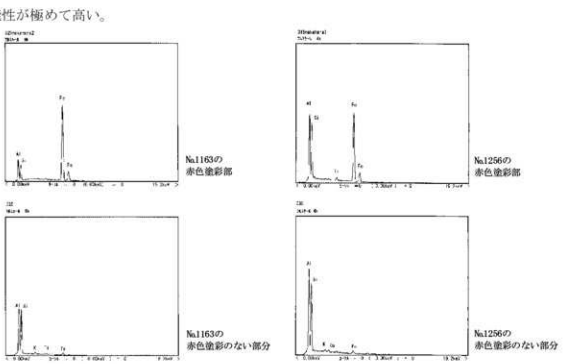
第11図　『重富郷絵図』（東京大学史料編纂所蔵）

中原遺跡出土土器に塗彩された赤色顔料の分析について

中原遺跡から出土した土器に付着した赤色顔料について実体顕微鏡，走査型電子顕微鏡による形状観察とエネルギー分散型Ｘ線分析装置（EDS）を用いてＸ線分析を行った。分析は鹿児島県立埋蔵文化財センター所蔵の機器を使用し，測定は永濱功治（鹿児島県立埋蔵文化財センター）が行った。

顔料とは着色剤の一種で，水には溶けない微粒子である。赤色顔料はその主成分から「ベンガラ」，「朱」，「鉛丹」の３種類に分けられ，ベンガラは酸化第二鉄（Fe_2O_3），水銀朱は硫化水銀（HgS），鉛丹は四酸化三鉛（Pb_3O_4）を主成分とする。ベンガラはさらに原料，製法に多様性が認められ，細分化される。赤色顔料の歴史は，古いもので1.5～２万年前に北海道，東北地方においてベンガラが付着した石器や顔料原石が出土した例があり，朱は縄文時代後期から，鉛丹は古墳時代から使われてきた。これまでに鹿児島県内で出土した縄文時代の赤色顔料は，ほとんどがベンガラであり，水銀朱の検出は数例しかない。

中原遺跡から出土した土器２点（№1163，1256，共に鐘崎式土器で縄文時代後期中葉）に付着した赤色顔料を実体顕微鏡で観察したところ，土器の外面のみに塗布されており，特に文様の内部に多く残存していた。走査型電子顕微鏡（日本電子製低真空 SEM・JSM-5300LV）を用いて形状観察を行ってみたが，２点とも特徴的な粒子形状は認められなかった。エネルギー分散型Ｘ線分析装置（日本電子製 EDS・JED-2001）を用い，加速電圧15.00kV，取り出し角度24.23°，作動距離20.00mm，有効時間100秒の条件下で分析したところ，２点ともFeを検出し，赤色物質が付着した部分は他の部分に比べて鉄分が多いという結果が出た（第12図）。また，Fe以外にもAl，Siを検出したが，これらは土壌等による汚染と考えられる。粒子形状の特徴は見られなかったが，実体顕微鏡で観察した土器表面への付着状態やＥＤＳの結果から，２点とも鉄を発色の由来とした「ベンガラ」である可能性が極めて高い。



第12図　Ｘ線分析によるスペクトル図

第Ⅴ章　発掘調査のまとめ

中原遺跡の発掘調査では，縄文時代前期から近代にいたるまで数多くの情報を得ることができた。なかでも，現在の地表面から約３ｍ下に縄文時代前期から中期にかけての遺物包含層が存在するということ，縄文時代後期の遺物が大量に出土したこと，大型道路遺構をはじめとする歴史時代の道跡が幾筋も発見されたことの３点は特に注目される成果であった。以下，時代順にその成果と問題点・研究の課題等をまとめてみたい。

第１節　縄文時代前期・中期

今回の調査で最も古く位置づけられるのが縄文時代前期の資料である。中期の遺物とあわせ第Ⅷ層がその遺物包含層であった。確認調査の結果から，当初は縄文時代後期の包含層が最下の文化層であるとの認識で調査を進めていた。実際，第Ⅵ層の黄橙色の砂質層や第Ⅶ層の白色軽石層などは，海辺の砂浜を思わせるほどサラサラの状態であった。第Ⅵ層に遺物が存在することを遺構の壁面から偶然確認したため，下層の調査を実施することとなったわけである。本遺跡のように海岸線に近く，標高が10ｍに満たない立地条件のところでは，海進海退現象を考慮する必要性を痛感することとなった。それは単なる海水面の上下による影響だけではない。本遺跡は姶良カルデラの縁辺に位置していることを忘れてはならない。本報告の第Ⅳ章で森脇広氏が述べているように，本遺跡の地形環境には桜島火山の活動による隆起や沈降現象も大きな影響を与えているのである。

曽畑式土器や春日式土器がみられる第Ⅷ層であるが，その上位には海浜堆積物と考えられる軽石礫と砂からなる層（厚さ約２ｍ）が発達し，指宿式土器や市来式土器を含む層へとつながっている。この海浜堆積物について森脇氏は，約4,500年前の「桜島高峰２（Ｐ７）テフラ噴火」による急激な沈降によるものではないかと推測されている。

ところで，第Ⅷ層出土の土器はローリングを受けた状態のものがほとんどであった。今回の調査区域が，現在の海岸線に平行に連なる砂堤状の微高地縁辺にあることから，本来は砂堤中央部に遺跡の中心はあるものと考えられる。

これまで発掘調査された姶良町内平野部の縄文遺跡をみると，本遺跡ほど多くの遺物は出土していないものの，同じような傾向がみられる。本遺跡に近い保養院遺跡[1]では後期前半の土器，平松原遺跡[2]では深浦式土器，萩原遺跡[3]からは阿高式土器等が出土している。また，南宮島遺跡[4]からは春日式土器や岩崎上層式土器・指宿式土器が出土，さらに，思川の河床からは平松の稲荷橋付近で曽畑式土器や市来式土器が採集されているという[5]。つまり，本地域における標高10ｍ前後のレベルから縄文時代前期から後期にかけての遺物が発見されるということは一般的な現象であるということがいえる。本遺跡例のように地表下約３ｍのレベルで出土することを考えると，開発に伴う埋蔵文化財の調査（試掘・確認調査）では，このことに十分注意する必要があろう。これは姶良地区だけのことではなく，国分平野までのいわゆる鹿児島湾奥の平野部全般にいえることである。

第Ⅶ層出土の石器は，土器に比べると量が少なかった。その中で石鏃の占める割合が高かったのが特徴であった。春日式土器が多く出土した曽於郡松山町の前谷遺跡[6]でも出土石器に占める石鏃の割合が高かった。また石鏃の形状も類似しており注目される。19点の石鏃が出土しているが，16点が黒曜石で，地元の三船（鹿児島市）産の黒曜石を使用した石鏃が４点，西北九州産と考えら

れる黒曜石を使用したものも４点出土している。ただし，出土した剥片・砕片類の多くは三船産の黒曜石であった。

軽石製加工品が４点出土しているが，第21図の240や241はかなり大型の製品で注目される。２点ともに使用目的が明確ではないが，面取り・潰れなどの加工痕・使用痕が確認されている。これだけの大きさの軽石製品は出土例が少ないため，評価については今後の調査例を待ちたい。

第２節　縄文時代後期

縄文時代後期の遺構としては石錘の集積遺構１基しか検出されなかった。大量の土器が出土したこととは対照的である。この遺構は石錘12個と扁平自然礫２個を集めたものである。遺跡全体からも総数114点の石錘が出土しており，海岸を間近に控えていた遺跡の立地条件を考慮すると興味深い遺物である。掘り込みは確認されていないことから，埋納されたのではなく単に置かれた状態であると考えられる。このような石錘の集積遺構は，鹿屋市榎木原遺跡[7]や出水市出水貝塚[8]で検出されている。

遺物としては土器・土製加工品・石器・石製品がある。本遺跡出土品のほぼ８割を占めるのが後期の出土品であった。土器は器形や文様等から16種に分類した。晩期の２種も含めて，いくつか成果と課題を整理してみたい。

（１）出土状況について－土器編年との関係－

土器は後期前葉の指宿式土器と中葉の市来式土器の時期を中心として多量に出土した。土器型式をベースにした種類ごとの出土量を単純に数値化したのが第35～37表である。この表によると，出土の中心がＢ10区付近からＡ３，４区付近へと変遷していることがわかる。この表を利用しながら，まず遺物の分布状況を検討してみたい。

指宿式土器と市来式土器はＢ10区付近をピークとする点は変わらないが，次のピークにややずれがみられる。それぞれＢ５～７区，Ａ４区付近に遺物が集中している。中間の土器型式と考えられている松山式土器がＢ10区付近に集中して，前後土器型式とほぼ同様な結果を示すものの，他にほとんど集中区が見られない点は特徴的である。

今回16種に分類した中で，いわゆる市来式土器期に該当すると考えられるものがいくつか存在する。第12類の草野式土器と第14類の台付皿形土器，第15類の無文土器がそうである。第11類の市来式土器も分布表ではさらに３つに細分して，より新しいと考えられる市来Ⅲ式土器のデータと市来式土器の器形をもつ無文土器のデータも取り上げた。

それによると，市来式土器のピークはＢ10区付近にあるが，市来Ⅲ式土器になるとＡ，Ｂ－３～５区付近に移っていることがわかる。同じような結果は市来式の無文土器にもいえる。また，草野式土器・台付皿形土器・無文土器は，Ｂ10区付近にも集中区があるが，全体的にはＡ，Ｂ－３～６区の方の集中度が高い。市来Ⅲ式土器の次に位置づけられる丸尾式土器が，Ａ，Ｂ－３～６区で極めて高い集中度を見せることを考えると，松山式土器から丸尾式土器にかけて生活の中心部が移動したことが予想できる。もっとも，調査区内で検出された遺構は前述の集積遺構のみであったことや遺物の出土状況から，当時の生活域は調査区より北西側にあるものと考えられる。つまり，前期や中期と同様に，海岸線に平行に連なる砂堤状の微高地中央部に遺跡の中心はあるものと考えられるのである。現在は人家が密集しているが，約１ｍの深さから出土することから，遺跡が残存している可能性が高い。

本遺跡では網代の圧痕をもつ底部も出土している。これらがどの土器型式に伴うものなのか明確でないが，分布状況においては指宿式土器とほぼ同様な在り方を示す。器形そのものも，比較的厚手の器壁をもつものが多いことから，指宿式土器期の底部が多く含まれている可能性があろう。

ところで，本遺跡では，磨消縄文系の土器も出土している。しかも，小池原上層式土器から西平式土器まで，少量ながらも各段階のものがみられる。第17～22類土器がそうである。第17類を除く，５種類の出土状況について示したのが第37表である。いずれもＡ，Ｂ－３～７区付近に集中していることがわかる。つまり，市来Ⅲ式土器や丸尾式土器との共通性がみられるのである。もちろん，このような在り方から即同時性を導き出すことは危険であるが，ひとつの傾向を示す事例として注意しておきたい。

（２）貝殻文系土器と磨消縄文系土器の関係

前述のように，本遺跡出土の磨消縄文系土器は中葉のものを中心として数種にわたっている。このような状況は，同じ鹿児島湾奥に位置する干迫遺跡[9]や高井田遺跡[10]（ともに加治木町）でもみられた。少なくとも鹿児島湾奥の平野部においては，後期中葉の各段階の磨消縄文土器文化がかなり浸透していたことが予想されるのである。これらはおおむね市来式土器や丸尾式土器などの貝殻文系土器との接点があるものと考えられ，その関わり具合が注目されるところである。たとえば，南九州では，市来式土器の深鉢に鐘崎式土器の鉢というセット関係を想定できる遺跡がある。このような傾向は，市来式土器が出土する全ての遺跡で見られるわけではないが，両系統の土器を取り込んだ一つのまとまり（セット）が存在することは意識する必要がある。同じようなことは，北久根山式土器や辛川式土器など，他の磨消縄文系土器の場合もいえる。どのように貝殻文系土器と絡んでいるのかという点も常に考慮しなければならない[11]。

（３）円盤形土製加工品について

円盤形土製加工品は238点出土した。縄文時代中期のものと考えられるもの２点と土師器製１点，陶器製39点を加えると総数280点であった。つまり，割れた焼物の破片を何らかの目的のために再利用したものが，時代を越えて出土しているということになる。縄文時代に多い遺物であるが，南九州では特に縄文時代中期末から後期中葉にかけて多く出土することが知られている[12]。

（４）石器について

出土した石器は多種にわたるが，石錘や磨石，軽石製加工品などの多さが特徴的であった。集積遺構も検出された石錘は総数114点出土した。本遺跡から出土する石錘は自然礫の数か所をわずかに打ち欠いただけの簡単な加工を施したものがほとんどであった。石材も安山岩が大半を占める。より多量に出土している中原遺跡（志布志町）[13]や宮之迫遺跡（末吉町）[14]などの状況と同様である。

磨石・敲石・凹石類や石皿も多量に出土した。なかでも，扁平磨石としたものが多量に出土している。磨り減った面を残すが，凹面状を呈するものが多くみられることから，砥石的な使用も考える必要があろう。石皿は大小様々であったが，使い込んで極端に窪んだものはない。持ち運びの出来ない特大のものもあり，定住性をうかがわせる。

軽石製加工品は形状から５種に分類した。なかでも注目されるのが軽石を舟形状に加工している一群で，草野貝塚[15]（鹿児島市）や柊原貝塚[16]（垂水市），干迫遺跡（加治木町）等で多く出土しているものである。おおむね市来式土器期のものと考えられる。また，本遺跡を含め，いずれも海岸部に近い遺跡からの出土ということで，前述の石錘とあわせて遺跡立地の特徴をよくあらわしてい

る遺物であるといえよう。

第３節　弥生時代・古墳時代

弥生時代から古墳時代にかけての資料は，縄文時代のものに比較するとごく少量であったが，出土した土器から大きく４つの段階があることが確認できた。

４つの段階とは，弥生時代前期中葉から後葉，弥生時代中期後葉，弥生時代後期後葉，古墳時代初頭である。後半２期については，主に甕形土器口縁部器形から判断したが，大きな時間差はない可能性もある。

これらの土器の出土分布を見ると，A15，16区付近とB22，23区付近の２か所にピークがあった。ただし，後者はすべて表層ないし撹乱層から出土していることは注意しなければならない。この区域には，歴史時代の大型道路遺構や，自然災害によると考えられる厚い撹乱層（流堆積層）があることから，原位置からある程度移動していることが予想されるのである。両区域は，調査区北側の砂丘堤から海岸側へ舌状に延びる小台地上に立地している。A15，16区の遺物は台地のほぼ中央から縁辺に位置している。B22，23区の遺物も元来この付近にあった可能性もある。

この期の遺構としては古墳時代のものと考えられる溝状遺構が１条検出された。幅約２m，検出面からの深さが50～70cm を測る，断面が逆台形を呈する溝で，前述の舌状台地を横切る形で約140mに渡って検出された。底面に杭跡状のピットが見られる部分もあり，その性格が注目されるが，底面の幅が狭いことやや硬化面が見られないこともあわせ，道跡ではないと考えられる。海岸線とほぼ平行している点も注意したい要素である。

以上のことから，この期の大規模な遺跡が存在した可能性は低いが，中心部は調査区北側の砂丘堤上にあるものと考えられよう。

第４節　古代～近代

古代から近世にかけては，大きな時間枠でくくり取り上げた。遺物はともかく，遺構については帰属時代・時期が不明瞭なものが多かった。いくつか特徴的なものについて述べることにしたい。

（１）柱穴状ピット群について

柱穴状を呈するピットを群として捉えられる区域が２か所存在した。なかでも，B12，13区付近で確認できたピット群は，一定の方向性が認められるものもあり，数棟の掘立柱建物が存在していた可能性が高い。群が調査区外へ広がることから，建物配置の特定までには至らなかったのは残念であるが，古代から中世の所産と考えられる建物群の存在が想定できよう。近くから検出されている２基の土坑についても，ほぼ同時期のものと考えられる。

（２）各種の道跡について

本遺跡の特徴の一つに，道跡が多数検出されたことをあげることができる。これは調査起因自体が国道バイパス建設であることを考えると興味深い。地理的環境が時間を越えた役割をその土地に与えている事例といえよう。特に注目されたのが大型道路遺構である。これは，検出面の幅が約８m，道路面と考えられる部分の幅が約６m，その下位で検出された当初の道路面と考えられる部分が幅約３mという規模のもので，約50mにわたり，ほぼ直線的に検出された遺構である。この遺構の歴史的位置づけについて，平田信芳・永山修一・下鶴弘・松尾千歳の各氏に玉稿をいただいた（第Ⅳ章参照）。それらも参考にしながら発生と消滅について考えてみたい。

本稿（第Ⅲ章第３節４）で述べたように，道としての機能には大きく２つの段階が存在したと考えられる。幅３mの段階と６mの段階である。第１段階の道も直線的に延び，舌状小台地を斜めに横切る形をなしているが，コンターラインは僅かながら道路崩壊付近へ小谷が形成されていることから，道路の初源が自然流路であった可能性もある。埋土には流堆積層が幾層にも見られることから，ひとたび大雨になると溝川的な様相を示していたのであろう。やがて幅６mに拡幅されているわけであるが，最終的には水流を伴う大規模な自然災害により崩壊し，復旧されることなく破棄されていったものと考えられる。問題は時間的位置づけである。平田氏は，「道路そのものは，政治的要地や経済的要地を結ぶものである。（中略）道路は古代・中世・近世を通じて大きく変わるものではない。」とされる。規模や直線的な形状からも古代までさかのぼる可能性は十分考えられよう。永山氏が述べておられるように，大隅国桑原郡と薩摩国甕嶋郡を結ぶ道路であった可能性もあろう。本遺跡のある重富地区が，２つの地域を結ぶ交通の要所であったことは間違いない。それは近世においてさらに顕著な記録として登場する。薩摩国大口筋の存在である。石畳が一部現存する急峻な白銀坂を介し，重富地区は鹿児島城下と結ばれていた。そのことを意識しながら考察を加えていただいたのが下鶴氏と松尾氏の論考である。２人とも提示されているように，現存する地図にこの道路らしきものは描かれていない。規模や形状を考慮すると，残存する近世の各絵地図が描かれた段階ではすでに道としての機能を果たしていなかった可能性が高い。２人とも自然災害等による道の付け替えの可能性を指摘されている。下鶴氏は大口筋のルート変遷を４つの段階に分け，本遺構を当初の段階，「大口筋Ⅰ期」のものとし，戦国時代末から江戸時代初期を想定されている。氏は白銀坂口を現在よりも北側にある愛宕神社西側の布引の滝入口に設定し，思川の渡し場までの直線道路（本遺構を含む）を提示されている。

いずれにしても，発生と消滅についての確実な記録はない。しかし，約６m幅の直線道路が確実に存在した時期があったのである。そのことが判明した意義は，歴史の解釈に様々な奥行きと幅を与えてくれるもので，考古資料の有効性を示す一つの事例であるといえよう。

ところで，この大型道路遺構が破棄された要因と考えられる自然災害が何であったのか注目される。今回自然災害史的な視点からの追究はできなかったが，時期の特定につながる資料があるかもしれない。今後の課題である。また，幅６mの道路面の一部で，畝状の凹凸が検出された。当初，道路が機能を失った跡の利用法として畠に転用したものと推定した。周辺に同様な痕跡の畠跡と考えられる遺構が存在していたことも，その感を強くする理由であった。しかし近年，東和幸氏の研究から「牛馬歩行痕説」がクローズアップされるようになった[17]。これまで「波板状遺構」などと呼ばれ，定説はないものの道路面の不安定さをカバーする工夫であるとの見方があった。今回の事例もいろいろな可能性を考慮しながら，道の機能と景観を今後検討していきたい。

（３）石組遺構について

大型の礫を丁寧に組み合わせた遺構が２基検出された。石組遺構１より陶器片が出土しており，近世の所産と考えられるものである。低地部で検出された石組遺構２の時期についてはその明瞭である。当初，井戸と考えていたが，階段状の構造や深さが60～80㎝程度しかないこと，標高６～７mという立地や基盤が砂地であることなどから，湧き（溜まり）水をくみ上げる場所としての機能を考えておきたい。

（４）遺物について

古代から近代まで多種の遺物が出土しているが，特徴的なものをいくつか取り上げたい。

本遺跡では縄文時代の石錘が多く出土したことは前述のとおりであるが，土製の錘，いわゆる土錘も多く，管状土錘が139点，双孔棒状土錘が26点出土した。サイズや形状も様々で興味深い。このような土錘の出土状況は，やはり海岸に近いということが大きな要因であると考えられる。

鞴の羽口や鉄滓，坩堝（小片のため図化していない）も多くみられた。関連する遺構は確認できていない。おそらく，調査区北側に製鉄に関する何らかの施設があったものと考えられる。

次に動物形土製品であるが，本遺跡からは４点の犬形土製品が出土している。このような「手づくね（手びねり）」の犬形土製品について検討した嶋谷和彦氏によると，京・大坂・堺に代表される近世初期の都市を中心としながら，比較的全国広範囲で出土する遺物で，16世紀代の織豊期に限定される資料であるという[18]。基本的には安産祈願の縁起物ということになる。これまで，古代の土馬と考えられていた資料も実は織豊期の犬形土製品である可能性もあり，見直し再検討が必要かもしれない[19]。

最後に近代の遺物として，西南戦争時のものと考えられる弾丸についてふれておきたい。Ｘ線分析によると鉛製であることが判明している。西南戦争には姶良町からは約800名が参加し，約４分の１が戦死したという[5]。本地域（重富：脇元）と西南戦争の関わりについて調べてみると，1877（明治10）年６月22日に，政府軍の第四旅団，別働第一・第三旅団が艦船によって重富に上陸している。この際，帖佐や重富の守備についていた部隊が出撃しているようである。同月29日の帖佐松原付近での衝突も含め，思川河口付近を挟んで小規模な衝突があったようである。西郷隆盛一行は敗走しながら溝辺町有川を経，８月30日夜に姶良町山田に到着している。翌日，蒲生経由で鹿児島の城山へ向かい，９月24日早朝，終焉の時を迎えたのであった。１点の出土品が歴史の一コマを想起させる事例として興味深い。

【　註　】

1　鹿児島県立埋蔵文化財センター　1994　『保養院遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（11）
2　鹿児島県立埋蔵文化財センター　1991　『平松原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（58）
3　姶良町教育委員会　1978, 80　『萩原遺跡』『萩原遺跡Ⅱ』姶良町埋蔵文化財発掘調査報告書（２）（３）
4　姶良町教育委員会　1977　『南宮島遺跡』姶良町埋蔵文化財発掘調査報告書（１）
5　姶良町　1995　『姶良町郷土誌』
6　松山町教育委員会　1986　『前谷遺跡』松山町埋蔵文化財発掘調査報告書（１）
7　鹿児島県教育委員会　1987　『榎木原遺跡』鹿児島県埋蔵文化財発掘調査報告書（44）
8　出水市教育委員会　2000　『出水貝塚』出水市埋蔵文化財発掘調査報告書（11）
9　鹿児島県立埋蔵文化財センター　1997　『千迫遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（22）
10　鹿児島県立埋蔵文化財センター　2002　『高井田遺跡』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（35）
11　前迫亮一　2002　「南の磨消縄文土器」『四国とその周辺の考古学』大飼徹夫先生古希記念論集
12　前迫亮一　2000　「円盤形土製加工品」『大河』第７号
13　志布志町教育委員会　1985　『中原遺跡』志布志町埋蔵文化財発掘調査報告書（９）
14　末吉町教育委員会　1981　『宮之迫遺跡』末吉町埋蔵文化財発掘調査報告書（２）
15　鹿児島市教育委員会　1988　『草野貝塚』鹿児島市埋蔵文化財発掘調査報告書（９）
16　垂水市教育委員会　1999　『柊原貝塚』垂水市埋蔵文化財発掘調査報告書（４）
17　東和幸　2002　「波板状凹凸面に関する第三の見解」『四国とその周辺の考古学』大飼徹夫先生古希記念論集
18　嶋谷和彦　1991　「織豊期の犬形土製品」『関西近世考古学研究』Ⅰ　関西近世考古学研究会
19　註10で取り上げた『高井田遺跡』の報文中の「土馬」は，この「犬形土製品」である可能性が高い。

写 真 図 版

(PLATE)

中原遺跡遠景（愛宕神社より）

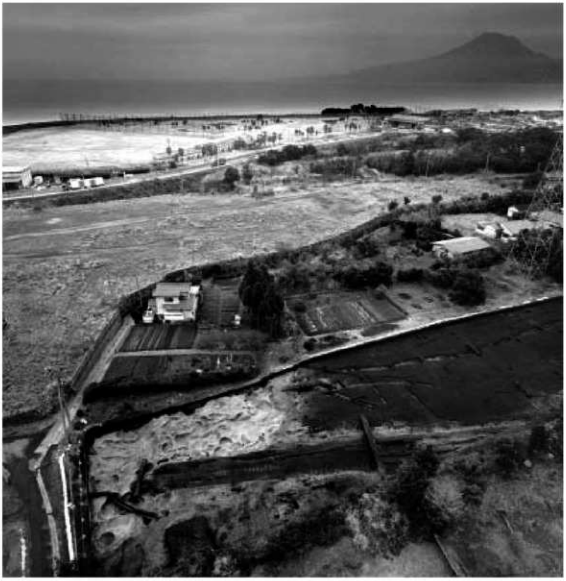
重富地区遠景（愛宕神社より）

図版 2

A地区北西壁
土層断面

B地区南西壁
土層断面

B地区北西壁
土層断面



中原遺跡上空より桜島をのぞむ

図版 4

Ⅷ層調査風景

溝状遺構調査風景

大型道路遺構調査風景

調査前のＢ地区

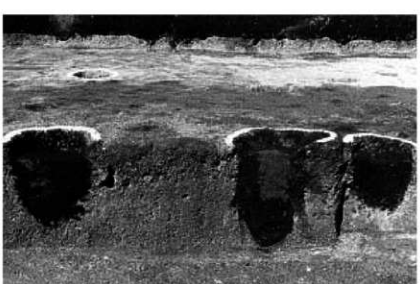
Ａ地区低地部
遺物出土状況

Ａ地区低地部
礫堆積状況

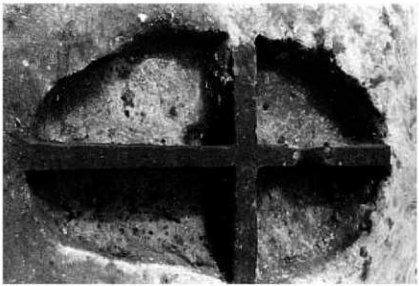
図版 6

1号石組遺構
検出状況

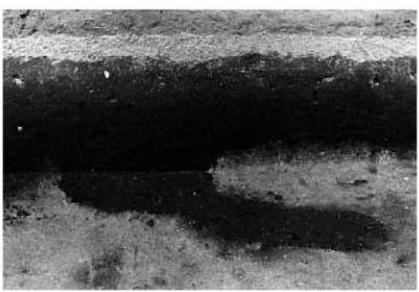
2号石組遺構
検出状況



柱穴半裁状況



土坑１発掘状況



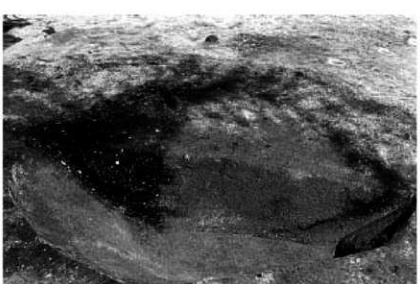
土坑２検出状況

土坑２完掘状況

図版 8

石錘集積検出状況

溝状遺構 1 完掘状況



地層横転検出状況

畠跡(1)

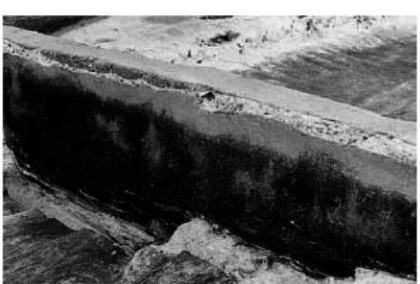
畠跡(2)

畠跡(3)

図版 10

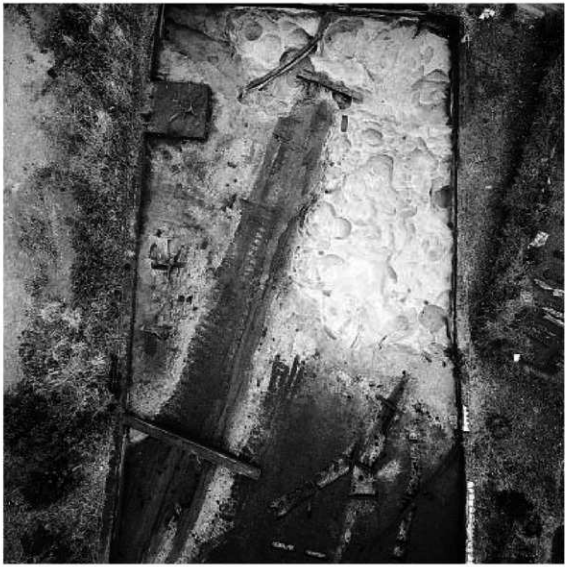
焼土を伴う道跡（右）
及び道跡６完掘状況

古墳時代の溝状遺構
及び道跡６完掘状況

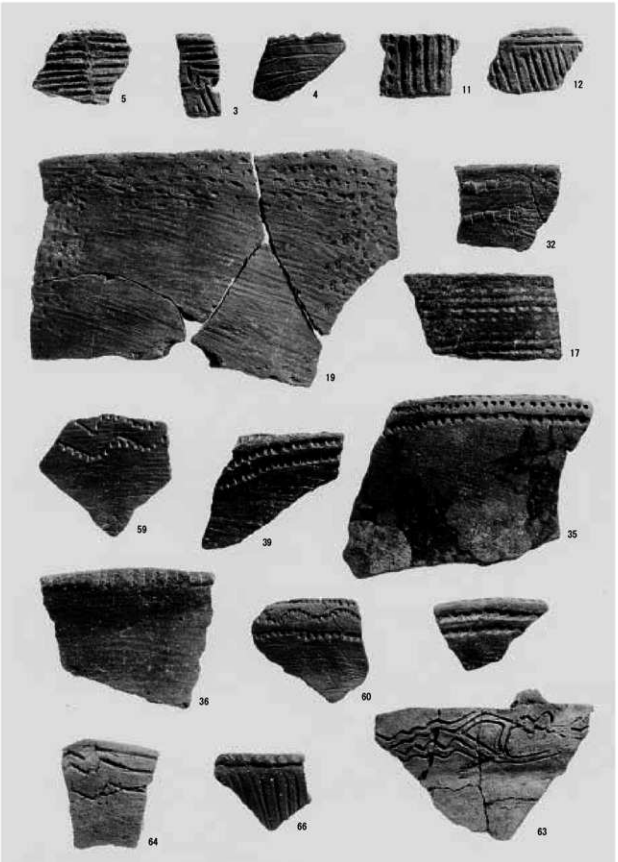


大型道路遺構
埋土断面

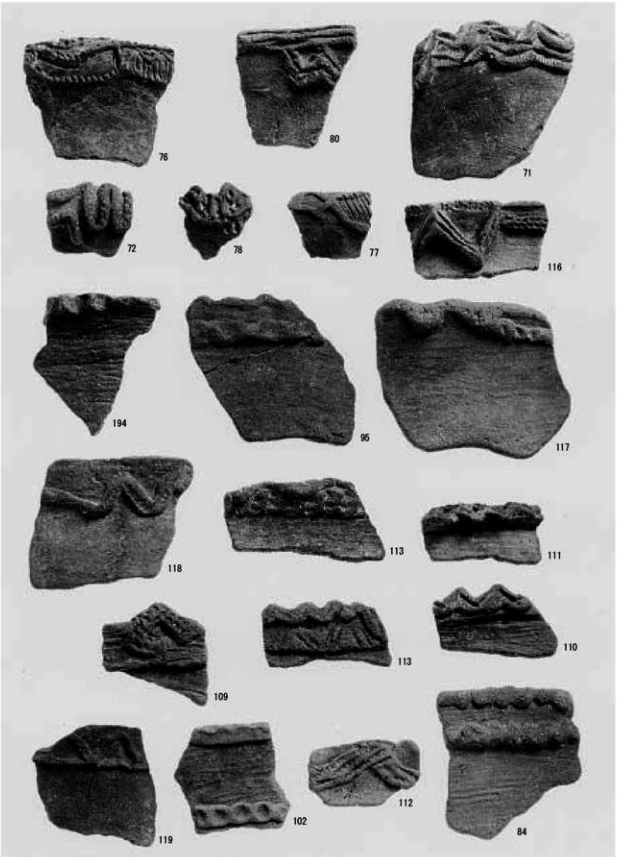
大型道路遺構検出状況



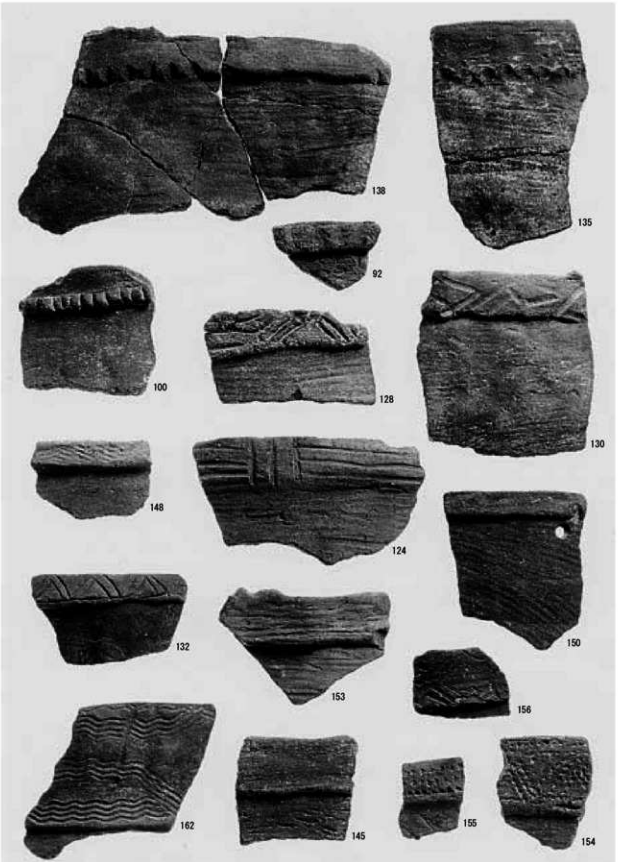
大型道路遺構（上空より）



縄文土器（1）

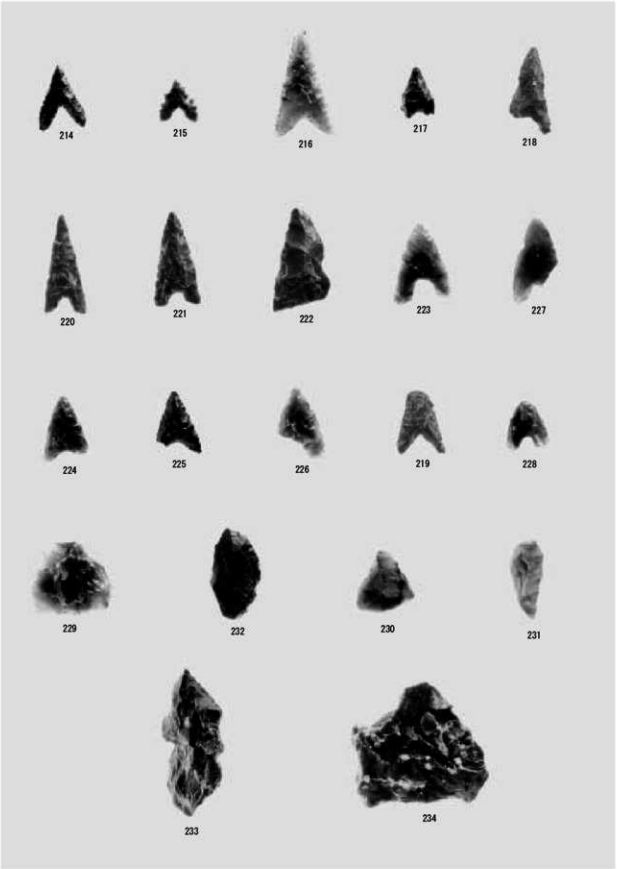

76
80
71
72
78
77
116
194
95
117
118
113
111
109
113
110
119
102
112
84

縄文土器（2）

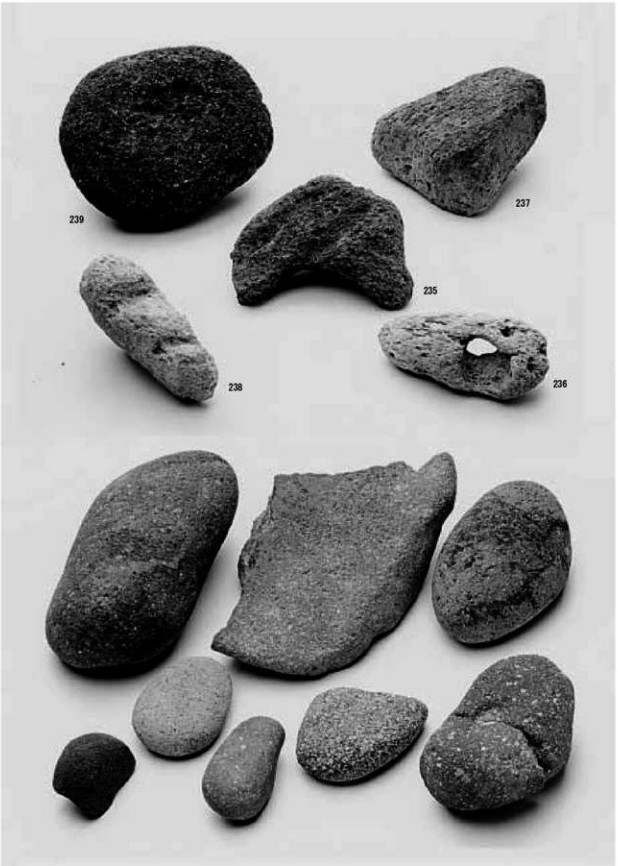


縄文土器（3）

縄文土器（4）


214
215
216
217
218
220
221
222
223
227
224
225
226
219
228
229
232
230
231
233
234

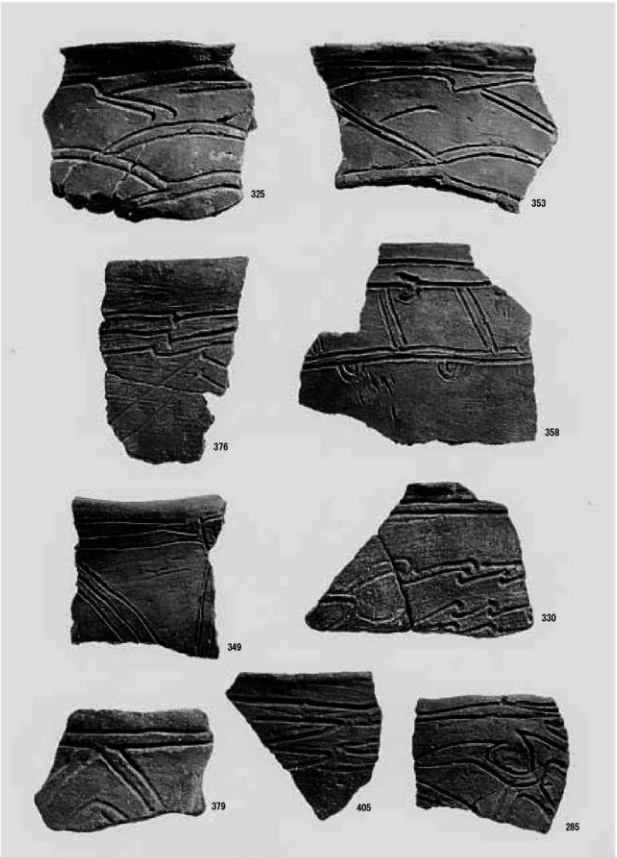
石　器（1）



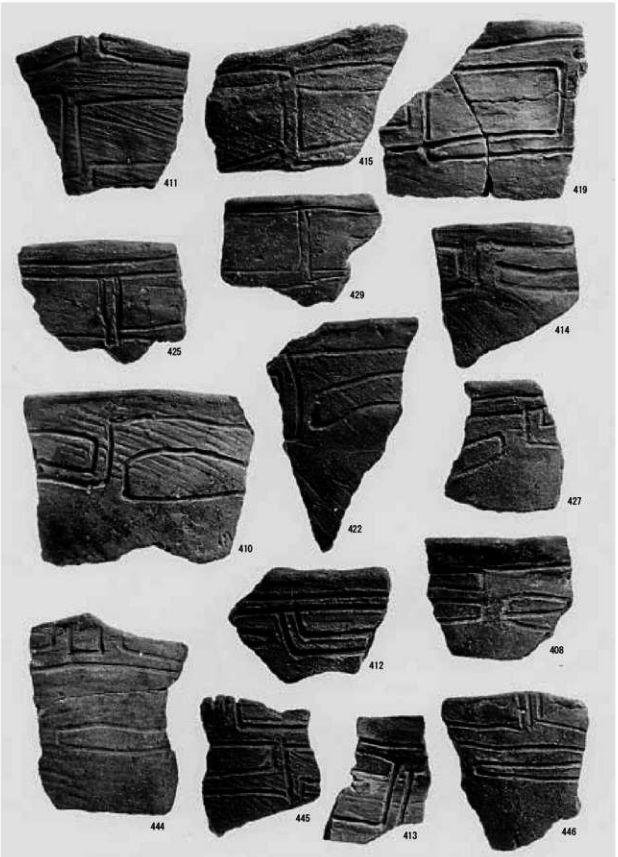
石　器(2)

石　器（3）

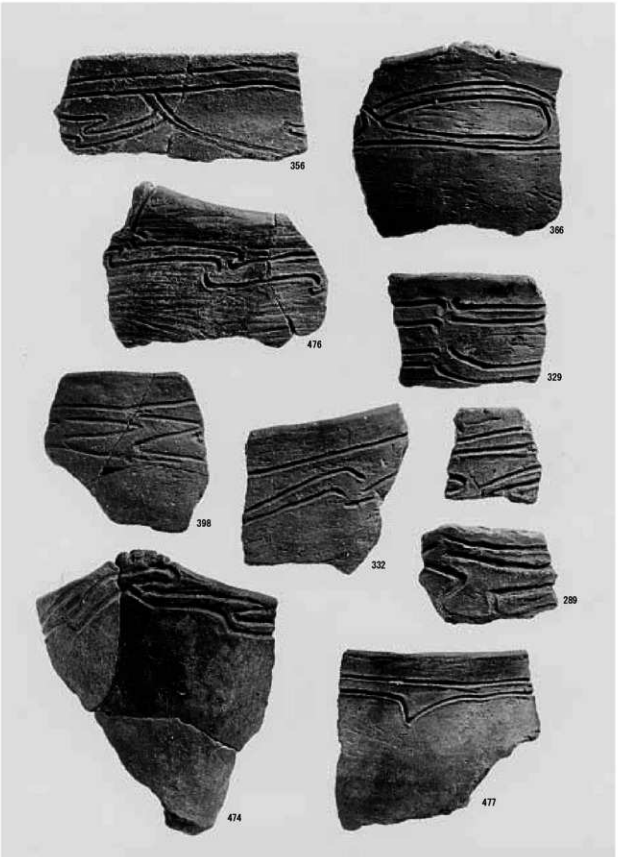
縄文土器（5）



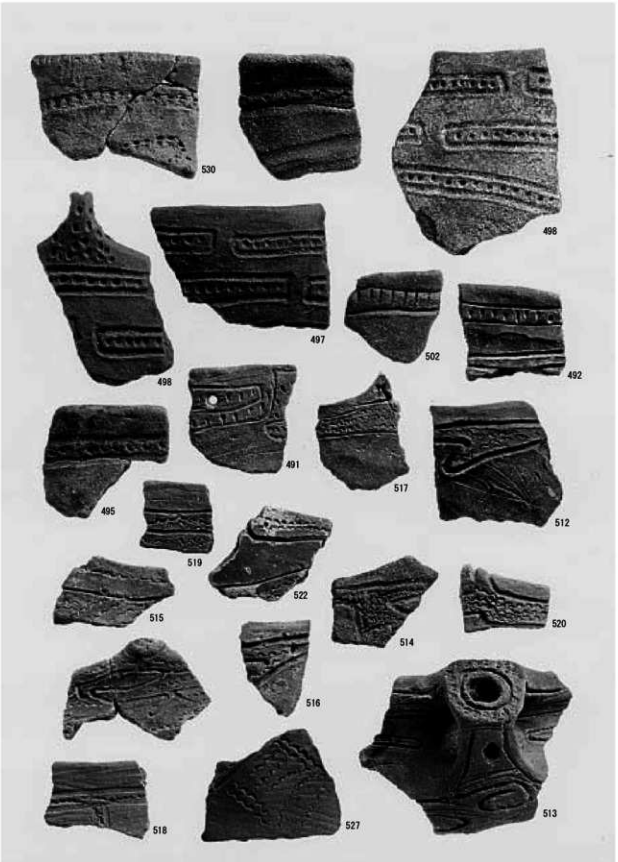
縄文土器（6）



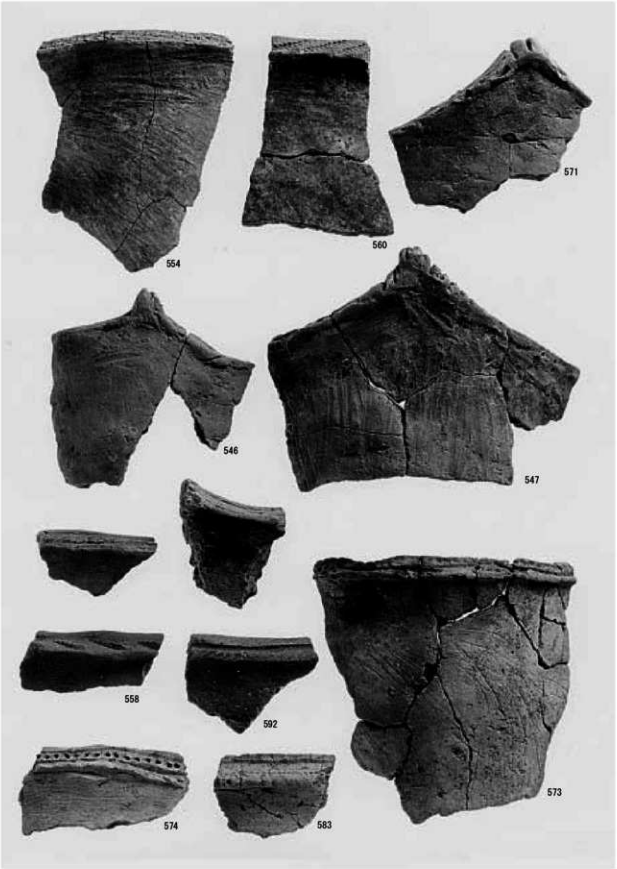
縄文土器（7）



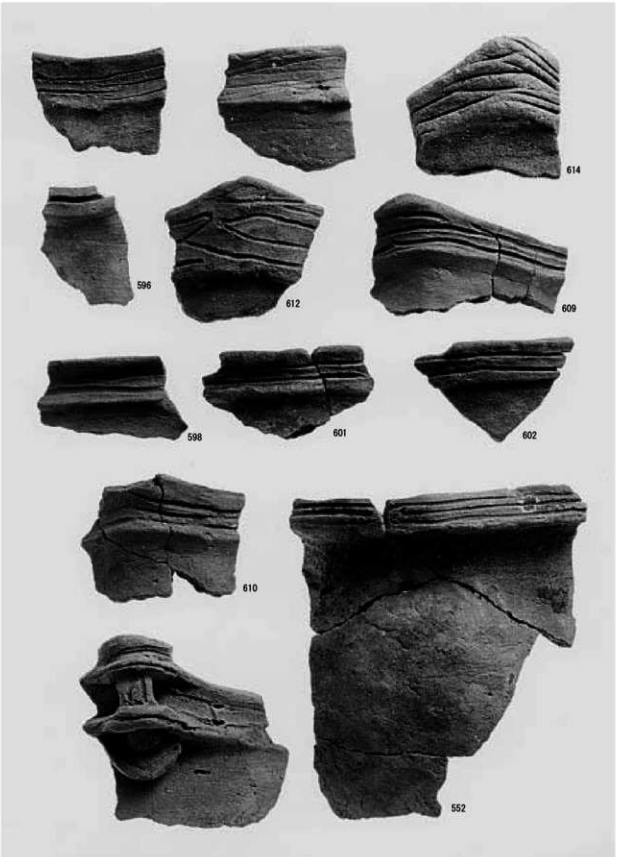
縄文土器（8）


530
496
497
498
502
492
491
517
495
512
519
522
515
514
520
516
518
527
513

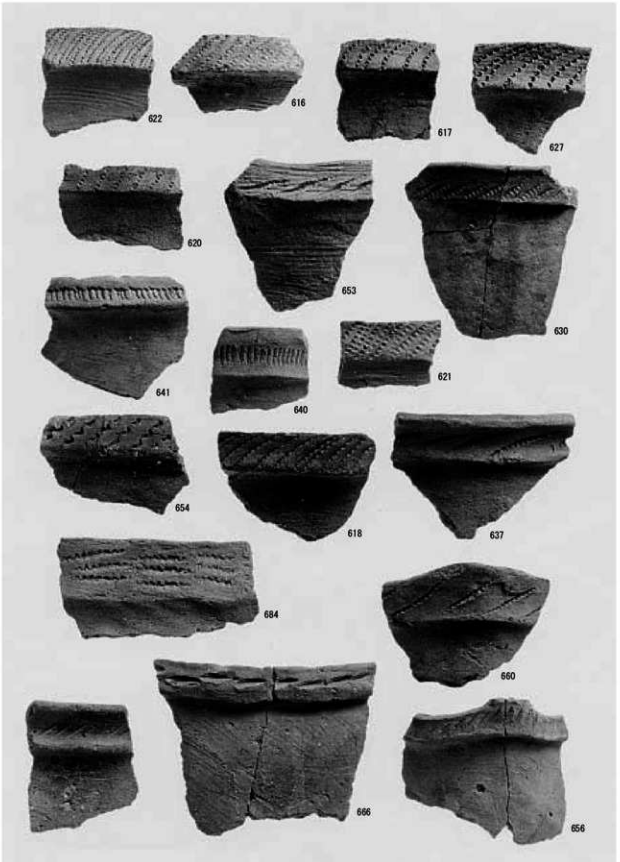
縄文土器（9）



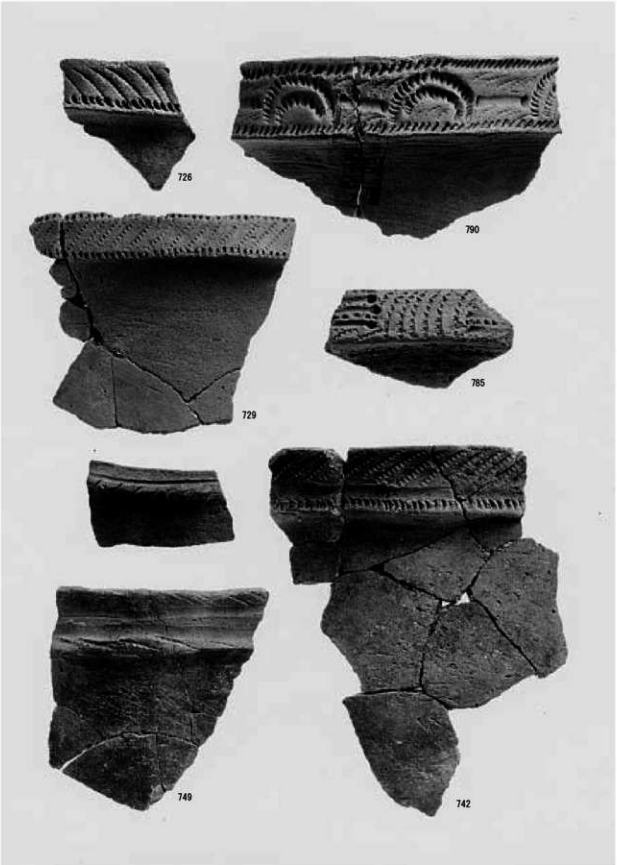
縄文土器(10)



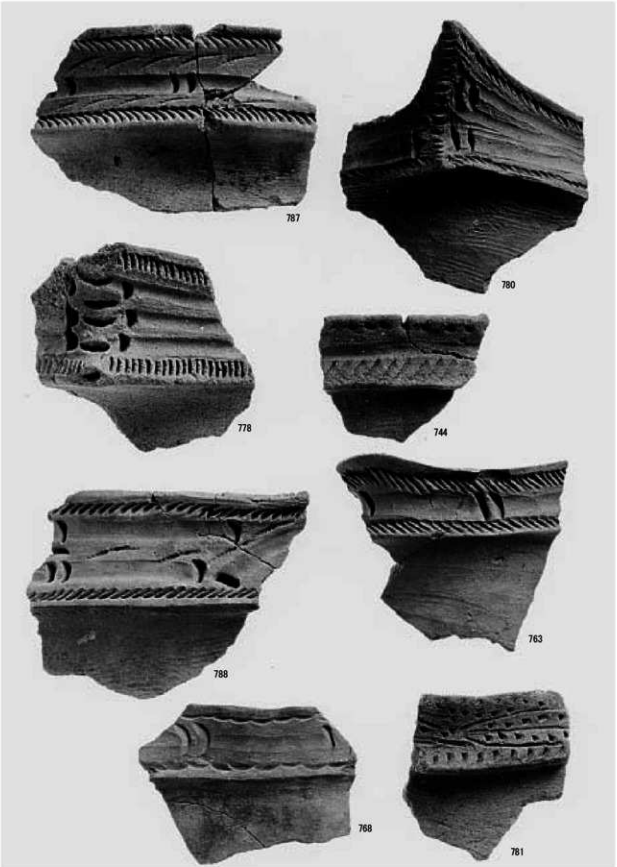
縄文土器(11)


622
616
617
627
620
653
630
641
640
621
654
618
637
684
660
666
656

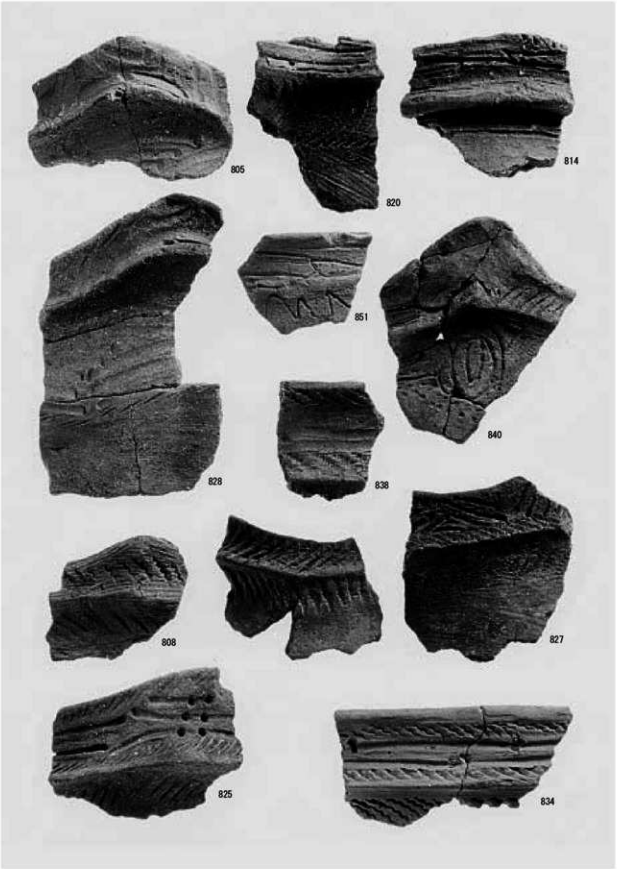
縄文土器(12)



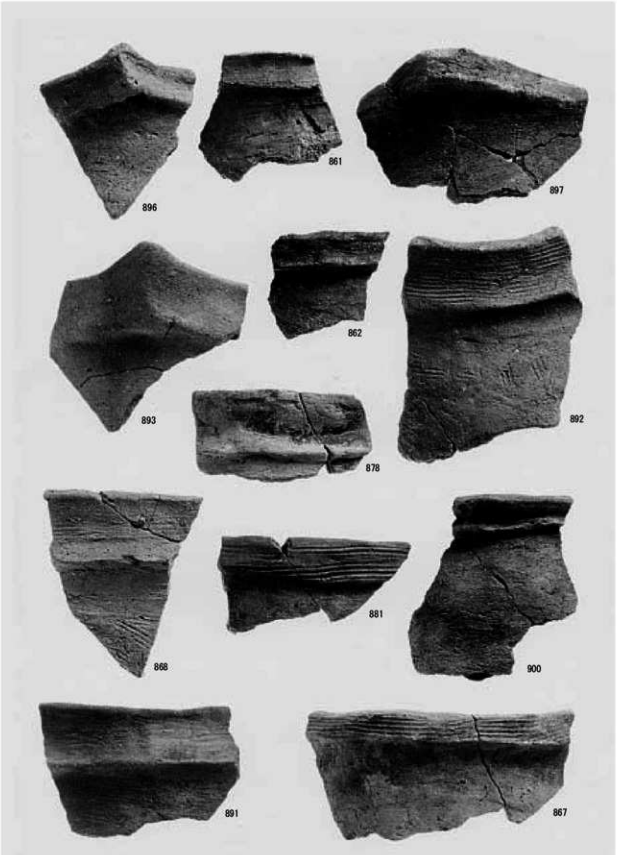
縄文土器(13)



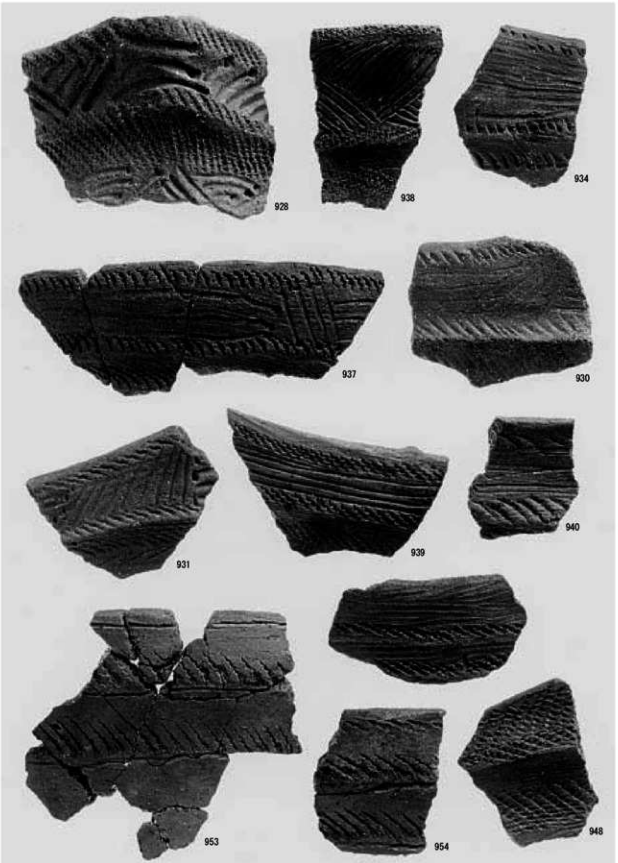
縄文土器 (14)



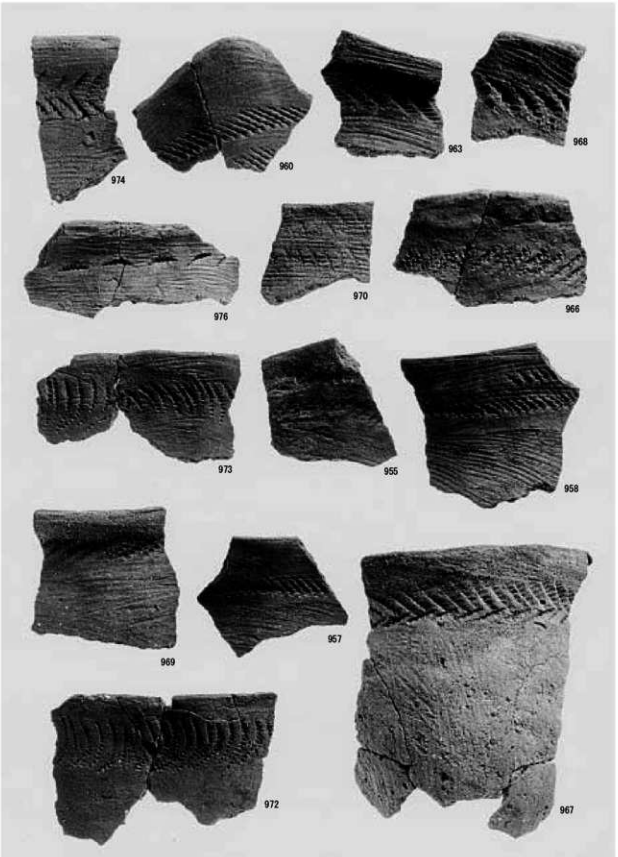
縄文土器(15)



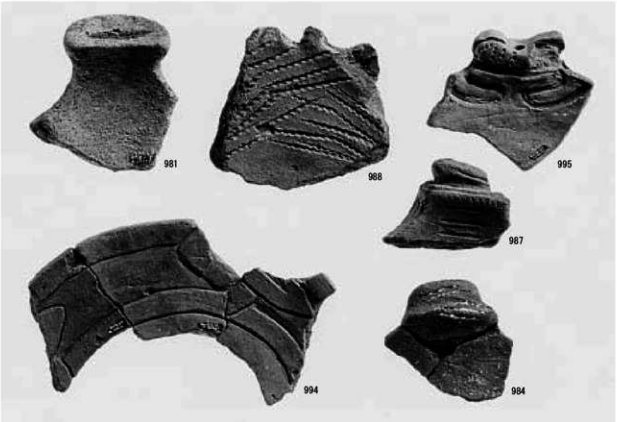
縄文土器(16)



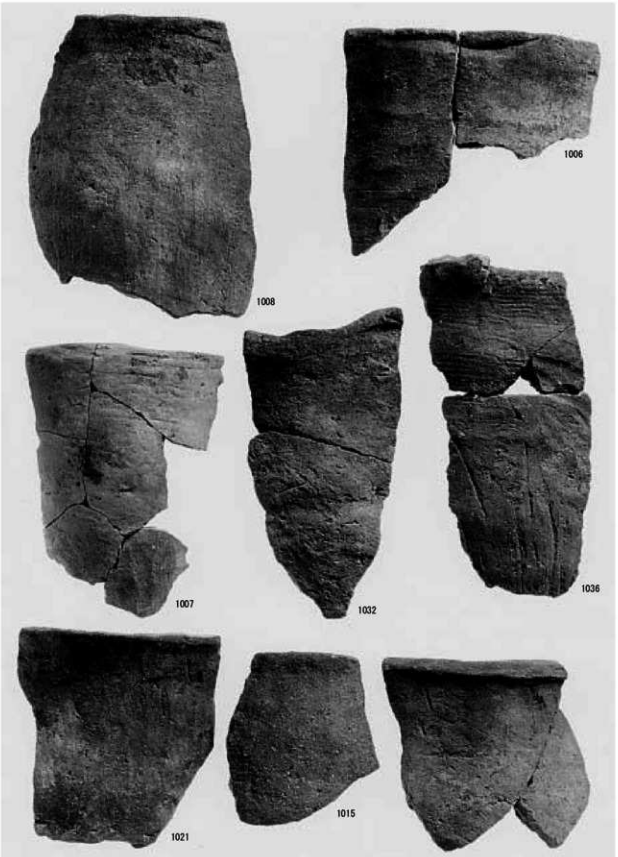
縄文土器 (17)



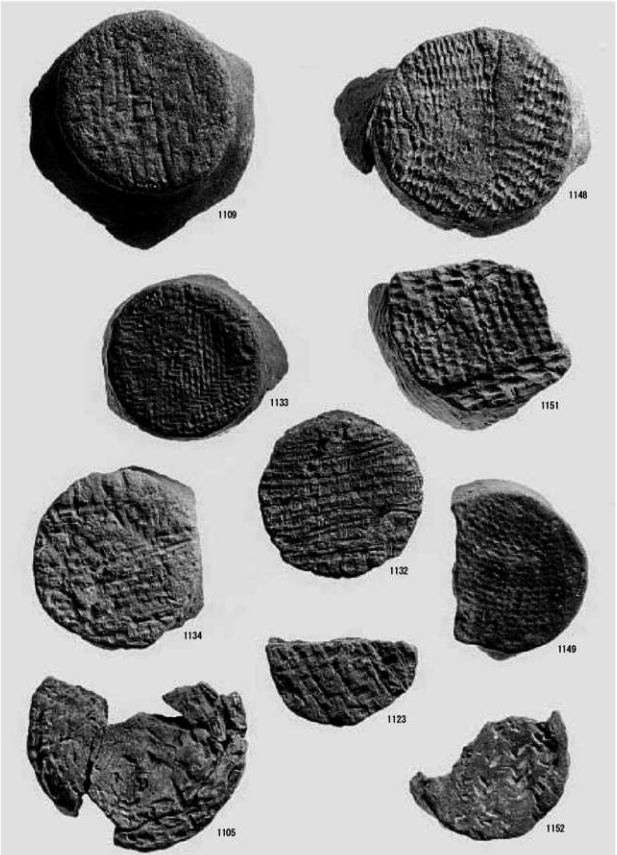
縄文土器 (18)



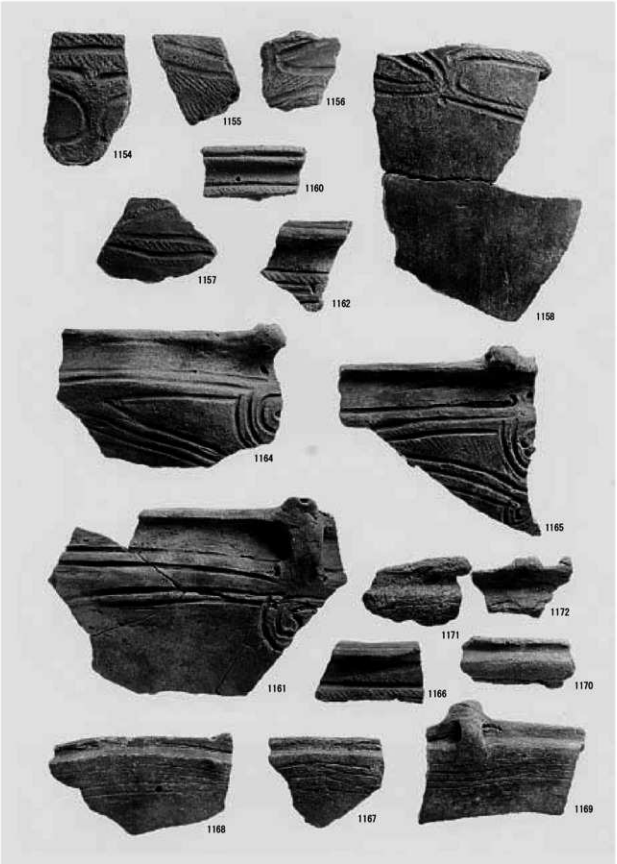
縄文土器(19)



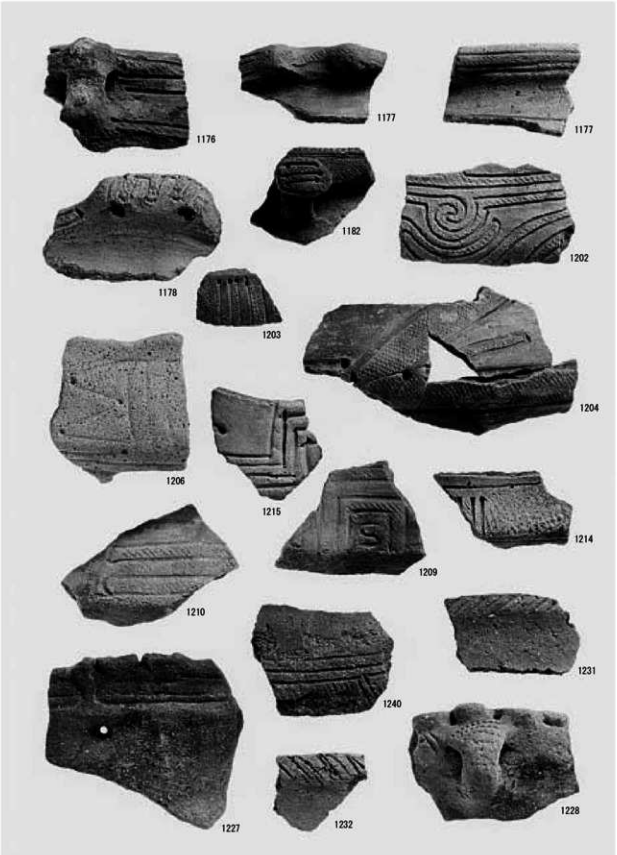
縄文土器 (20)



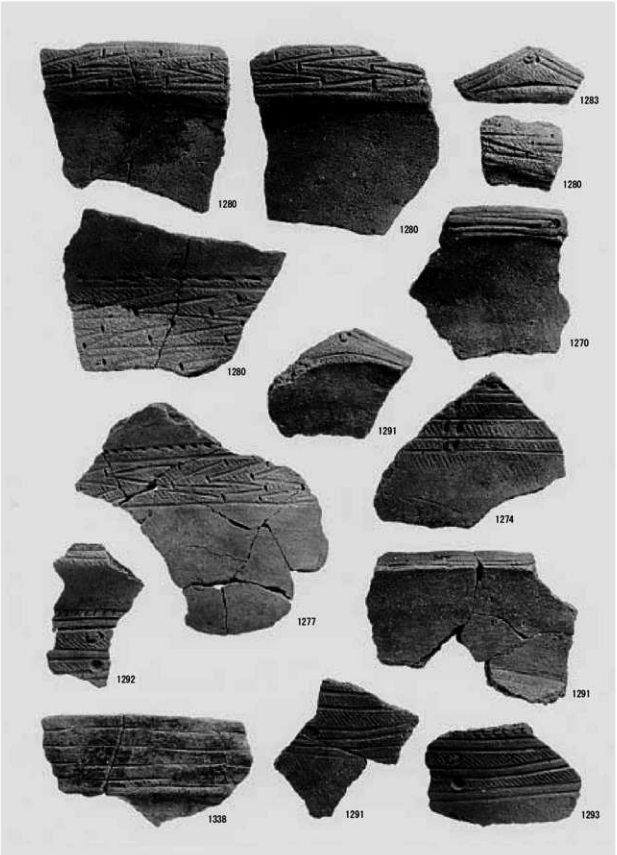
縄文土器 (21)


1154
1155
1156
1160
1157
1162
1158
1164
1165
1161
1172
1171
1166
1170
1168
1167
1169

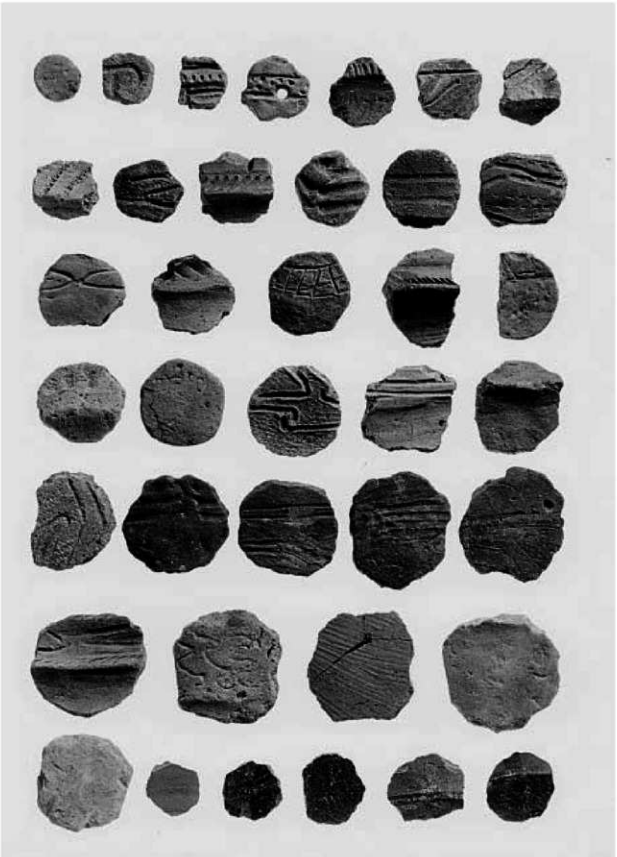
縄文土器 (22)


1176
1177
1177
1178
1182
1202
1203
1204
1206
1215
1214
1209
1210
1231
1240
1227
1232
1228

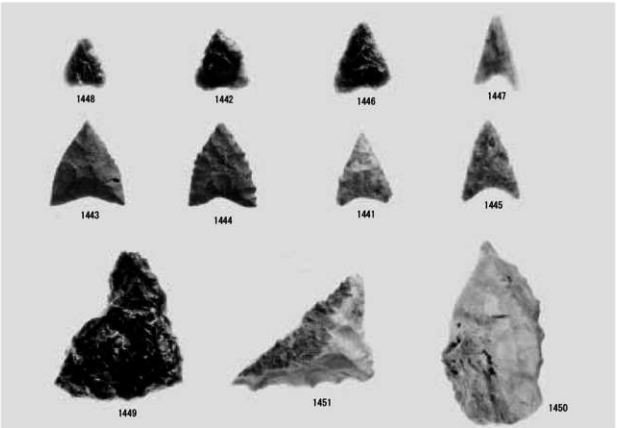
縄文土器 (23)

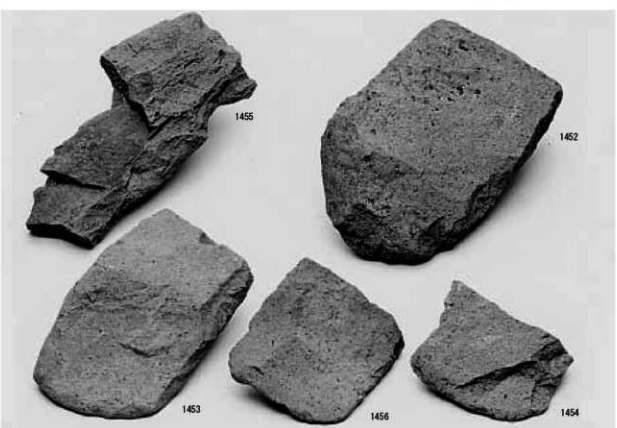

1280
1280
1283
1280
1280
1270
1291
1274
1277
1292
1291
1338
1291
1293

縄文土器 (24)



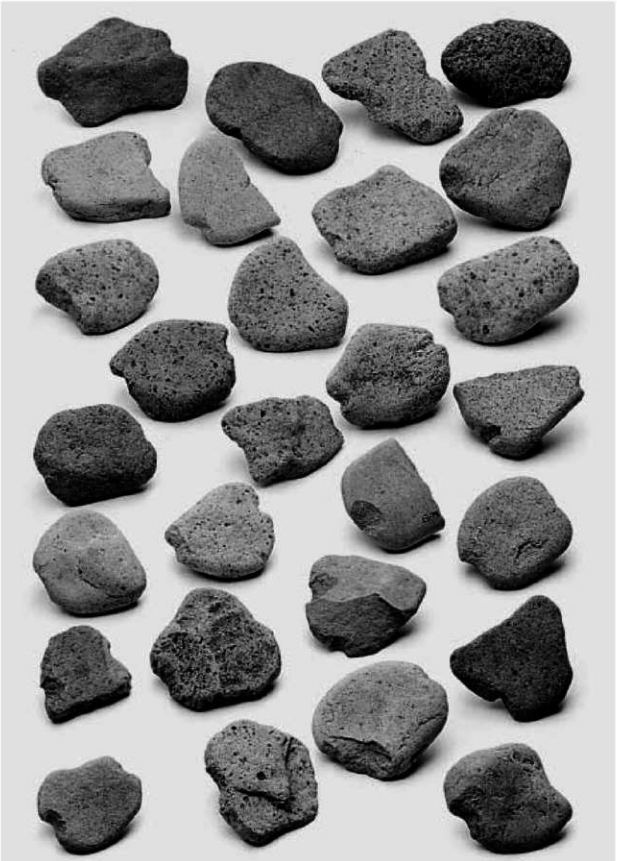
円盤形土製加工品


1448
1442
1446
1447
1443
1444
1441
1445
1449
1451
1450


1455
1452
1453
1456
1454

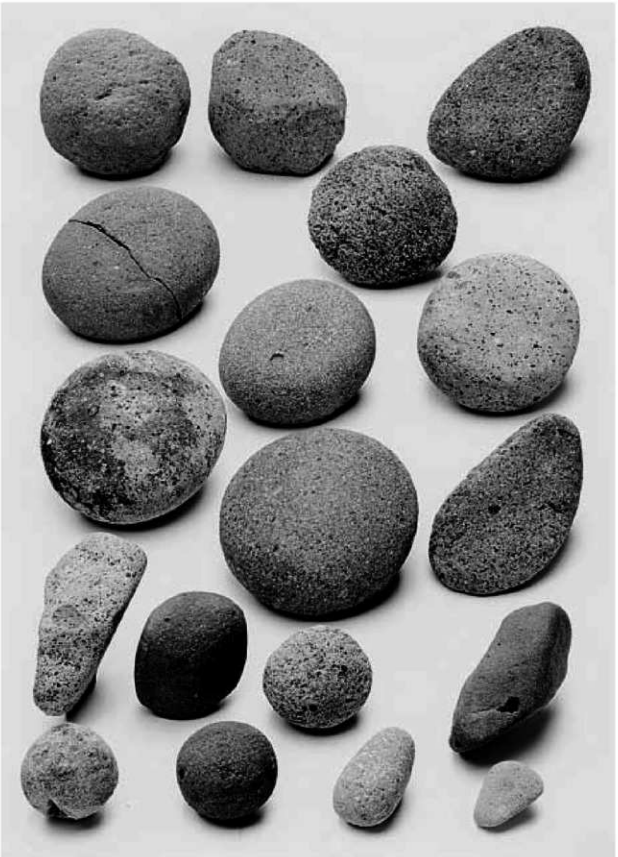
石　器（4）

石　器(5)



石　器(6)

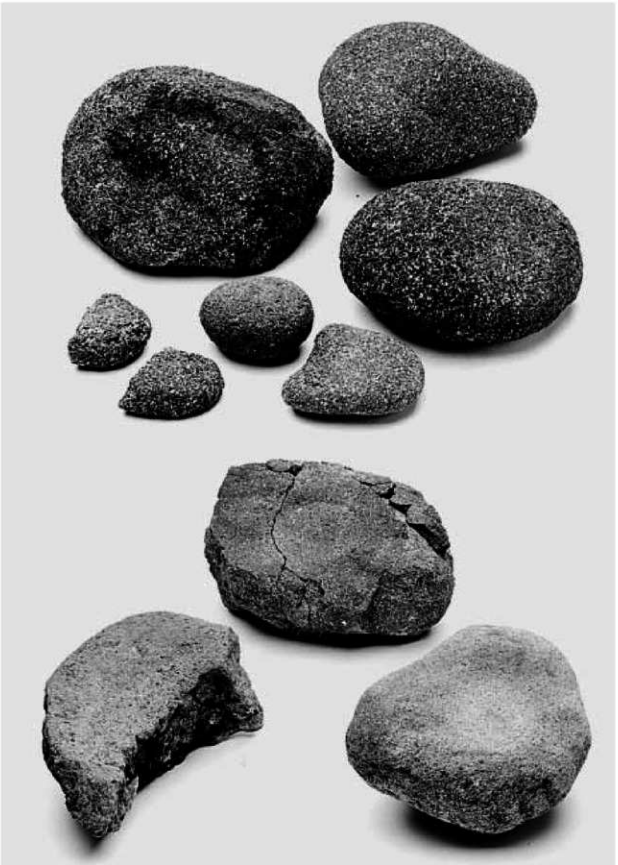
石　器(7)



石　器(8)

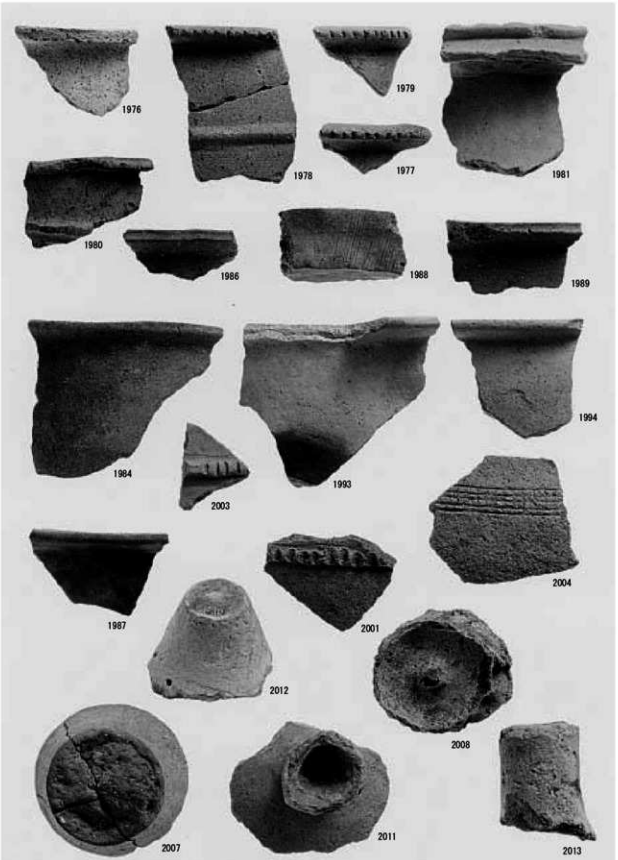
石　器(9)

石　器(10)

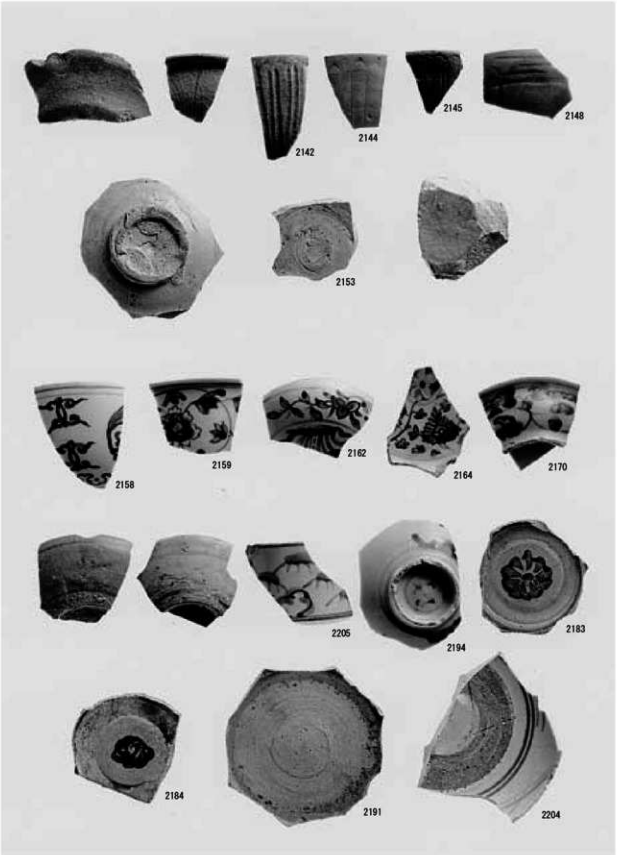


石　器(11)

石　器(12)

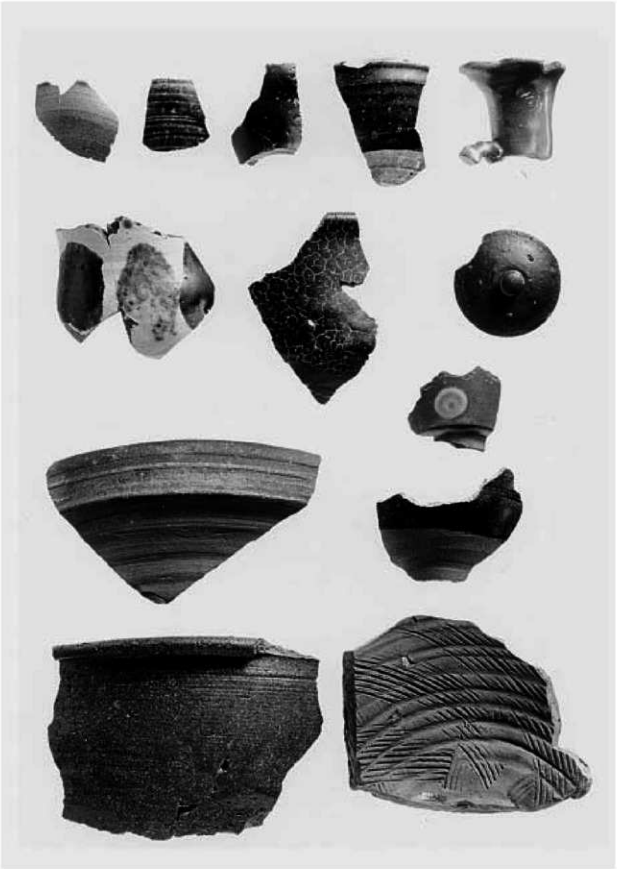

1976
1978
1979
1977
1981
1980
1986
1988
1989
1984
1993
1994
2003
2004
1987
2001
2012
2008
2007
2011
2013

弥生・古墳時代の遺物


2145
2148
2142
2144
2153
2158
2159
2162
2164
2170
2205
2194
2183
2184
2191
2204

磁器・染付

陶　器（1）



陶　器（2）

土　錘

付　　篇

―― 国道10号バイパス（姶良地区）関係埋蔵文化財調査総括 ――

付篇　国道10号バイパス(姶良地区)関係埋蔵文化財調査総括

1　国道10号バイパス（姶良地区）関係の埋蔵文化財調査

国道10号は，福岡県北九州市と鹿児島市を結ぶ道路で，国道３号線とならび九州の南北を繋ぐ大動脈となっている。今回総括するのは，この国道10号のうち，鹿児島県の姶良地区において計画されたバイパス関係の埋蔵文化財調査についてである。

該当するバイパスは，西側から姶良バイパス・加治木バイパス・国分隼人バイパス（現在の隼人道路）がある。これらのバイパス計画と埋蔵文化財の関係は，1983（昭和58）年までさかのぼる。この年の３月に国分隼人バイパスと加治木バイパス，５月に姶良バイパスの計画が建設省（現在の国土交通省）鹿児島国道工事事務所により具体的に提示され，県教育委員会文化課（現在の文化財課）にバイパス予定地内での埋蔵文化財の有無について照会がなされている。

これを受けて，県教育委員会は埋蔵文化財の分布調査を実施し，国分隼人バイパスで２か所，加治木バイパスで１か所，姶良バイパスで６か所の遺跡を確認した。

さらに，バイパス建設がより具体化したため，1988（昭和63）年に再度分布調査を実施した結果，国分隼人道路（当初の国分隼人バイパス）で１遺跡増え，計３か所となった。

（１）隼人道路関係の埋蔵文化財調査

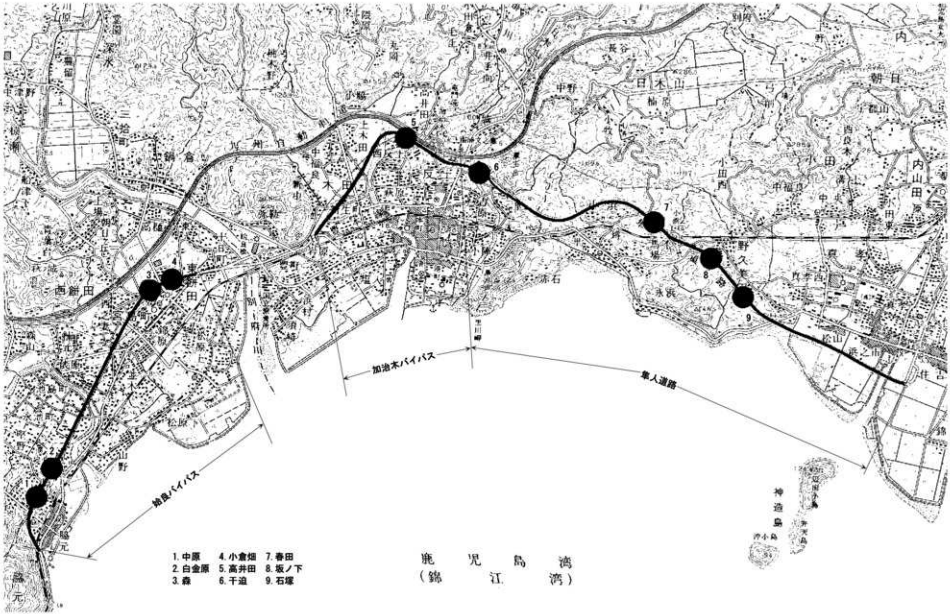
現在，加治木ジャンクションと東九州自動車道を結ぶ路線として開通している隼人道路は，当初国分隼人バイパスと呼ばれていた。のちに国分隼人道路となり，現在では隼人道路となっている。

この路線関係では，いずれも隼人町に所在する春田遺跡・石塚遺跡・坂ノ下遺跡が調査されている。３遺跡とも標高50m前後の微高地や傾斜面に位置し，縄文時代早期や晩期，古墳時代や古代・中世の遺構・遺物が発見されている。いずれも大規模な遺跡ではないが，縄文時代早期の格子目押型文土器や古代の土馬などの貴重な遺物も出土している。この３遺跡は，1989（平成元）年および1990（平成２）年に確認調査・全面調査が行われ，1991（平成３）年３月には報告書も刊行された。

さて，加治木町の加治木ジャンクション一帯は，分布調査において遺跡の所在が確認されていなかったため，高架橋工事などが進められていた。ところが，1990（平成２）年９月，一町民から工事中の排土中に多量の土器が含まれているとの通報があり，改めて確認調査を実施した結果，縄文時代後期の遺物が多量に出土したため，1991（平成３）年２月から翌年２月まで全面調査を実施した。干迫遺跡と命名されたこの遺跡は，結果的に百万点を越える大量の遺物が出土するという縄文時代の大規模遺跡であることが判明し，数々の貴重な情報を提供してくれた。

中心になるのは縄文時代後期の遺構・遺物で，10基の竪穴住居跡とともに市来式土器や丸尾式土器などの貝殻文系土器と鐘崎式土器や西平式土器などの磨消縄文系土器，それらに伴う大量の石器・石製品が出土した。特に，磨消縄文系の土器がこれほどまでに大量に出土したのは本県では初めてのことであった。外来系とされるこの磨消縄文系の土器が南九州でどのように展開していったのか，少なくとも後期中葉の様相はこの干迫遺跡に集約されていると言っても過言ではないであろう。

1997（平成９）年３月には報告書が刊行されたが，十分な整理作業ができなかったため，代表的



第１図　国道10号バイパス関連図

な遺物しか掲載できず，不十分な内容の報告書となってしまった。今回この総括の場を借り，出土遺物の一部について後述したい。

（２）加治木バイパス関係の埋蔵文化財調査

加治木バイパス関係では，加治木町の高井田遺跡のみの調査であった。1983（昭和58）年当初から確認されていた高井田遺跡の調査が本格的に動き出したのは，発見から20年近く経過した2000（平成11）年であった。この年，確認調査と一部の本調査を約２か月間実施，翌年には３か月かけて本調査を行った。

調査地は，北に九州自動車道，南に春日神社に挟まれた区域で，調査面積は約3,500㎡であった。加治木町内で最古の創建とされるこの春日神社が隣接していたり，かつて真福寺という寺が存在したという記録もあり，当初から寺社関係の情報が得られるのではないかという期待があった。

結果的に寺社そのものの存在を確実に示す遺構は発見されなかったが，礫集中遺構や墓石そのものが発見されたことは，この地が非日常的な空間であったことを示唆していると考えられ，貴重なデータとなった。また，古代の所産と考えられる礫敷溝状遺構は，本県では初めての事例であり，どのような役割をもっていたのか注目される遺構である。古代のものとしては５棟の掘立柱建物跡とともに須恵器や土師器も多く出土していることから，遺跡の北側に広がる高井田の微高地上を含めた検討が必要であろう。

ところで，遺跡を形成する砂礫層中には，縄文時代の遺物が包含されていた。遺物の多くはローリングを受けた状態であったことから，もともとは上流域で使用されていたものと考えられる資料である。縄文時代前期の曽畑式土器から晩期の黒川式土器まで数期の土器が出土しているが，最も多かったのが市来式土器を中心とした後期中葉の土器であった。前述した干迫遺跡もまた市来式土器を中心に出土する遺跡であった。この干迫遺跡と高井田遺跡は直線にして約１㎞の距離がある。しかも２遺跡の間には日木山川と網掛川が存在する。にもかかわらず同じ時期の土器が多量に出土するのである。当時の集落の広がりや構造を考える上で興味深い事例である。少量ながら両遺跡からは曽畑式土器も出土しており，縄文時代におけるこの地域の土地・空間がどのように利用されていったのか注目されるところである。高井田遺跡の発掘調査報告書は，2002（平成14）年３月に刊行された。

（３）姶良バイパス関係の埋蔵文化財調査

姶良バイパスは鹿児島市内から北上し，姶良地区平野部の入口にあたる重富地区脇元から，東餅田の十日町までの全長５．６㎞である。建設予定地内の埋蔵文化財調査は，まず1983（昭和58）年６月に分布調査が実施され，６か所の遺跡が確認された。中原Ａ遺跡・中原Ｂ遺跡・白金原遺跡・西溝原遺跡・森遺跡・小倉畑遺跡の６遺跡である。これらのうち，森遺跡と白金原遺跡は1990（平成２）年に確認調査が実施され，遺跡の残存部分については翌1991（平成３）年３月まで，本調査が行われた。いずれも古代を中心とした遺構・遺物が発見されている（平成14年度報告書刊行）。

その後，1993（平成５）年11月，中原Ａ遺跡・中原Ｂ遺跡・西溝原遺跡の確認調査が実施され，遺構や遺物が発見されなかった西溝原遺跡を除く中原Ａ遺跡・中原Ｂ遺跡において，本調査が必要

である旨のデータが得られた。この中原A遺跡および中原B遺跡が，今回報告する中原遺跡である。

中原遺跡の本調査は，1994（平成６）年４月からスタートした。しかし，国道10号に架かる重富橋が自然災害により一時通行止めの処置がとられたため，中原遺跡が所在するバイパス予定地に一時的な仮設道路を敷設することとなり，中原遺跡の本調査は中断することとなった。仮設道路は遺跡地の表土上に土砂と砂礫の混合土を約50～60cm盛り上げて敷設された。

この中原遺跡発掘調査中断による代替として，1994（平成６）年７月から翌1995（平成７）年３月まで，同じ国道10号姶良バイパス関係の小倉畑遺跡の確認および本調査が実施された。小倉畑遺跡は，1997（平成９）年９月～11月にも本調査が行われ，古代を中心とした遺構や遺物が多く発見され注目された。小倉畑遺跡の発掘調査報告書は，2002（平成14）年３月に刊行された。

（原寸）

[redacted]

第２図　小倉畑遺跡出土の転用硯

第２図は，小倉畑遺跡出土の須恵器甕の胴部である。外面に平行叩き目，内面に平行状の当て具痕が残る。硯に転用されているらしく，内面に筆先を調整したような墨痕が残る。

中原遺跡は，1995（平成７）年４月から調査が再開され，翌1996（平成８）年３月末日まで行われた。

２　加治木町干迫遺跡出土の縄文土器

干迫遺跡は，鹿児島県姶良郡加治木町日木山に所在する遺跡で，縄文時代後期の遺構・遺物が大量に発見された遺跡として知られている。現在加治木ジャンクションとなり，九州自動車道と隼人道路を結ぶ交通の拠点として，日々多くの車が行き交う場所となっている。

干迫遺跡の発掘調査報告書は，1997（平成９年）３月に刊行されたが，遺物ケース（パンケース）約2000箱にもなる大量の遺物に対し，十分な整理期間が確保できなかったこともあり，前述のように代表的な遺物しか掲載できなかった。ここでは，国道10号バイパス（姶良地区）を総括するにあたり，干迫遺跡出土の縄文土器の一部を紹介したい。

（１）干迫遺跡出土の縄文土器の分類について

干迫遺跡の発掘調査報告書では，出土した縄文土器をまずⅠ～Ⅲの３群に分類した。第Ⅰ群が縄文時代早期から後期前葉の土器，第Ⅱ群が縄文時代後期中葉を中心とした磨消縄文系土器，そして第Ⅲ群が縄文時代後期中葉の貝殻文系土器を中心とする一群である。量的には第ⅡとⅢ群の縄文時代後期中葉の資料が圧倒的多数を占めた。ここでは，これらの内の第Ⅲ群の資料を紹介する。

第Ⅲ群土器について，報告書の表現をそのまま使用すると，「第Ⅱ群の磨消縄文土器群とほぼ同期のものと考えられる貝殻文系の土器群で，市来式土器や丸尾式土器などを中心とした土器が該当する。この期のものと考えられる無文土器や型式不明の土器，特殊な器種である台付皿形土器，また少量出土している晩期土器もこの群に含めた」土器群ということになる。

この第Ⅲ群土器は以下のようにさらに11類に分類した。

第１類～市来式土器１　第２類～市来式土器２　第３類～市来式土器（無文）
第４類～草野式土器　第５類～丸尾式土器　第６類～台付皿形土器
第７類～無文土器　第８類～型式不明土器，その他
第９類～上加世田式土器　第10類～黒川式土器　第11類～刻目突帯文土器

今回は，第２類から第11類の代表的な土器を取り上げることにする。

（２）第Ⅲ群－２類土器（第３～８図　１～50）

２類土器は，断面三角形を呈する口縁部の文様が，胴部まであふれているものの一群である。市来式土器の中でも後出のものと考えられる。河口貞徳氏によって市来Ⅲ式土器と呼ばれた土器群と同一である。胴部上位の文様は，沈線や貝殻刺突文などを組み合わせ，14や21，34や39などのように比較的華美な文様が施された土器も多い。25や34などは，４類土器の文様とも類似しており，両者の密接な関係をうかがわせる好資料となっている。把手付の土器がみられるのも特徴である。

（３）第Ⅲ群－３類土器（第９～12図　51～66）

３類土器は，市来式土器の特徴（口縁部が断面三角形を呈する）を有する器形を持ちながらも，文様が施されていない土器群である。山形口縁と平口縁の両者があり，完形に復元できたものも多かった。なかには64のように口縁部下にポッチ状の突起を付したものもある。

（４）第Ⅲ群－４類土器（第13～21図　67～129）

４類土器は，草野式土器と呼ばれている土器群である。基本的には口縁部が外反する深鉢形であるが，126～129のように，一見壺形のような器形を呈するものもある。

外反する口縁部や口唇部には，沈線文や貝殻刺突文，あるいはそれらの組み合わせによって数多くのバリエーションをもった文様が施されている。また，口縁端部がやや肥厚しているものも多い。草野式土器は河口貞徳氏の型式設定以来，長く市来式土器の次に編年されていたが，本田道輝氏の指摘通り，市来式土器のある段階と並行して存在したものと理解したい。２類土器の項でも述べたように，両者の密接な関係をうかがわせる土器（82，111，126など）が多いことはそのことを指示しているものと考えている。80，105，108などのように口縁部に突起が付く（多くは４か所）ものも多い。

（５）第Ⅲ群－５類土器（第22～48図　130～287）

５類土器は丸尾式土器である。ここでは若干前後の土器も含めている。１～４類土器に後出すると考えられる一群である。基本的には口縁部の断面形が「く」字状になるものと外反するものがある。また，それぞれに山形口縁と平口縁とがみられる。ここでは，口縁部断面が若干肥厚するものも含めて取り上げた（130～156）。これらは，２類土器のように文様が胴部上位まであふれたもので沈線文と貝殻刺突文の組み合わせからなるものが多い。130や131のように沈線も多条化している。

157～271がいわゆる丸尾式土器である。口縁部断面形が「く」字状を呈し山形口縁を呈するもの（157～176，198～212），平口縁のもの（177～196，217～231），口縁部が外反し山形口縁を呈するもの（197，213～216，232～253），平口縁のもの（230，231，254～271）の４種に大きく細分することができる。また，157～197のように口縁部文様が沈線文＋貝殻刺突文のものと，198～271のように貝殻刺突文だけのものに分けることもできる。４類土器との関係からも，沈線文が施されている

もののほうが古い傾向がみられる。沈線文は細線化かつ多条化するという傾向も特徴である。

272～287は外側へ開く口縁部を呈し，口縁部下と胴部の２か所に文様帯をもつ土器である。ここでは丸尾式土器と同類として取り扱ったが，厳密には丸尾式土器に後続する土器で，納屋向タイプと呼ばれているものの一群である。器形がやや間延びしてくることや文様帯の２分化（磨消縄文系土器の影響か？）という特徴をあげることができる。ただし，再び沈線文が用いられていることから，丸尾式→納屋向タイプという流れについては，まだまだ資料の検討も必要である。

（６）第Ⅲ群－６類土器（第49～70図　288～415）

６類土器は，いわゆる台付皿形土器を一括した。皿の部分が浅鉢状のものもあるが，ここでは一括して取り扱った。皿（鉢）の上面観から，方形を呈するものと円形を呈するものの２種に大別することができる。本遺跡でもっとも多く見られたのが288～339のように，上面観が方形で４か所の角部に装飾突起が施されたものであった。おおむね市来式土器期のものと考えられる。

上面観が円形を呈するものにはいくつかのタイプがみられた。ひとつは341や342のように，口縁部に「M」字ないし「W」字状の粘土紐を貼付しているものである。第65，66図にあるように破片も多く出土しているタイプである。このような貼付文は北久根山式土器の深鉢に施される例が多いことから，当然同時期のセットである可能性が高いと考えられる。340や346にみられる「S」字状の文様も北久根山式土器の鉢などにモチーフとして良く使用されていることから，関連があろう。344，345，410～412，414，415は磨消縄文そのものの，あるいはそれを意識した文様が施されている。辛川式段階ぐらいの時期を想定したい。343のような削り出しによる沈線文や整形のみられる土器もひじょうに特徴的である。皿部の文様には「S」字の変形と考えられるものもある。また，底部の文様も407や408にあるようにかなり規則的である。このような土器は白寿遺跡（吹上町）や中ノ原遺跡（鹿屋市）からも出土している。本遺跡も含めた３遺跡の共通点は，納曽式土器や辛川式土器（あるいは西平式土器の前段階の土器）が出土しているということである。文様の在り方が極めて限定された完成度の高い土器であることから，同時性を追求する際のメルクマールとして有効な土器であるといえよう。

実測図中で示したように，６類土器は顔料塗彩の資料が多いのが特徴である。おおむね赤色顔料を用いたものであるが，注目されるのは白色顔料塗彩の資料も少なくないということである。赤と白の組み合わせもあったようで，300などは白地に赤の文様を施したような痕跡がうかがえる。文様には「S」字状のものや渦巻文らしきものもあり，かなり意識的な塗彩が行われていることが予想される。器形や文様そのものの華やかさに加え，赤色や白色の顔料を塗彩することにより，かなり派手な仕上がりの土器であったことが想像できる。

ところで，胎土観察の結果，前述した市来式土器期の土器には，火山ガラスが多く含まれているということが判明した（第４表参照）。しかも透明のガラスと黒褐色のガラスの両方含まれている資料が多くみられた。これらはおおむね明茶褐色の色調を呈するものである。この火山ガラスの多さは，深鉢ではさほど目立たないことから，台付皿形土器の製作時には明るい色調の仕上がりを求めて粘土の選定を行った可能性が高いと考えられる。

以上のようなことから，やはりこの種の土器は「ハレの器」的な特別の用途を考えざるを得ない。特別な出土状況はみられなかったが，皿の突起部片などの装飾性の高い部位を集めると，あたかも

土偶片の集合体をみるようであったことも付け加えておきたい。

（７）第Ⅲ群－７類土器（第71，72図　416～422）

７類土器は，いわゆる無文土器である。口縁部が外反するもの，直行するもの，内湾するもの，山形のものや平縁のものなど，さまざまな器形があり，自由奔放に製作された感が強い。417や421などのように，粘土の接合面が比較的明瞭に残るものも多かった。また，421のように，かなりいびつな器形を持つものが多いことも特徴のひとつである。

（８）第Ⅲ群－８類土器（第73～76図　423～440，450）

８類土器は，縄文時代後期該当の土器で型式不明やその他のものを一括して取り扱った。

423は高坏形土器の脚部である。第Ⅱ群－12類土器（太郎迫式土器）に伴うものであろう。中央に焼成前の透かし孔がみられる。

424は第Ⅲ群－１類土器（市来式土器）の口縁部片であるが，深鉢にしては珍しく赤色顔料が塗彩されたものである。口縁部文様の凹線部を中心に塗彩されている。

425～428は注口土器である。425は口径約18.0㎝，胴部最大径が約35.0㎝，推定器高約22.0㎝を測る大型の土器である。器形は算盤状を呈し，胴部が大きく張り出している。文様はややフラット面をもつ口唇部と胴部上半に施されているが，多重沈線（曲線＋直線）や細かな連続刻目文で構成されている。注口部は出土していないが，胴部上半部中央にその痕跡がみられる。口唇部には突起が付いていた可能性もある。器面にはミガキ調整の跡があり，丁寧な仕上げを行っている。この土器の最大の特徴は，外器面全体に水銀朱が塗彩されているということである。鹿児島県における縄文時代の水銀朱使用例は，榎崎Ｂ遺跡出土の晩期例（黒川式土器の浅鉢）があるが，本例はそれより古い事例となった（大久保浩二　1997「干迫遺跡出土の縄文土器に塗彩された顔料について」『干迫－Ⅲ』鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書22）。

426，427は同一個体と考えられる。前者が口縁部から胴部，後者が注口部と考えられる。茶釜状の器形をもち，若干内側へ立ち上がる口縁部外面に縄文が施されている。

428はやや分厚い器壁をもつ注口部である。

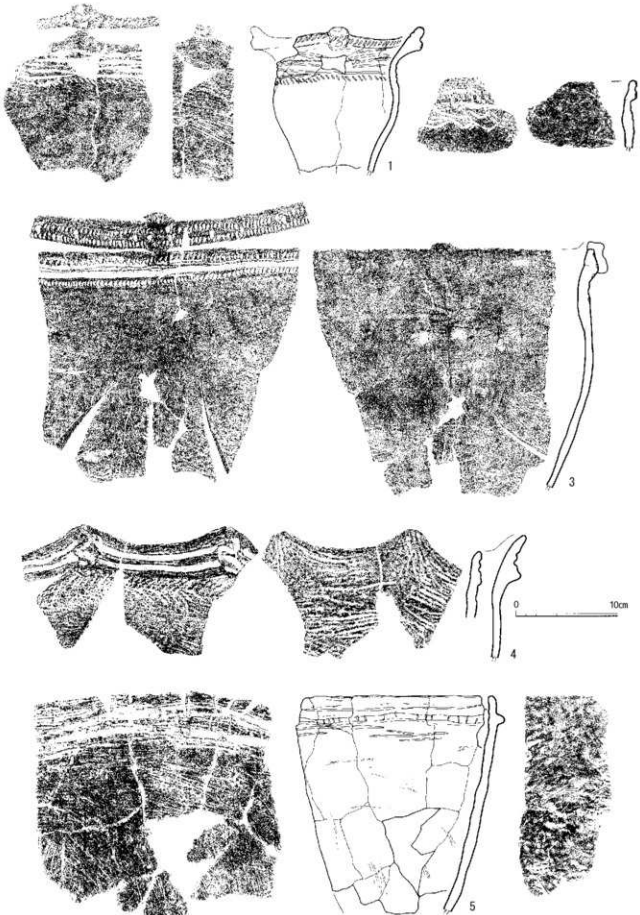
これら３個体の注口土器のうち，428は九州の磨消縄文土器系（西平式以降）のものと考えられるが，425，426（市来式土器期と推定）は本来九州でみられるものではない。特に425は加曽利Ｂ式系の影響を受けたものである可能性が高い。西日本の注口土器は加曽利Ｂ１式の段階で大型化するという傾向（西田泰民　1992「縄文土瓶」『古代學研究所　研究紀要』第２輯）に合致する資料であると考えられる。水銀朱の存在を合わせると，425の．”ふるさと”は近畿地方を中心に東四国から東海西部あたりの範囲の中にあると推定される。どのような経路・経緯で干迫の地までたどりついたのか？どのような使われ方をしたのか？極めて注目される土器である。

第74図の資料は，第Ⅱ群－２類（鐘崎式）土器を意識したと考えられる文様をもつ土器群である。

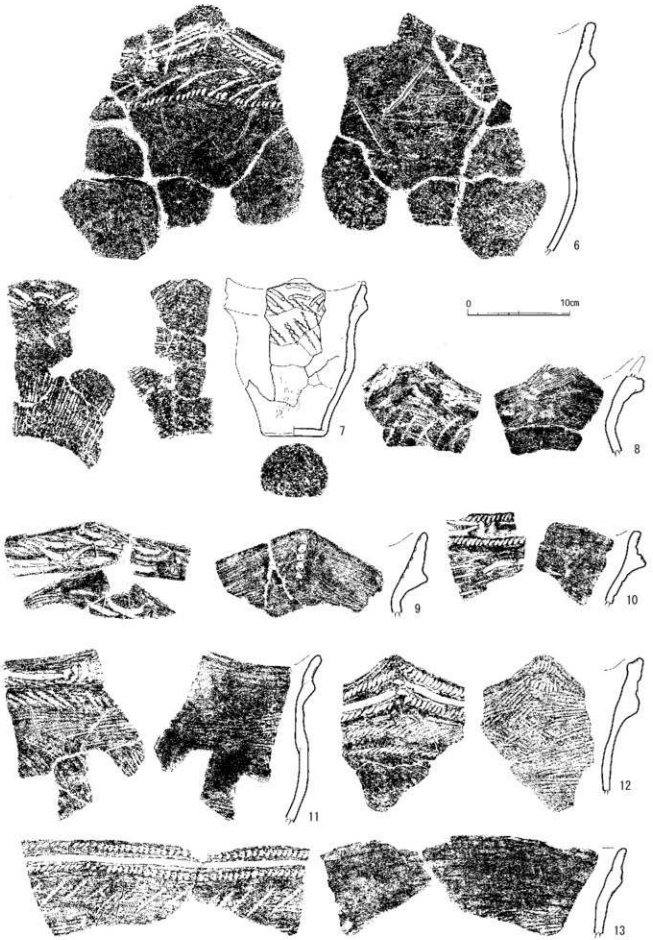
450は口径86.0㎝，推定器高約55.5㎝を測る，超大型の深鉢形土器である。第Ⅱ群－９類（幸川式）土器の範疇に入る土器である。外器面にはススが付着しており，その用途が注目される。

（９）第Ⅲ群－９～11類土器（第75図　441～449）

少量であるが，縄文時代後期終末から晩期にかけての土器も出土した。本遺跡および周辺域の変遷を語る上で，貴重な資料である。

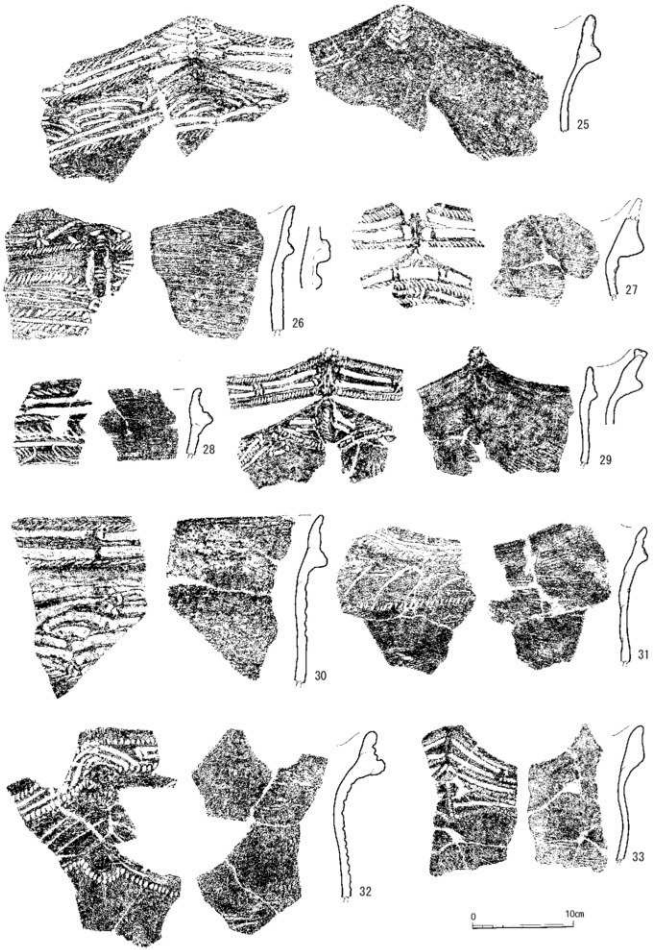


第３図　縄文土器(1)

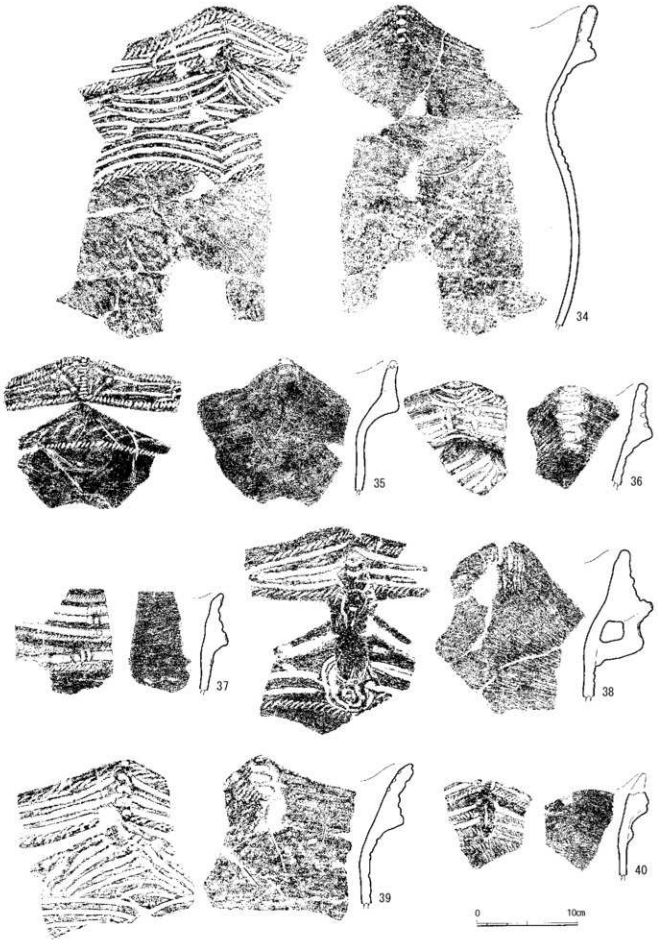


第４図　縄文土器(2)

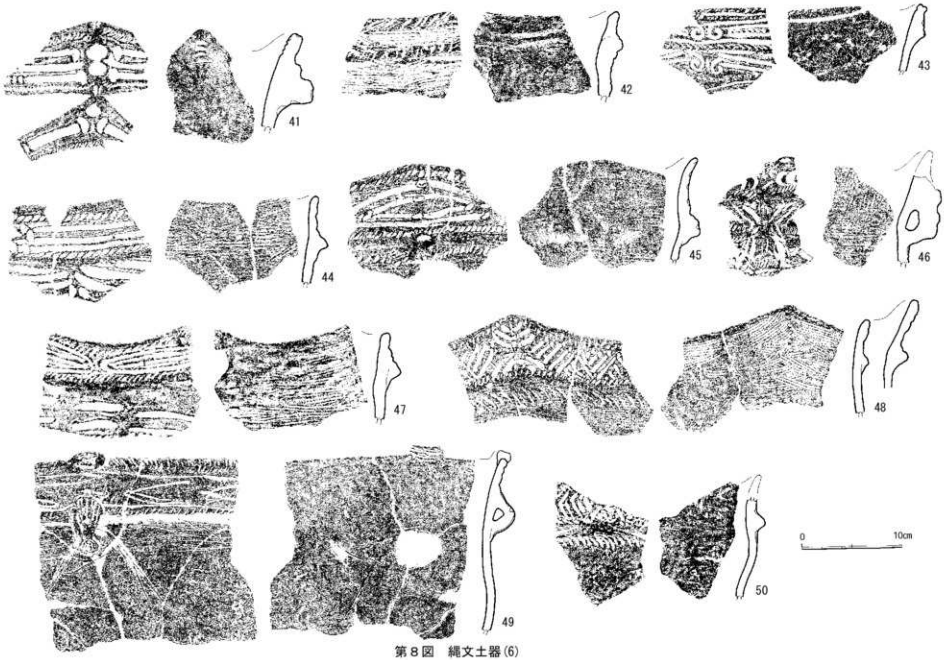
第５図　縄文土器(3)



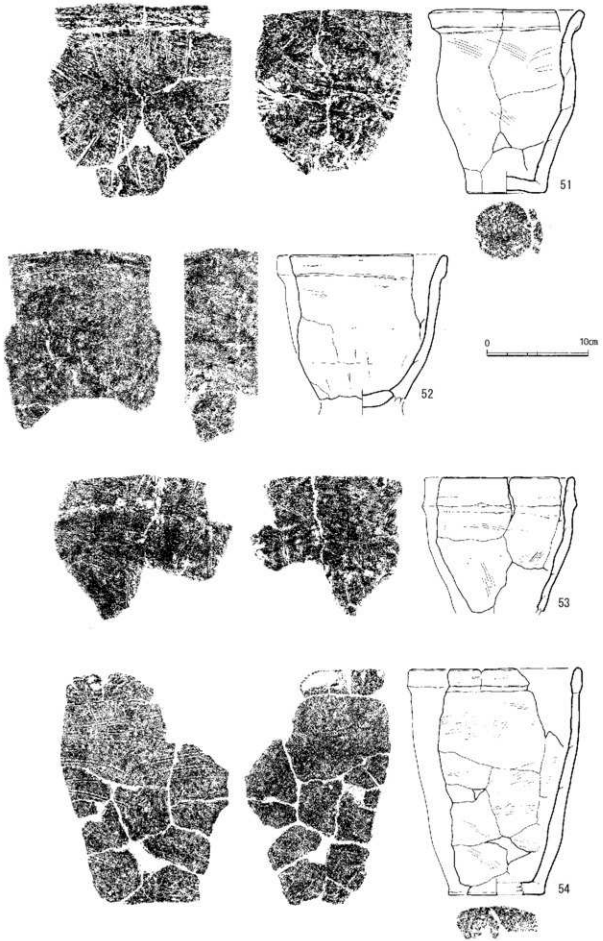
第６図　縄文土器(4)



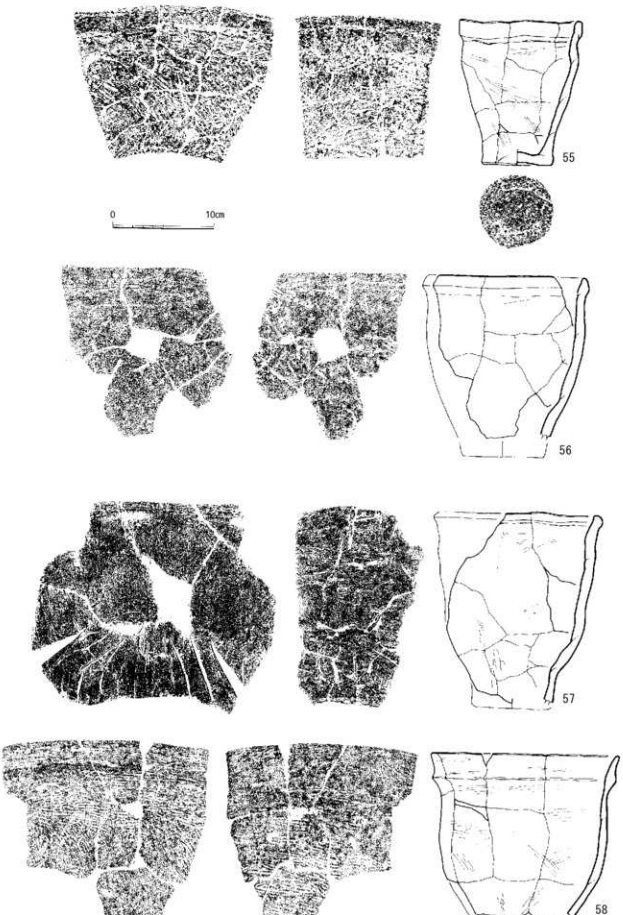
第７図　縄文土器(5)



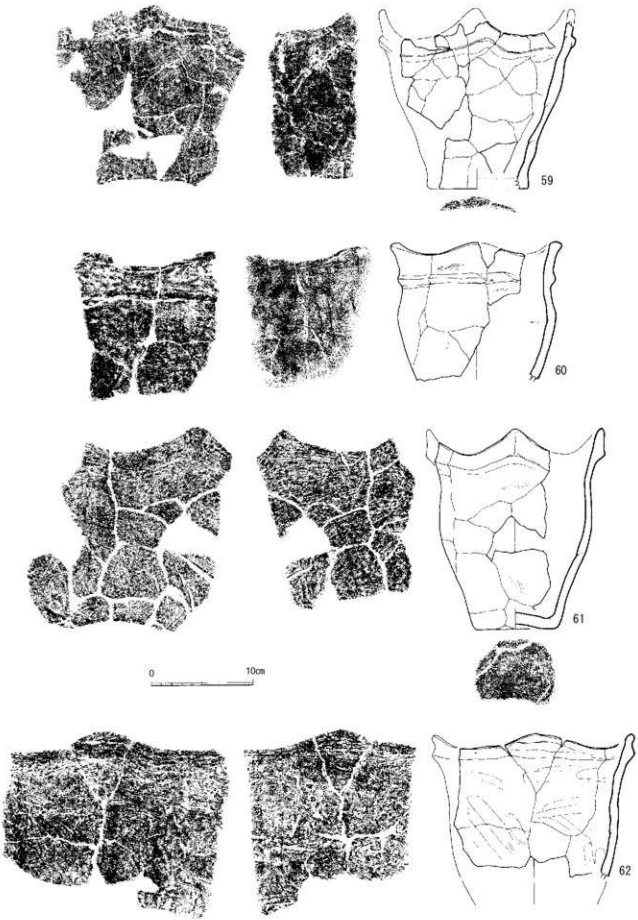
第８図　縄文土器(6)



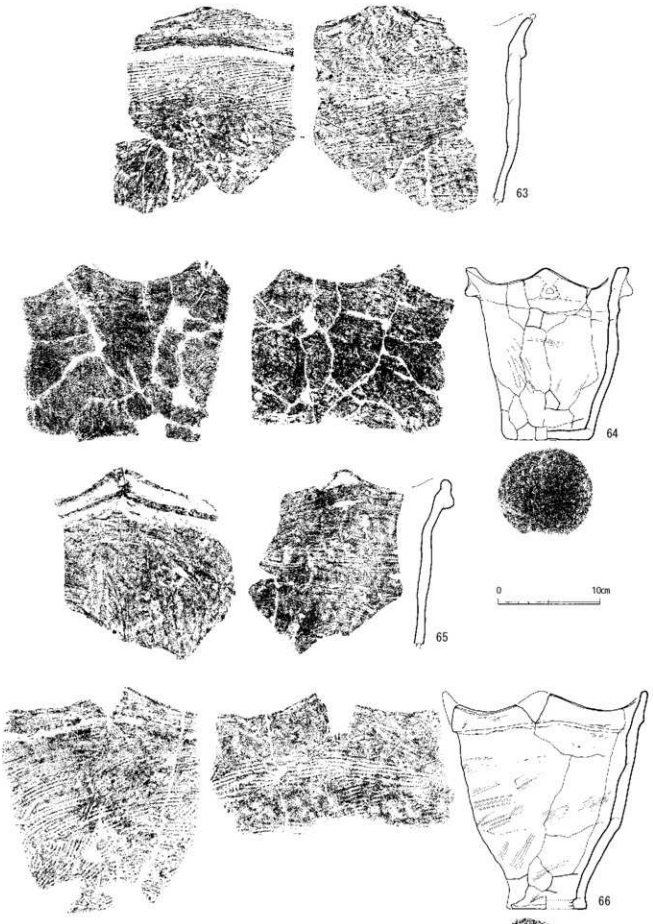
第９図　縄文土器(7)



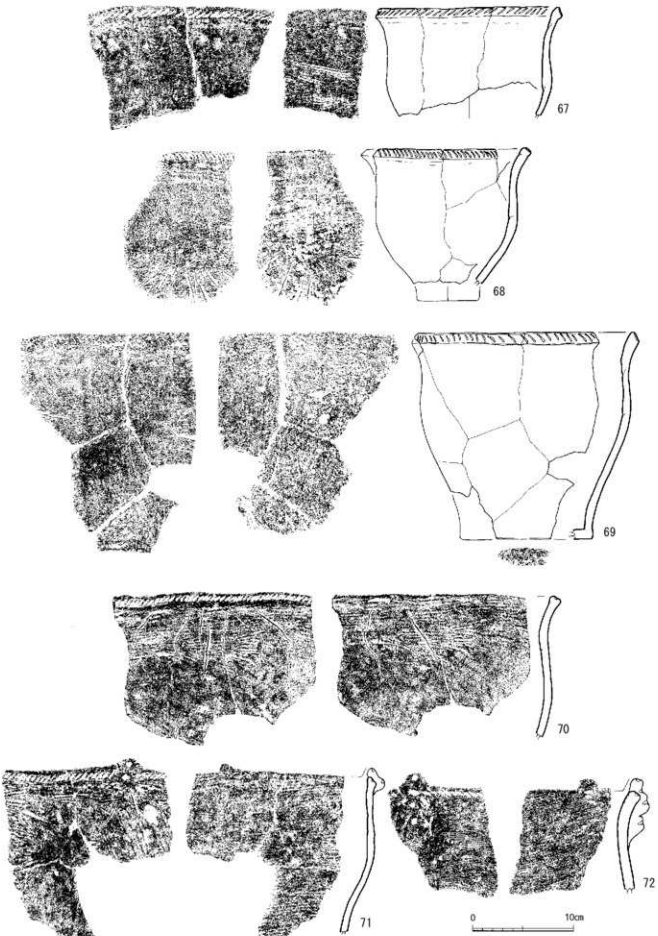
第10図　縄文土器(8)



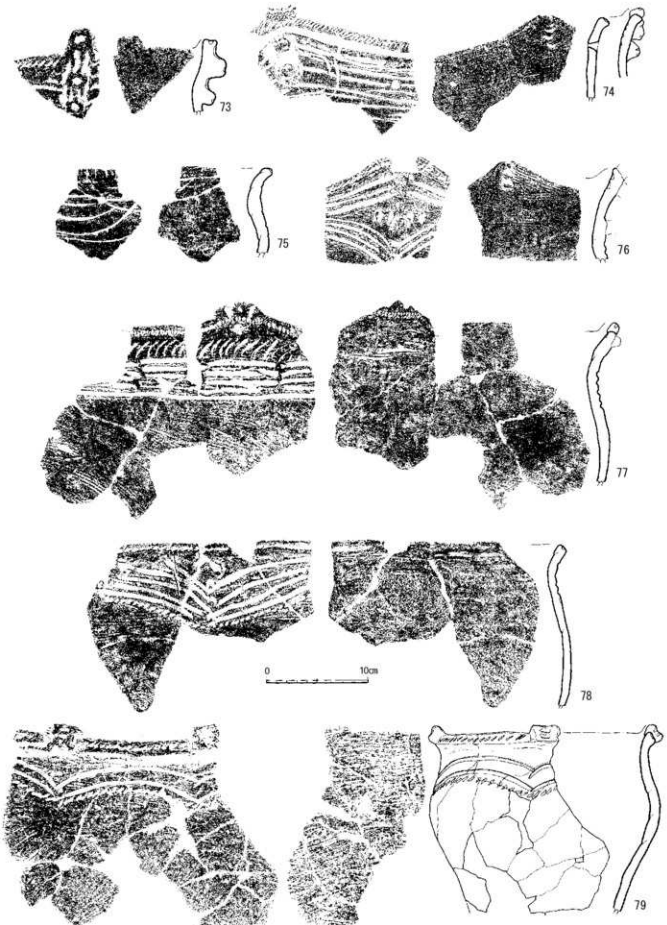
第11図　縄文土器(9)



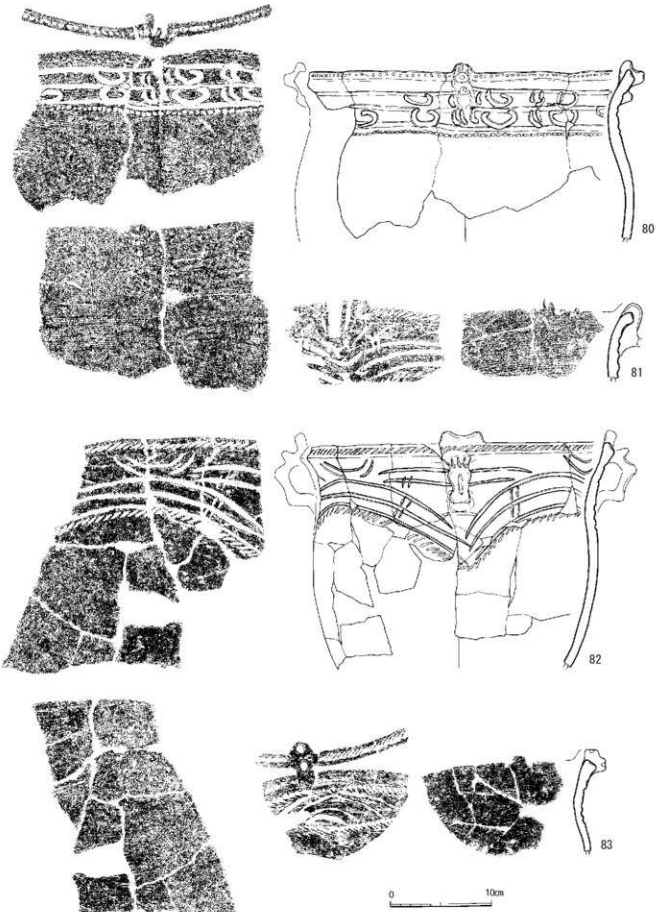
第12図　縄文土器(10)



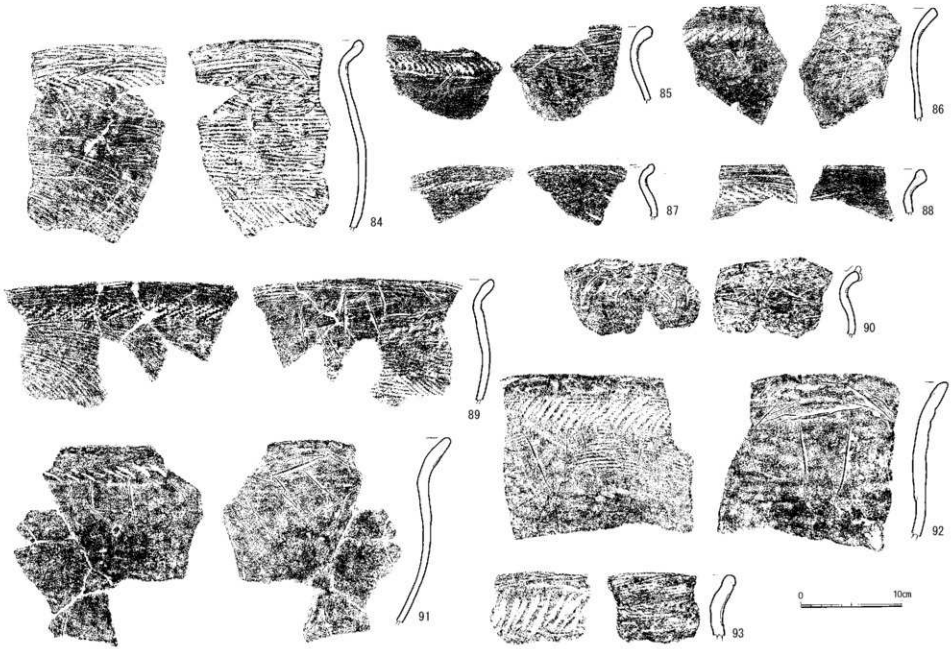
第13図　縄文土器(11)



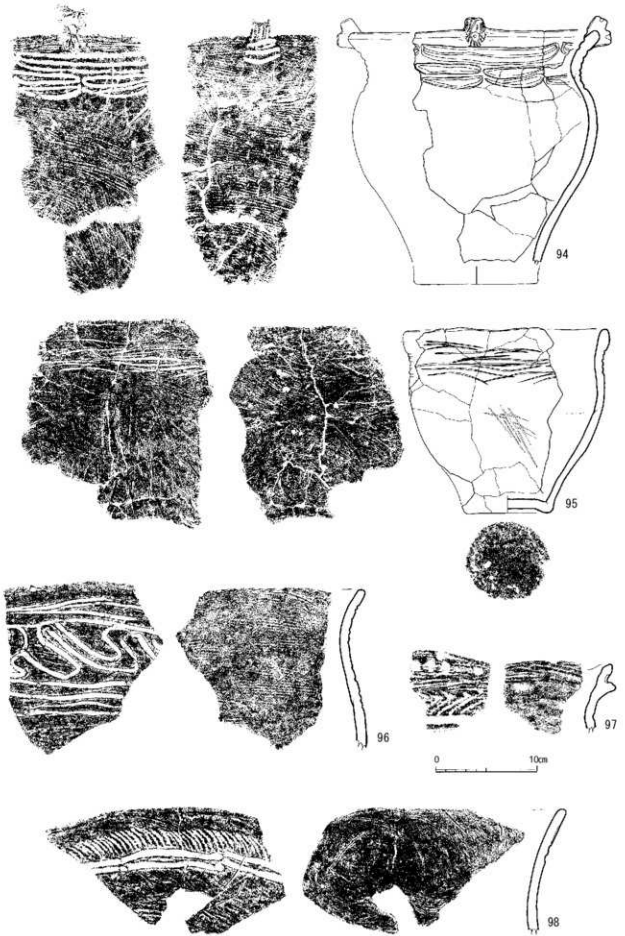
第14図　縄文土器(12)



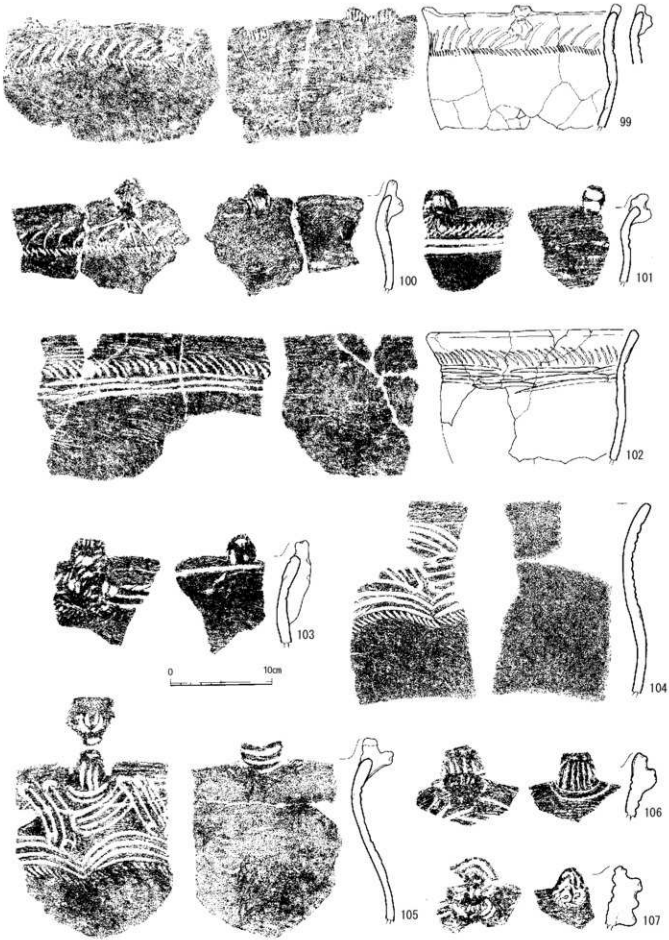
第15図　縄文土器(13)



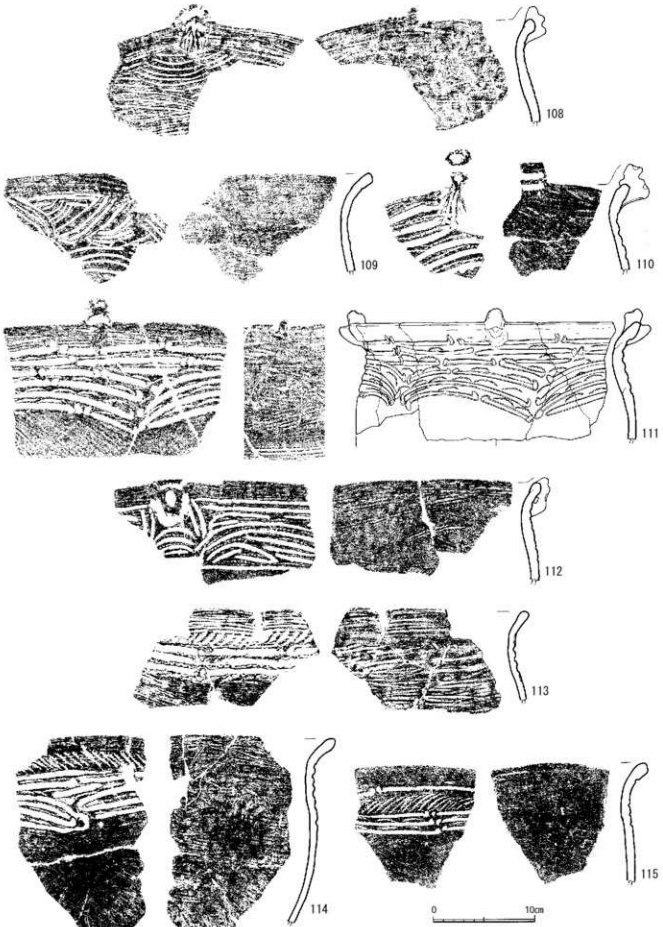
第16図　縄文土器(14)



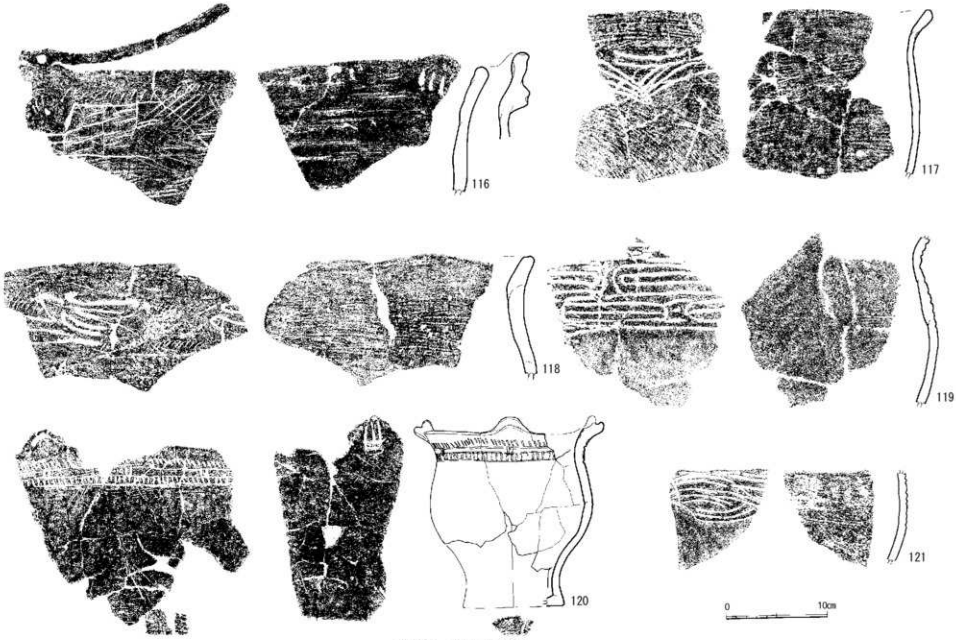
第17図　縄文土器(15)



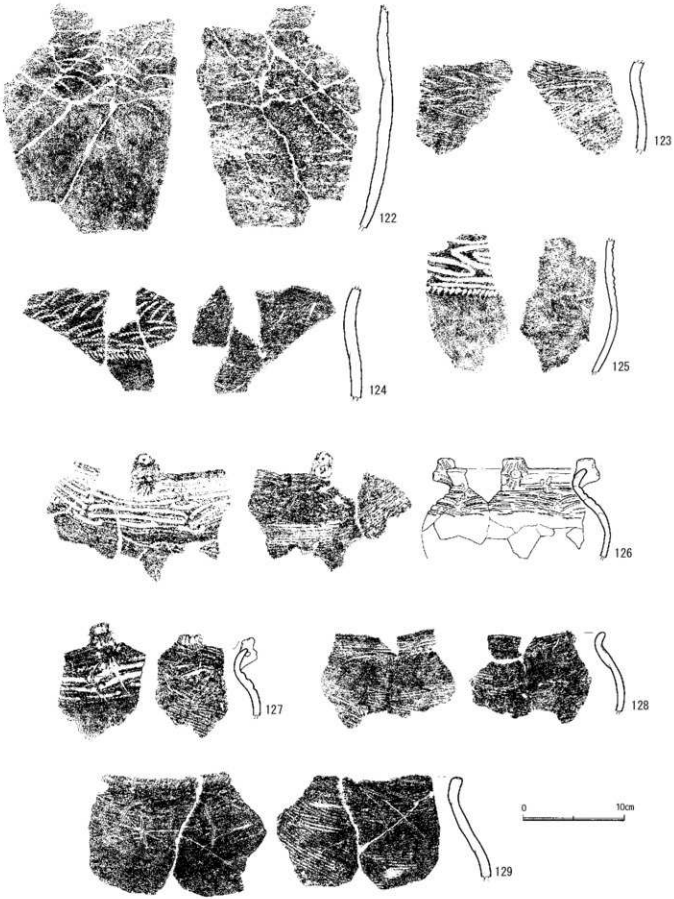
第18図　縄文土器(16)



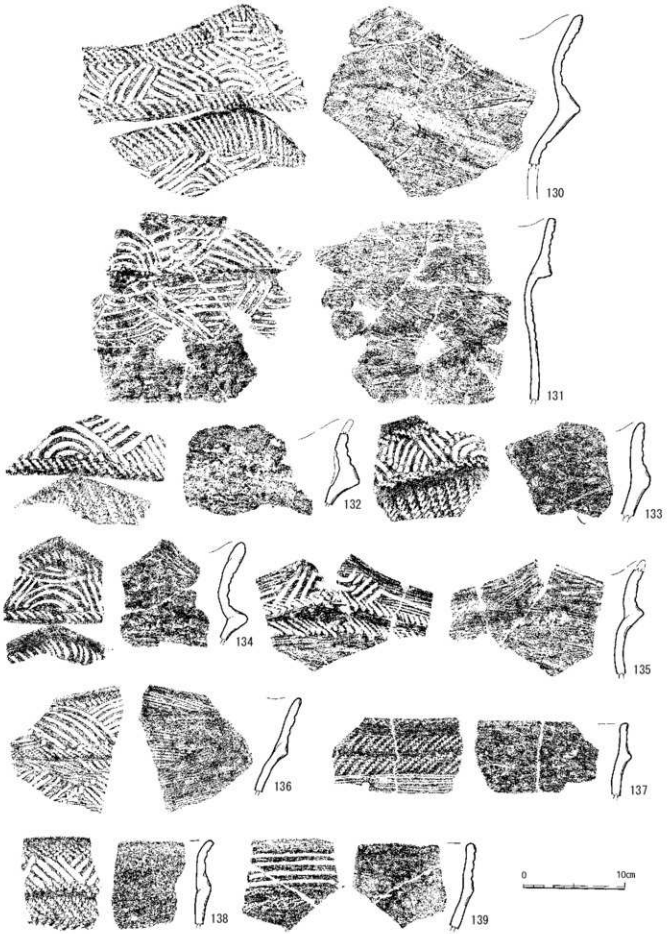
第19図　縄文土器(17)



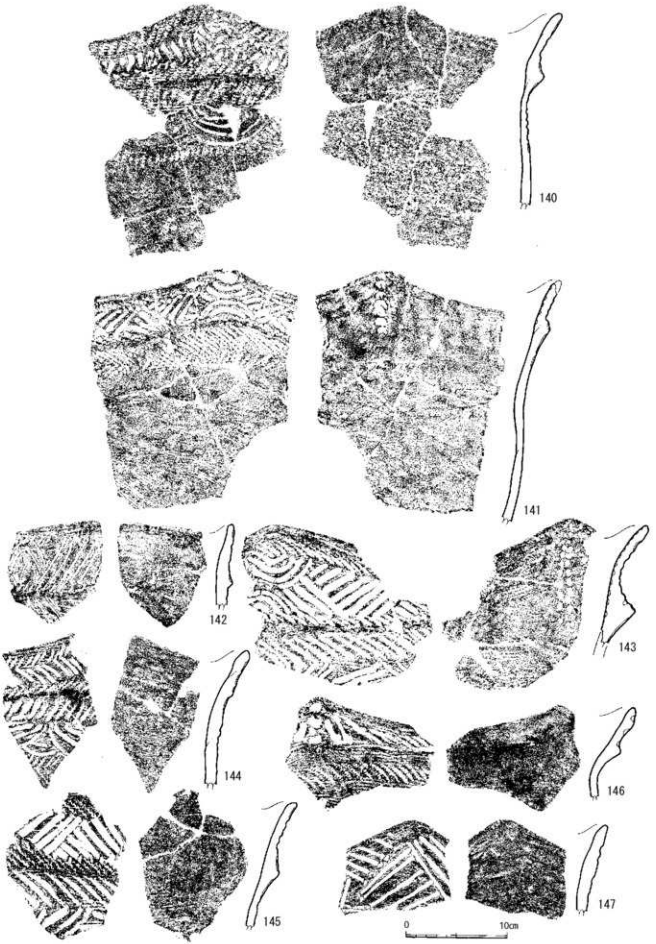
第20図　縄文土器(18)



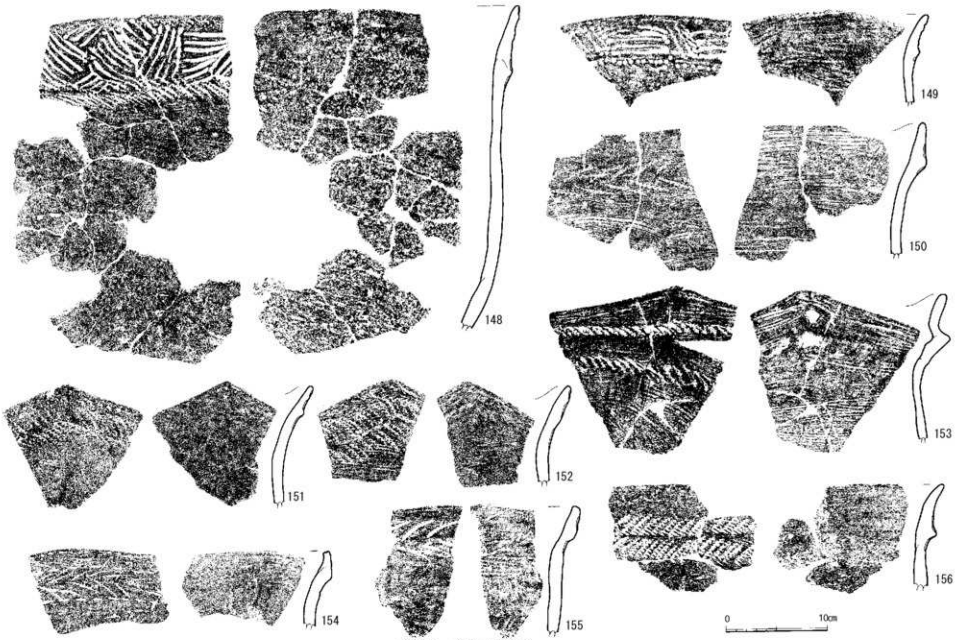
第21図　縄文土器(19)



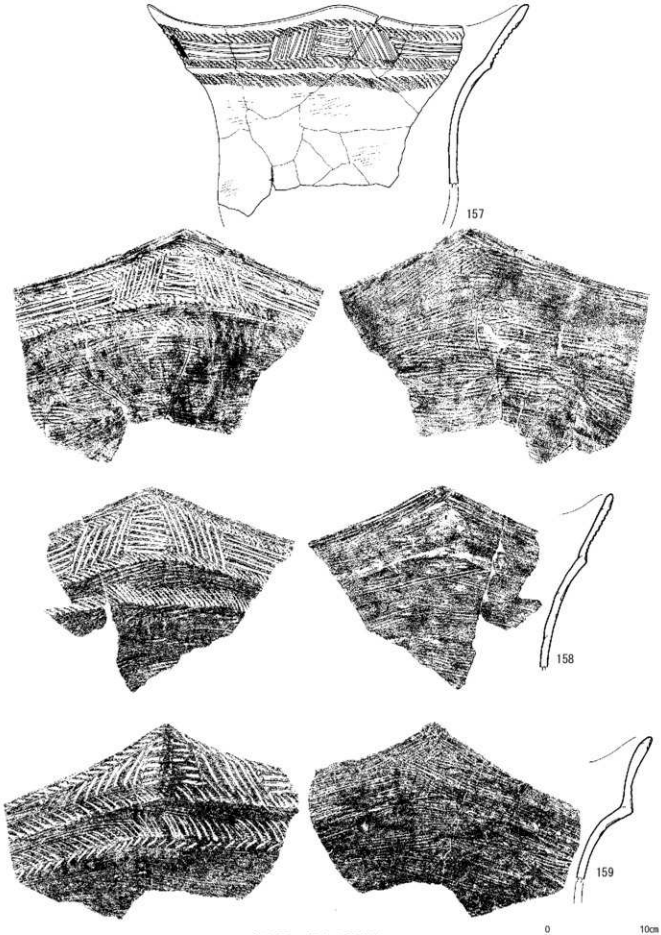
第22図　縄文土器(20)



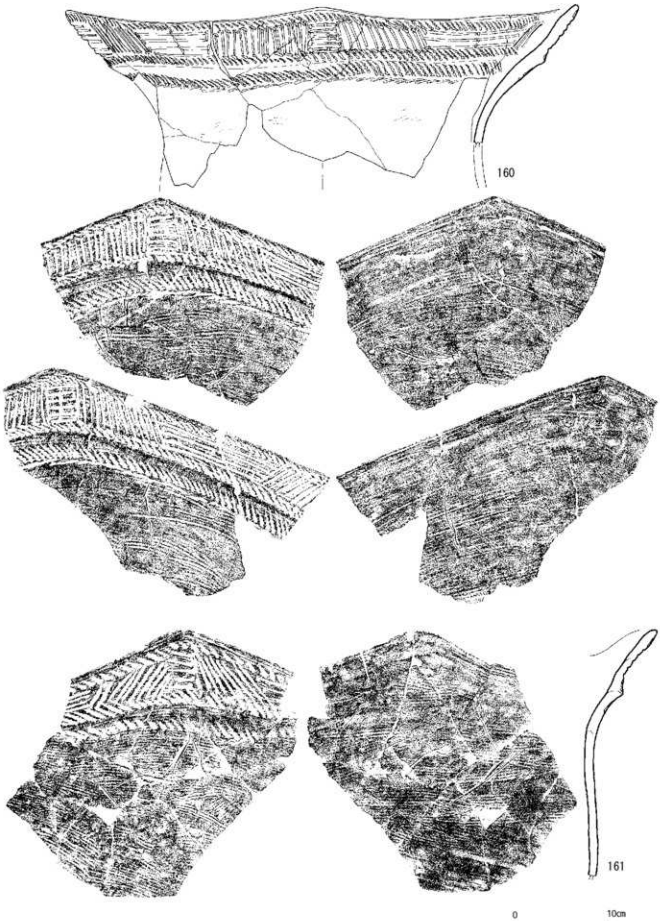
第23図　縄文土器(21)



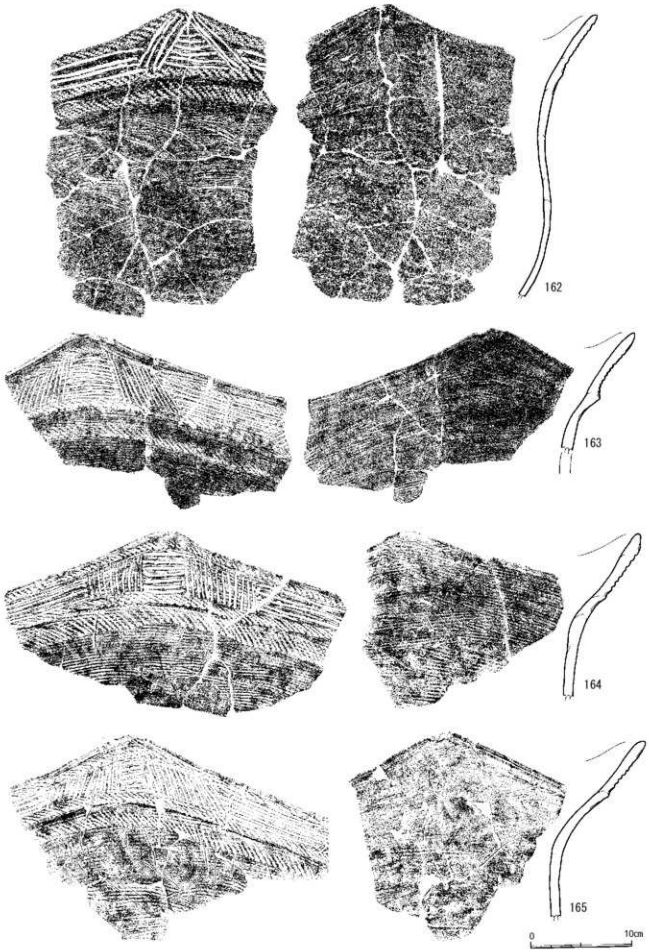
第24図　縄文土器(22)



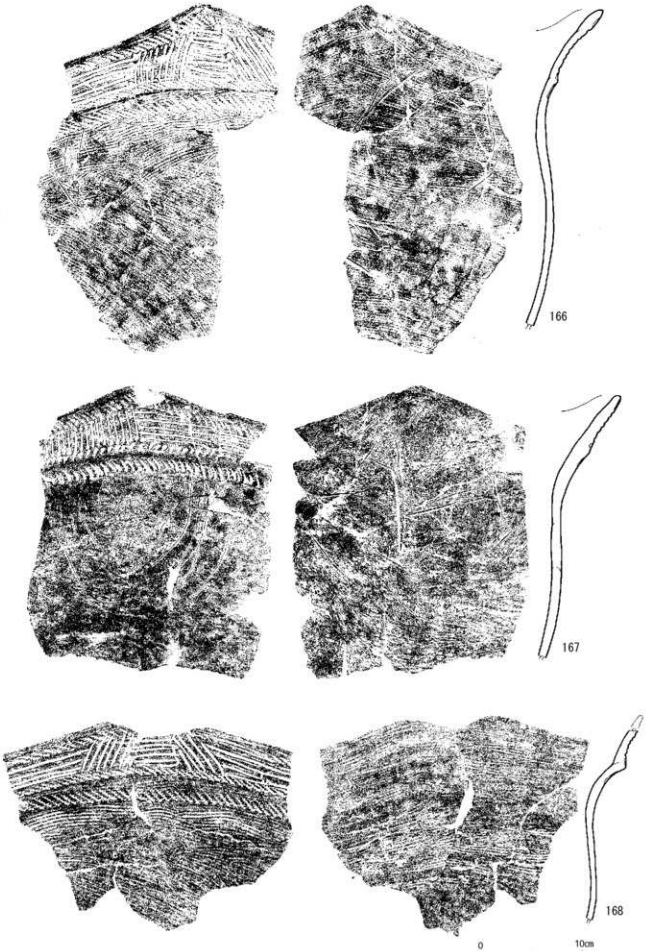
第25図　縄文土器(23)



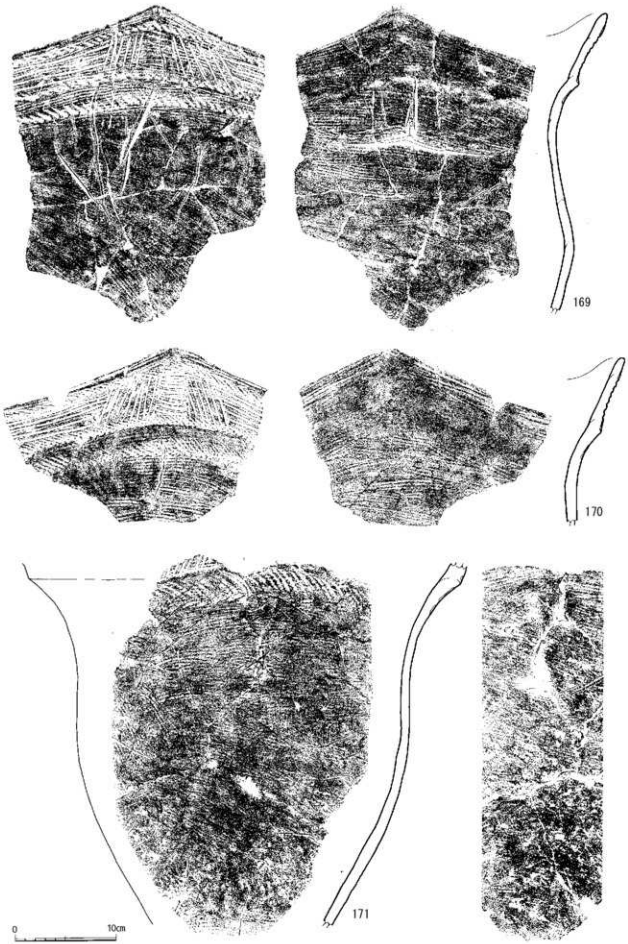
第26図　縄文土器(24)



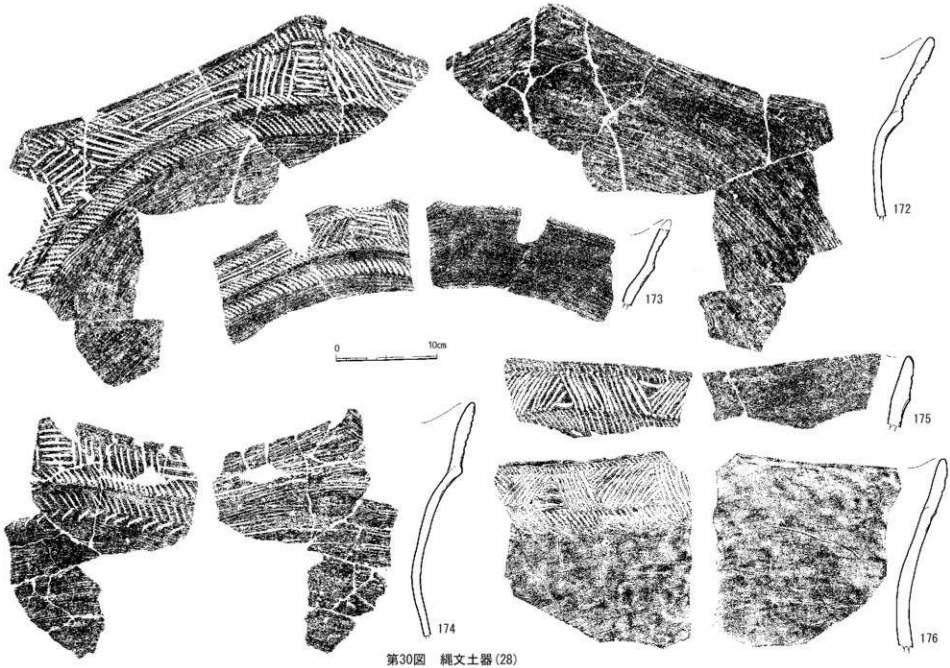
第27図　縄文土器(25)



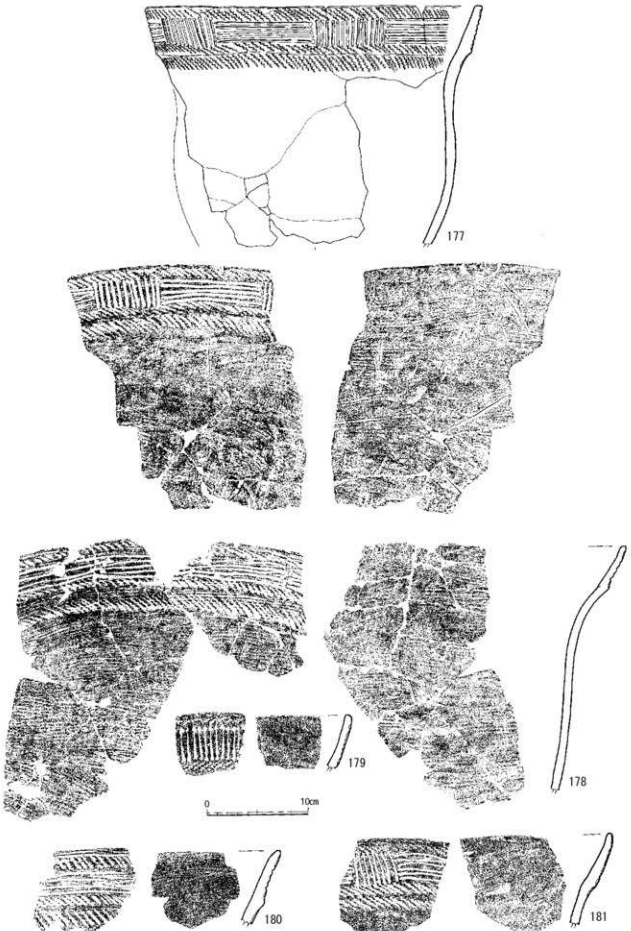
第28図　縄文土器(26)



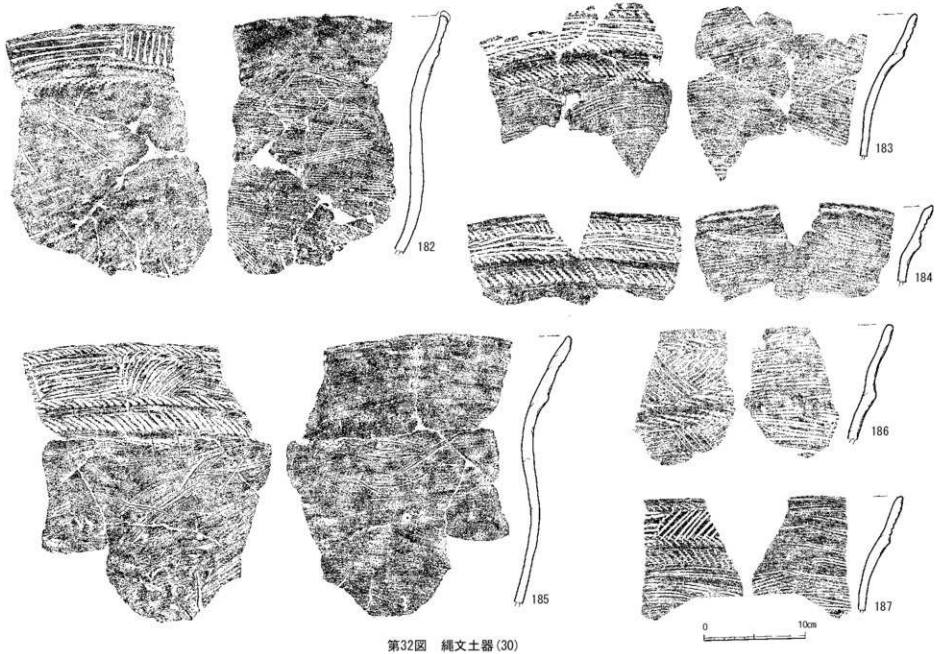
第29図　縄文土器(27)



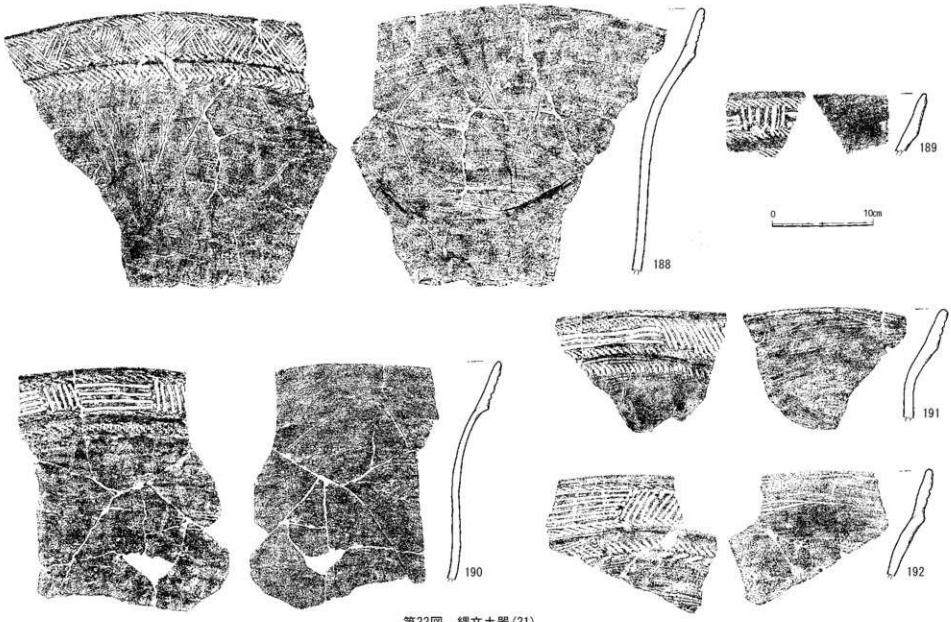
第30図　縄文土器(28)



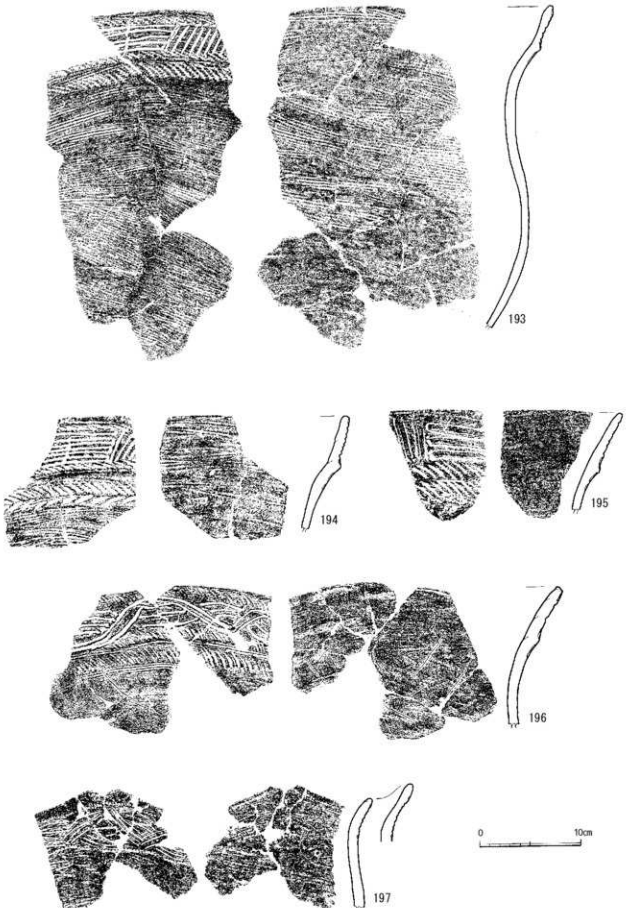
第31図　縄文土器(29)



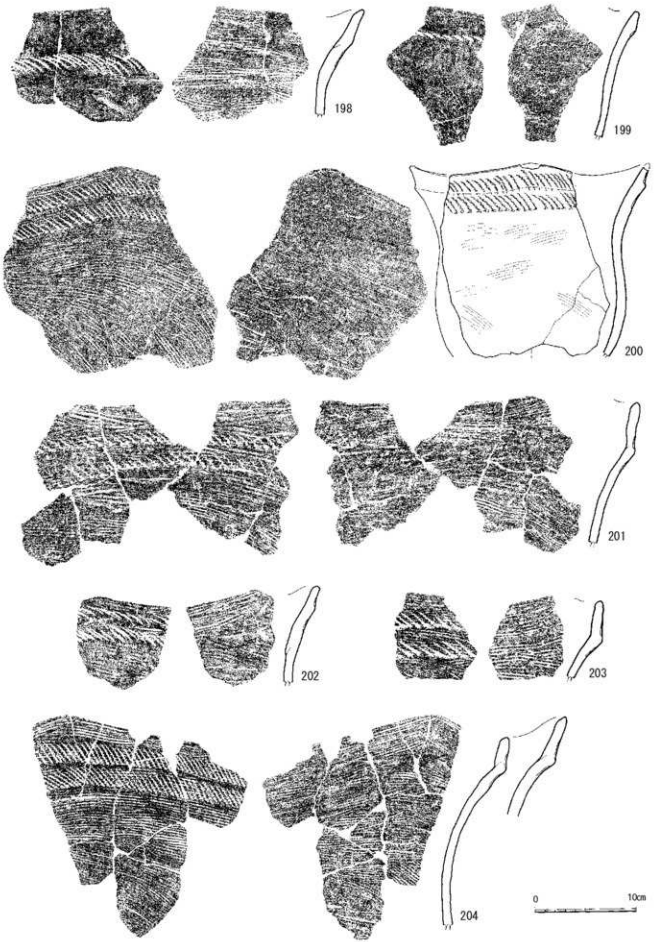
第32図　縄文土器(30)



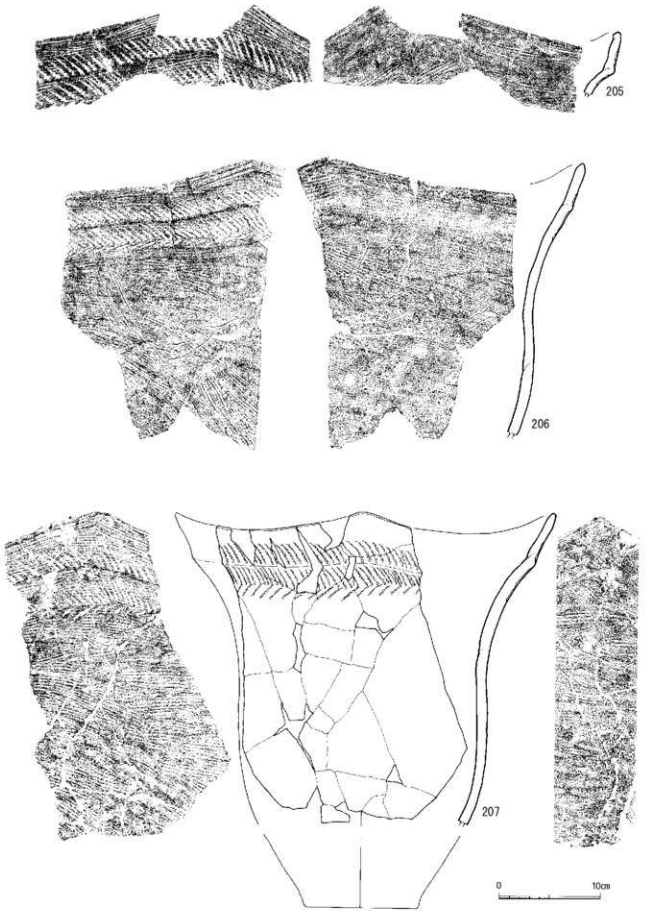
第33図　縄文土器(31)



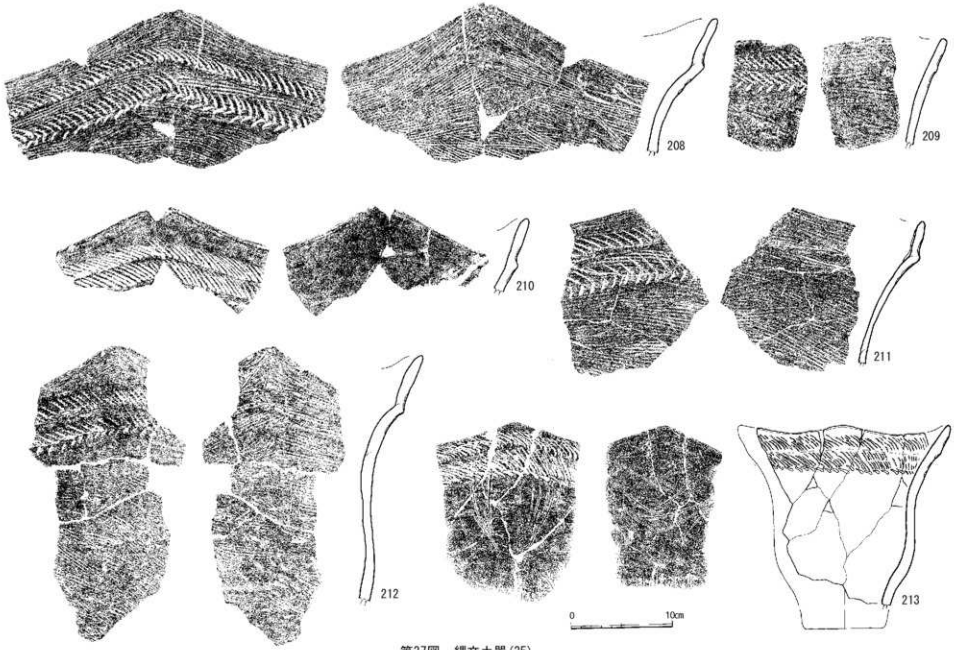
第34図　縄文土器(32)



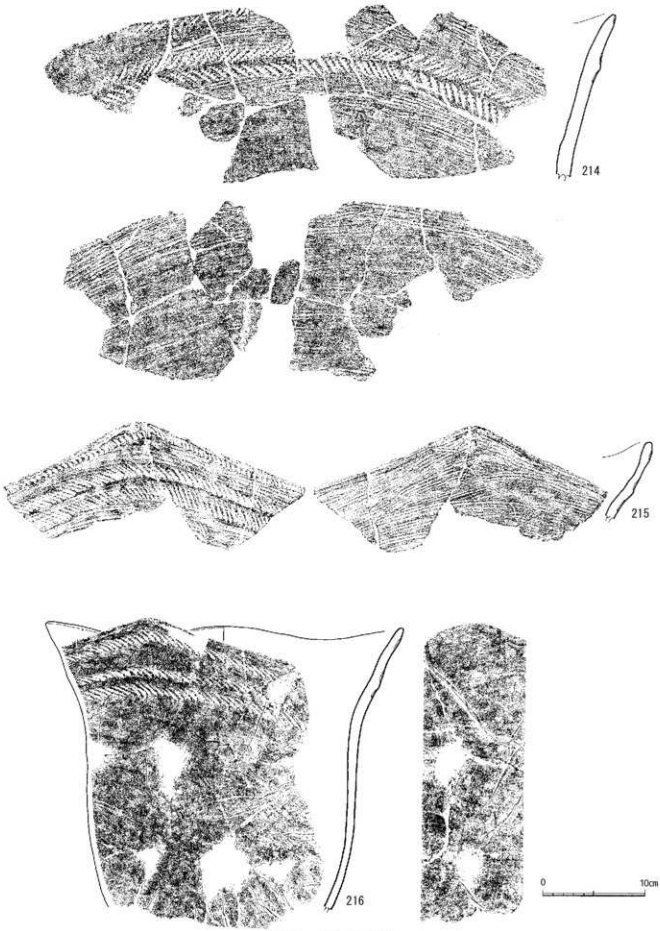
第35図　縄文土器(33)



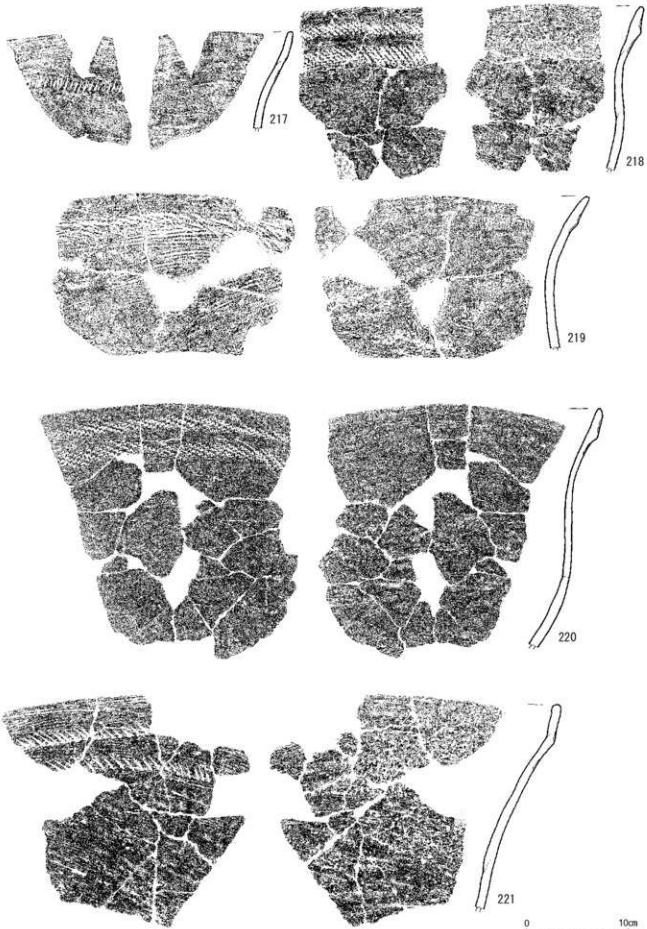
第36図　縄文土器(34)



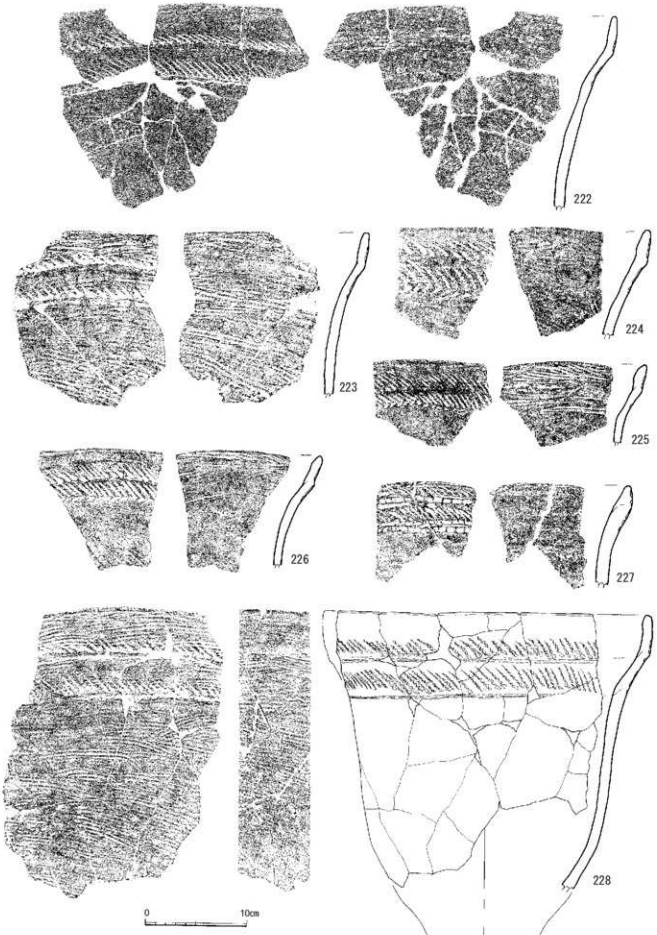
第37図　縄文土器(35)



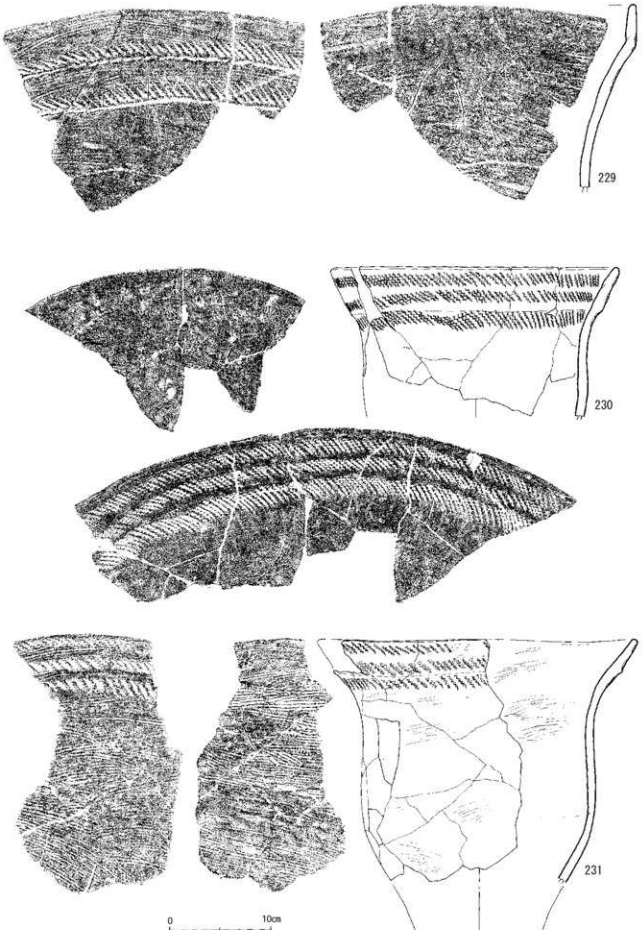
第38図　縄文土器(36)



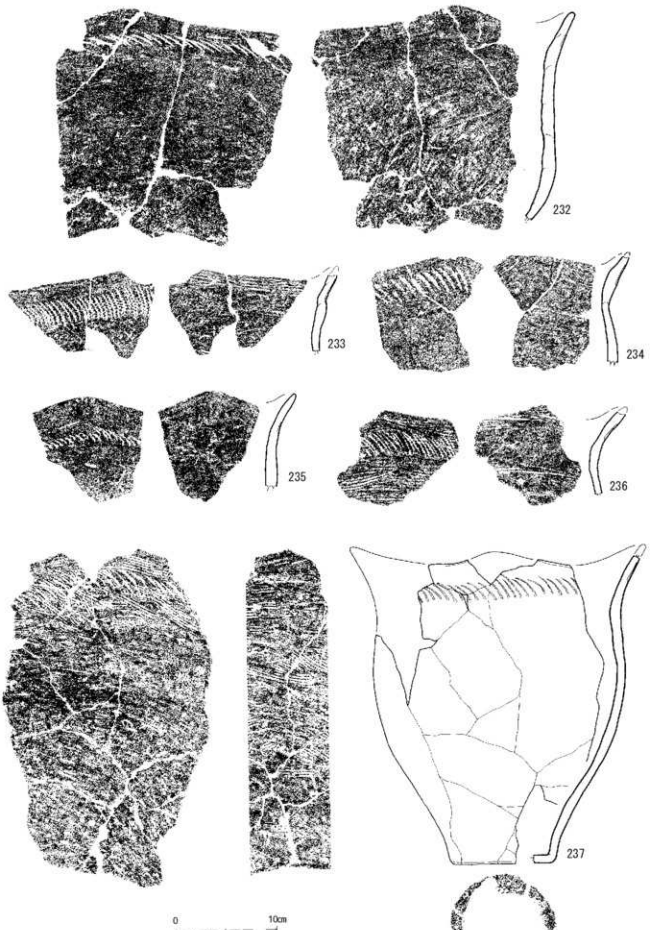
第39図　縄文土器(37)



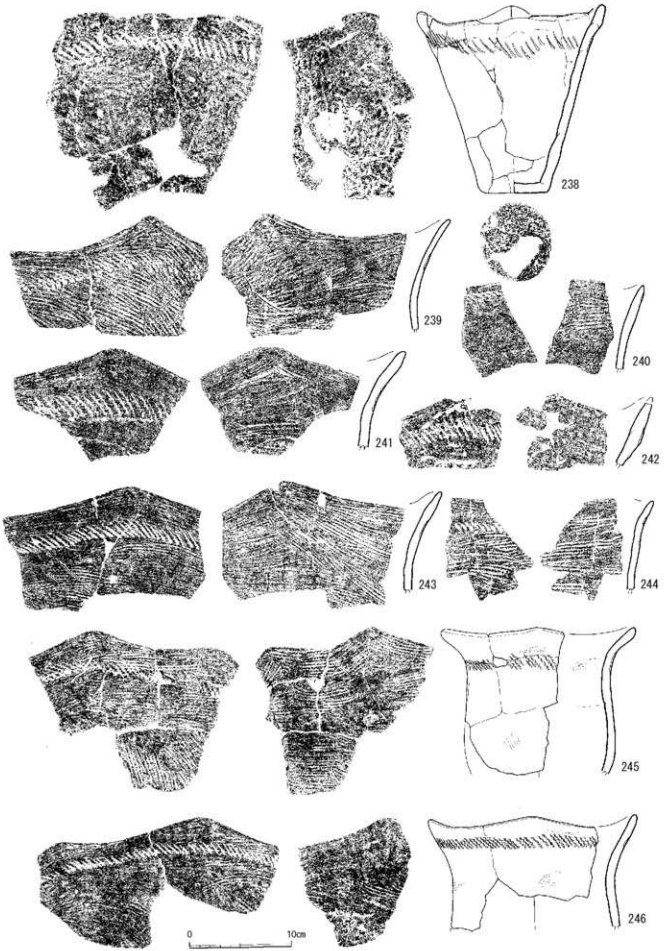
第40図　縄文土器(38)



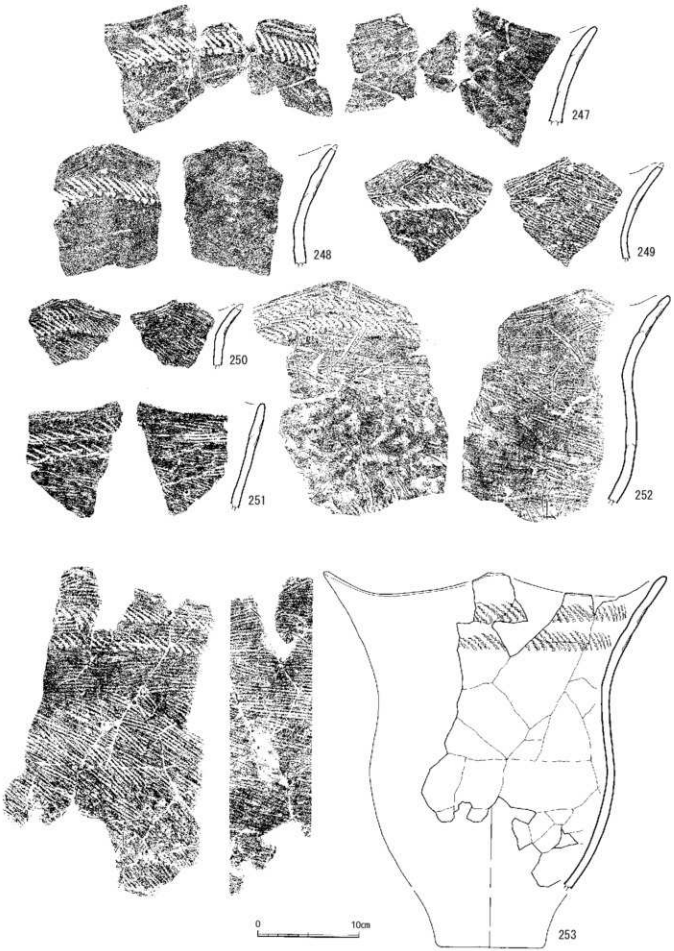
第41図　縄文土器(39)



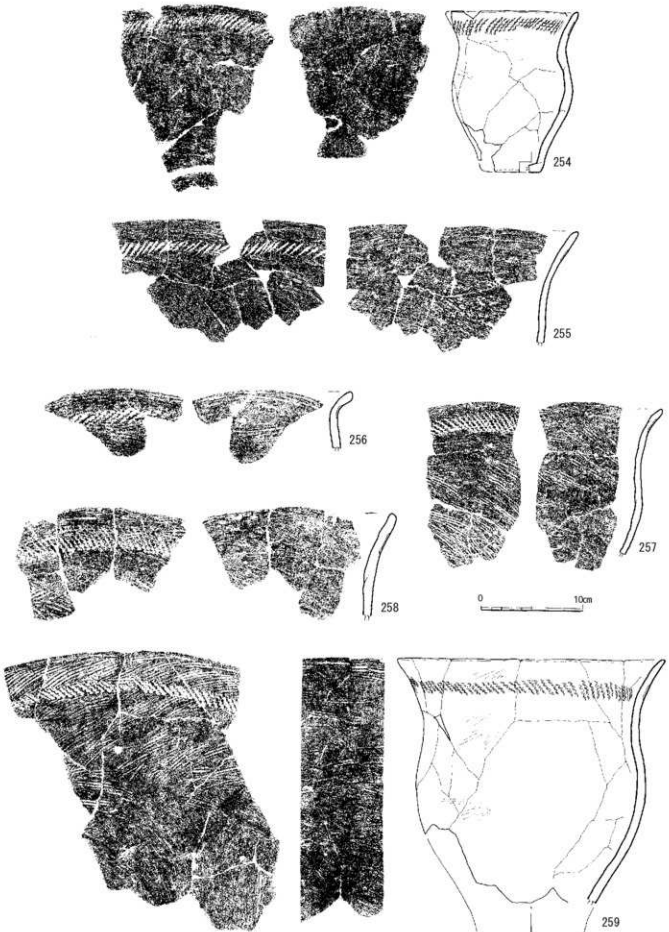
第42図　縄文土器(40)



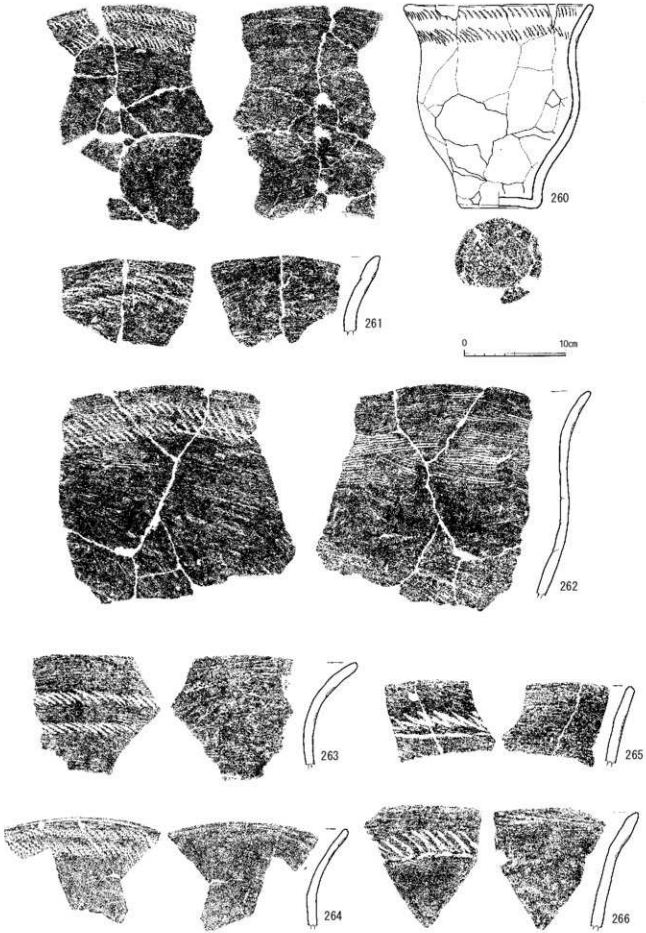
第43図　縄文土器(41)



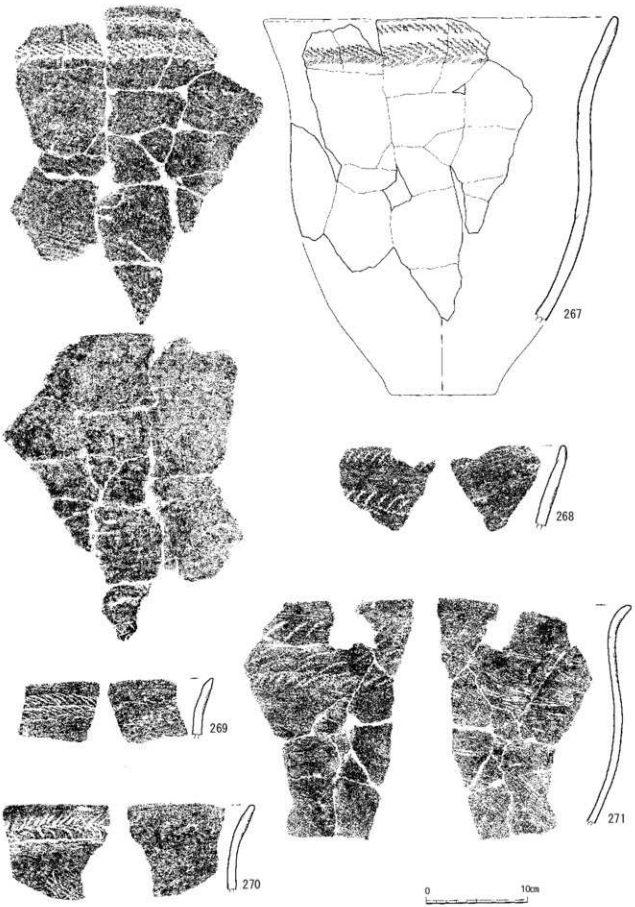
第44図　縄文土器(42)



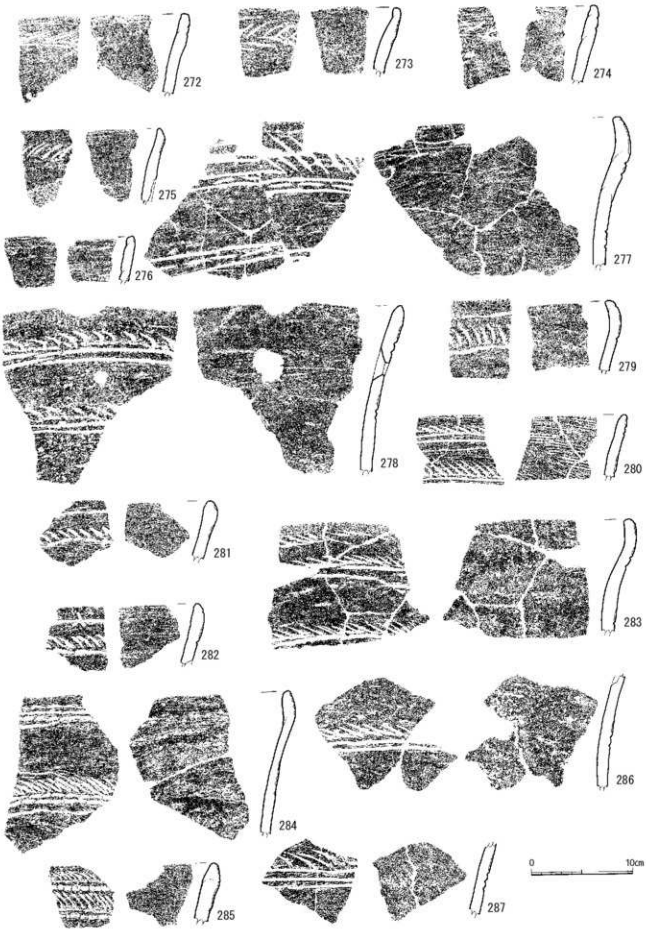
第45図　縄文土器(43)



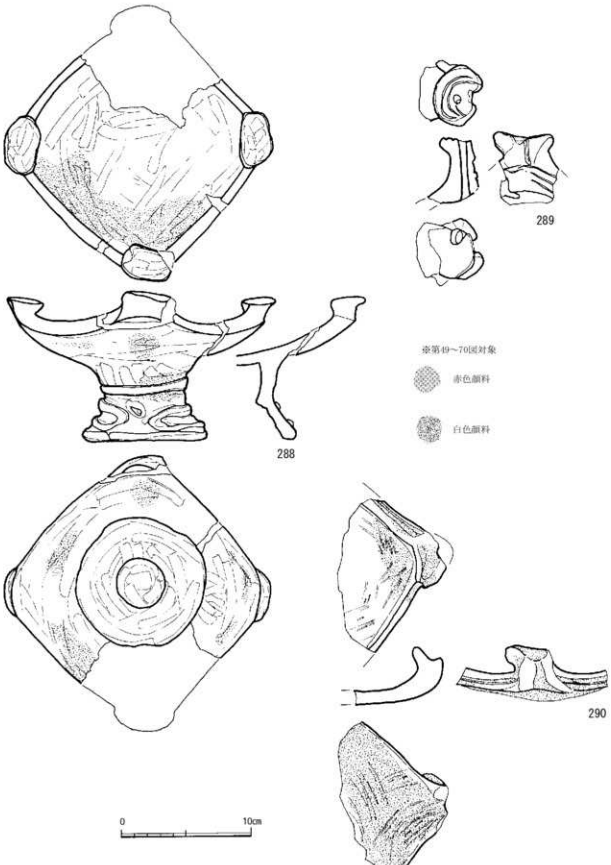
第46図　縄文土器(44)



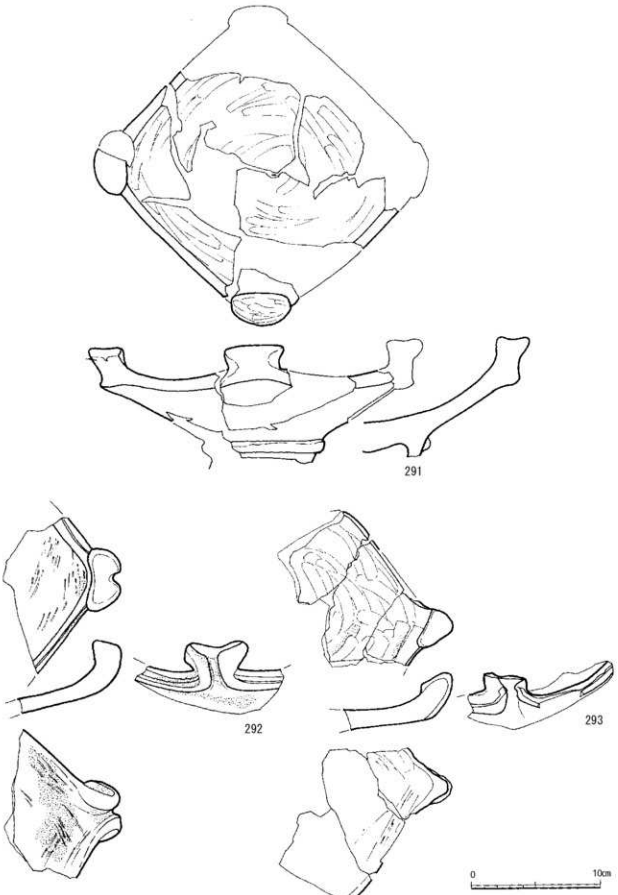
第47図　縄文土器(45)


272
273
274
275
276
277
278
279
280
281
282
283
284
285
286
287
0
10cm

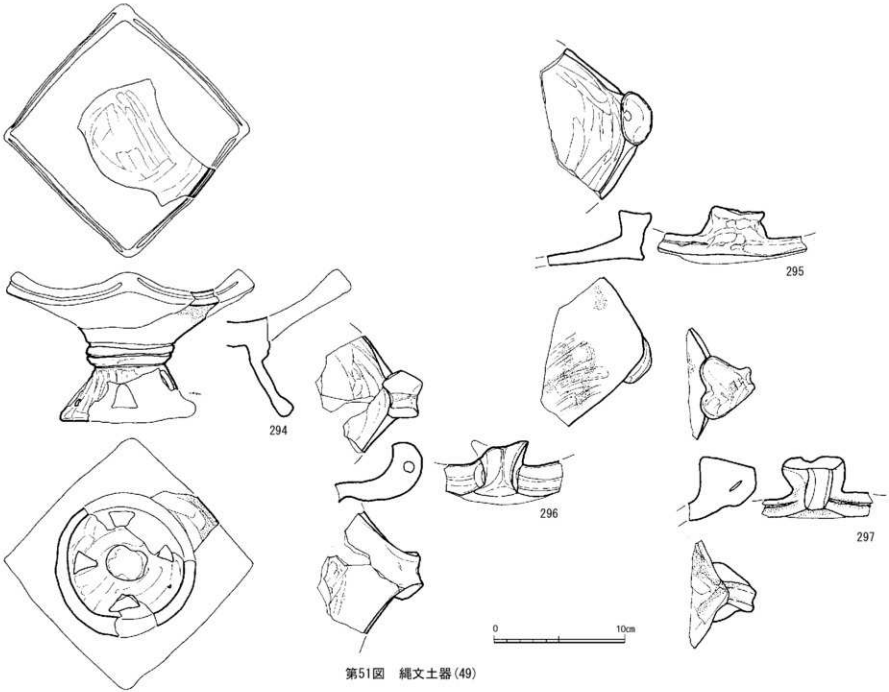
第48図　縄文土器(46)



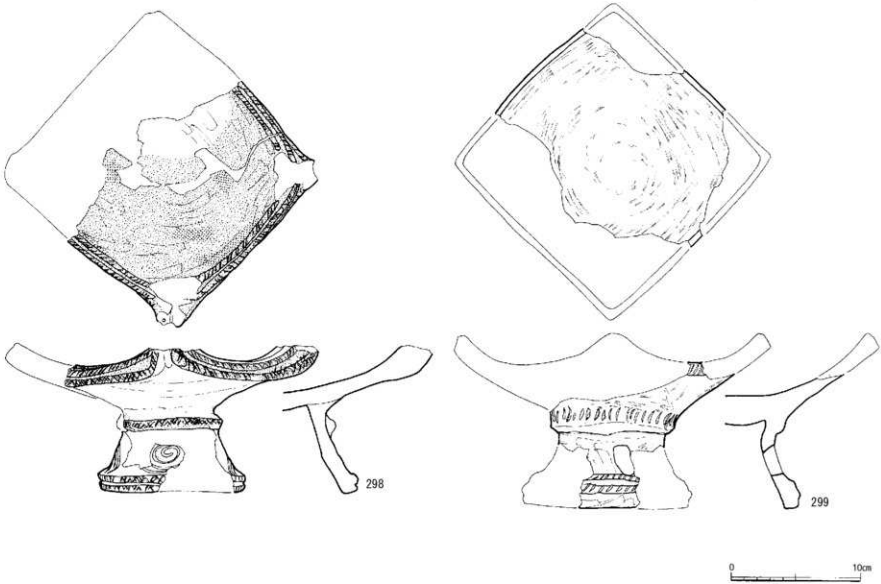
第49図　縄文土器(47)



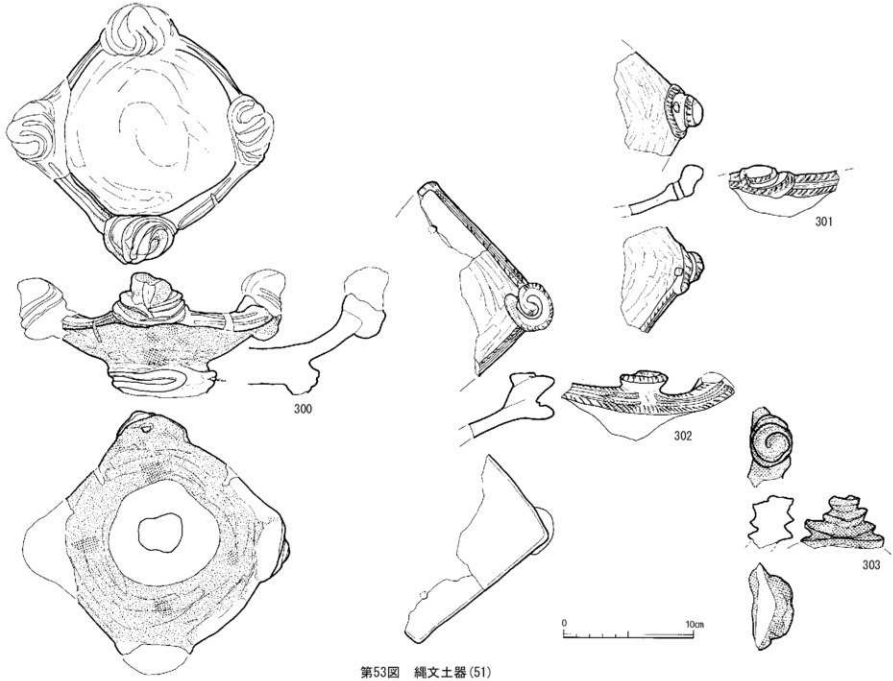
第50図　縄文土器(48)



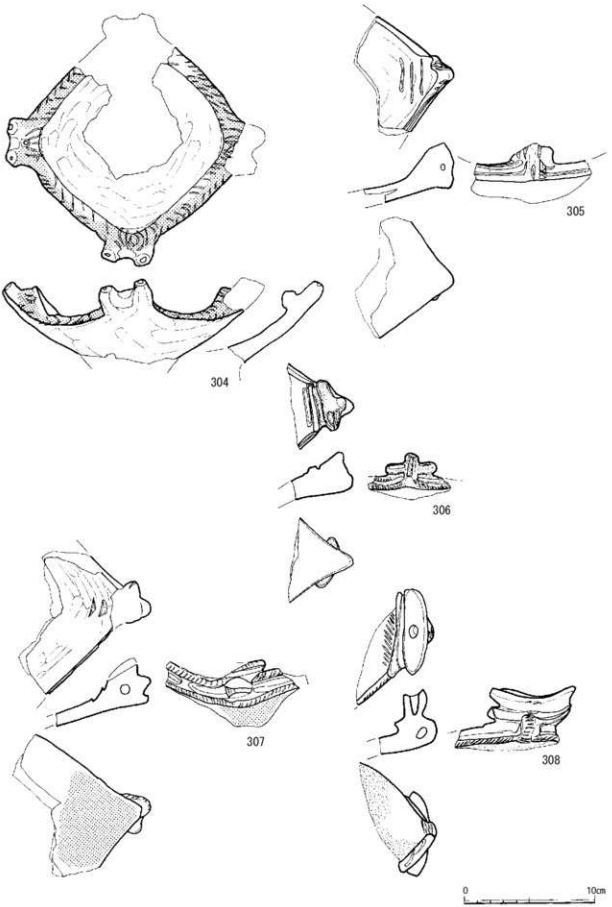
第51図　縄文土器(49)



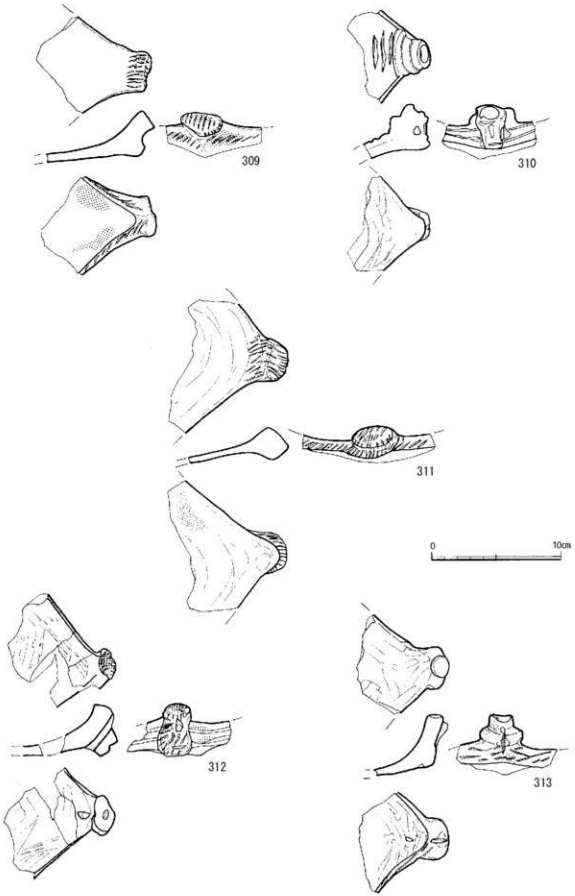
第52図　縄文土器(50)



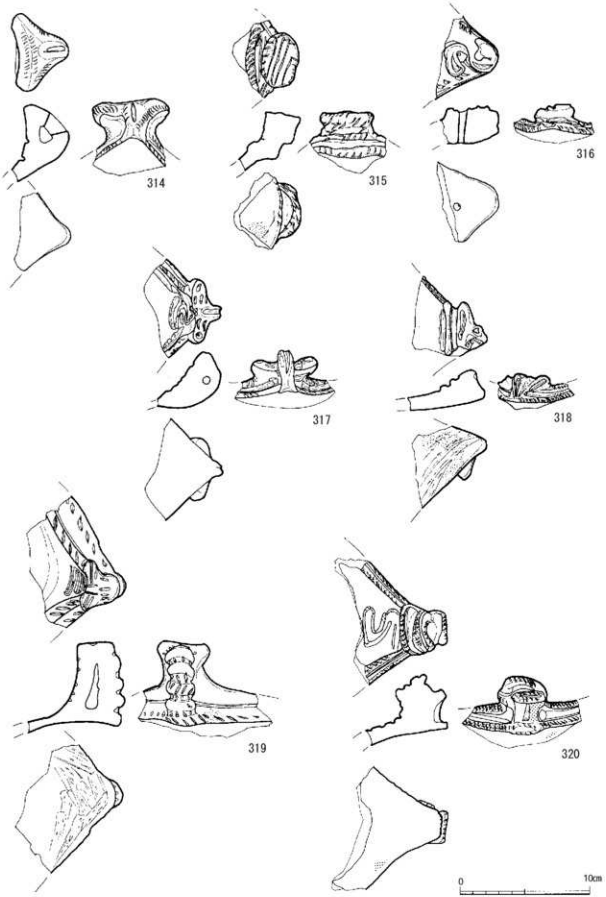
第53図　縄文土器(51)



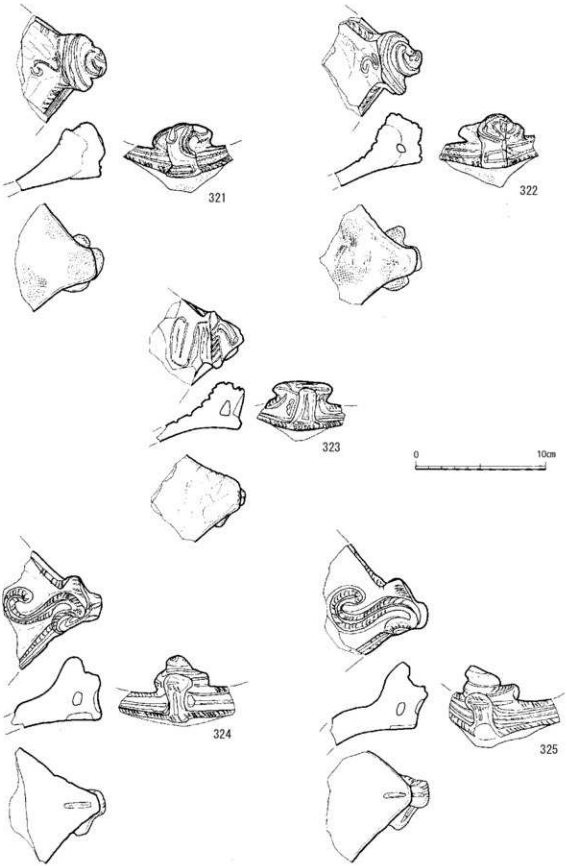
第54図　縄文土器(52)



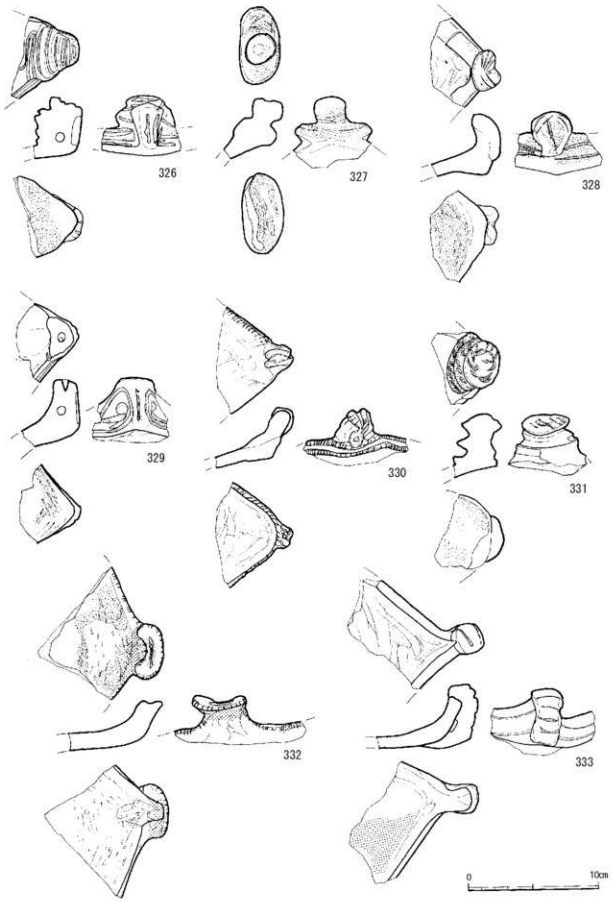
第55図　縄文土器(53)



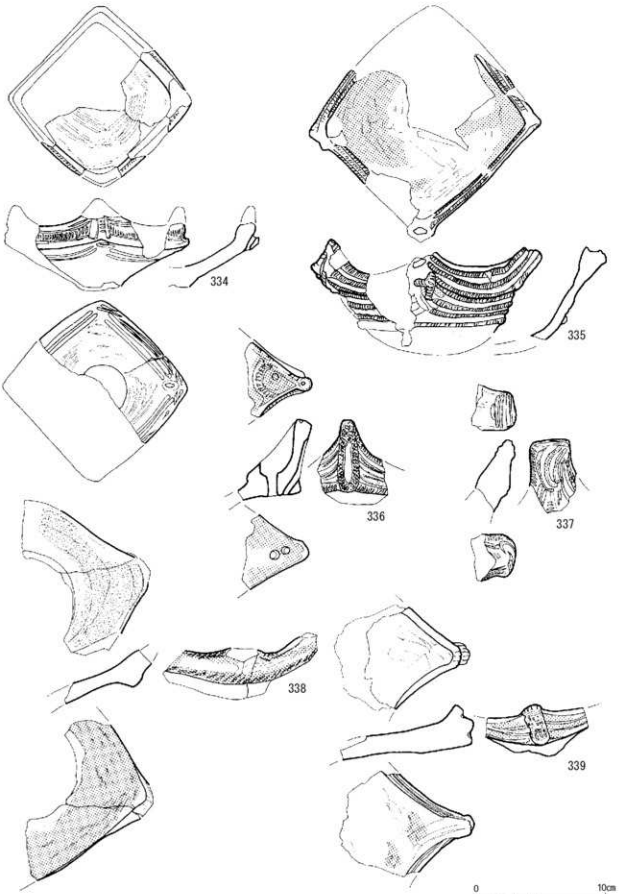
第56図　縄文土器(54)



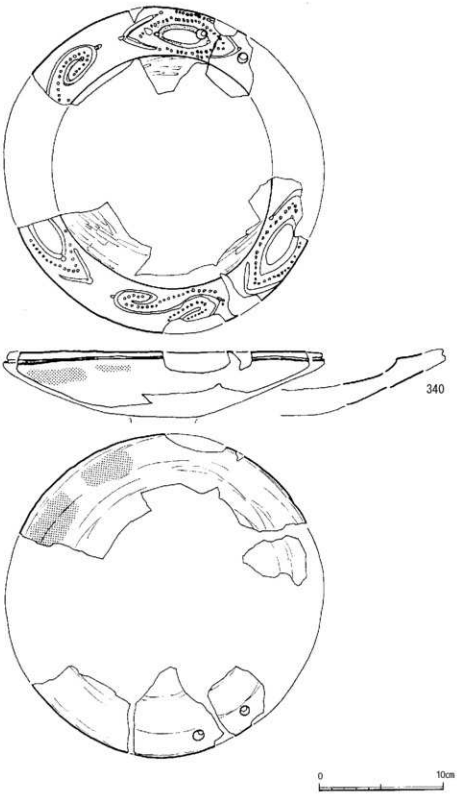
第57図　縄文土器(55)



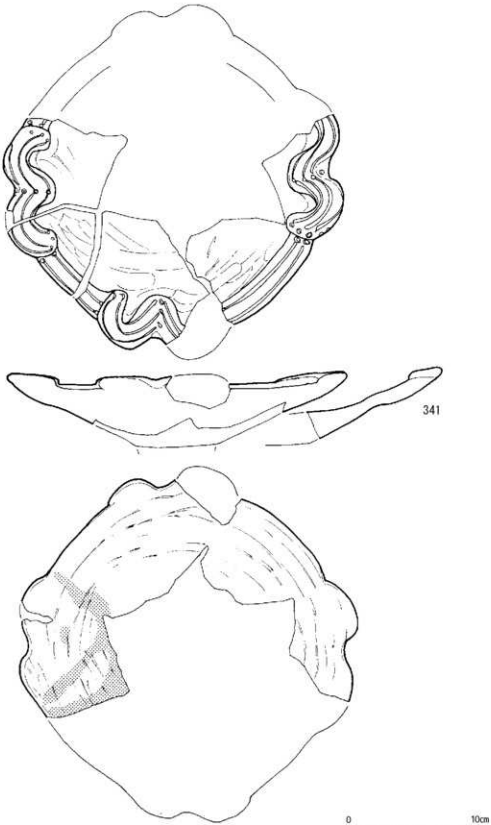
第58図　縄文土器(56)



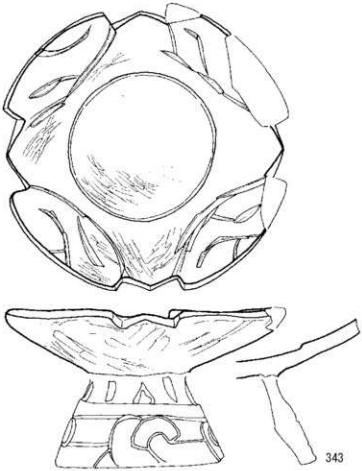
第59図　縄文土器(57)



第60図　縄文土器(58)

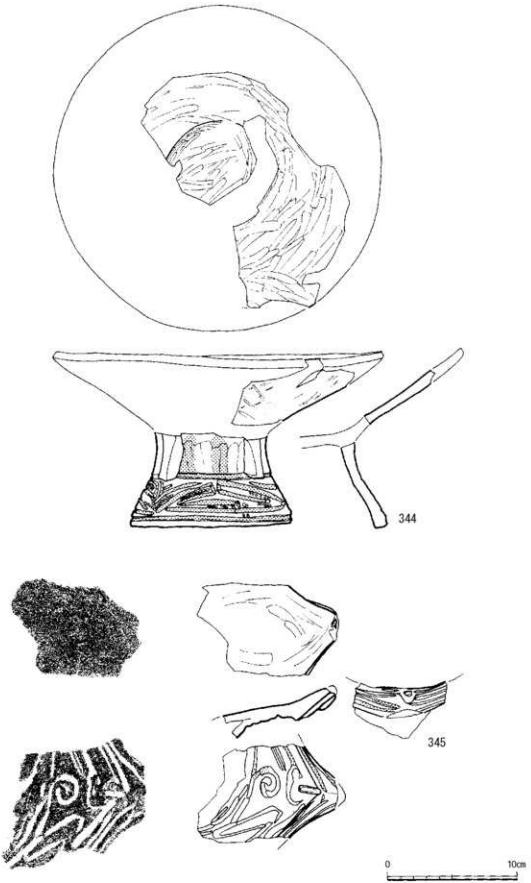


第61図　縄文土器(59)

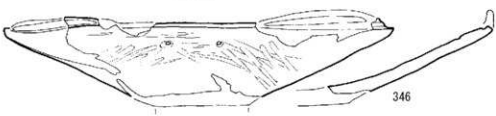


0 10cm

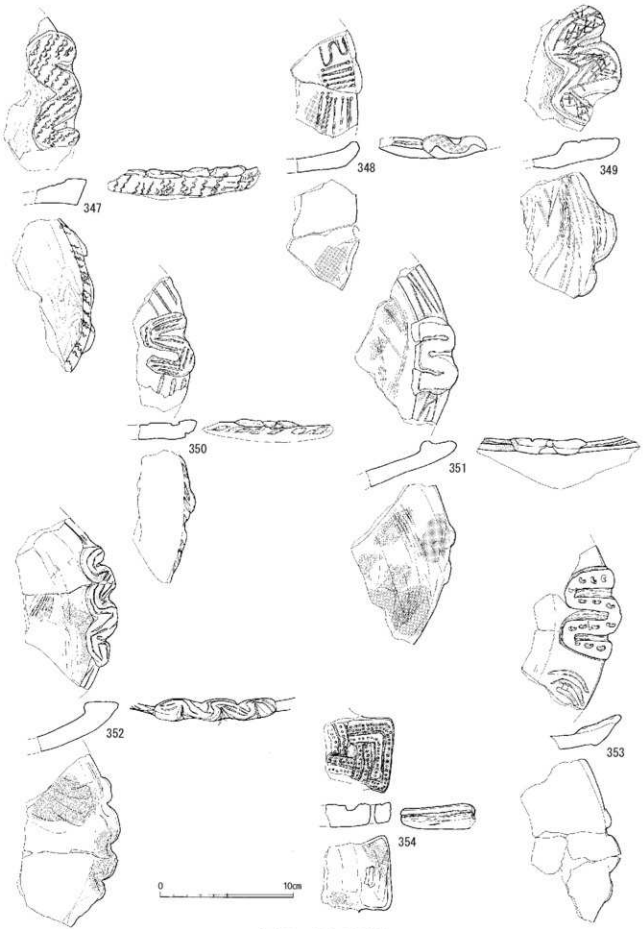
第62図　縄文土器(60)



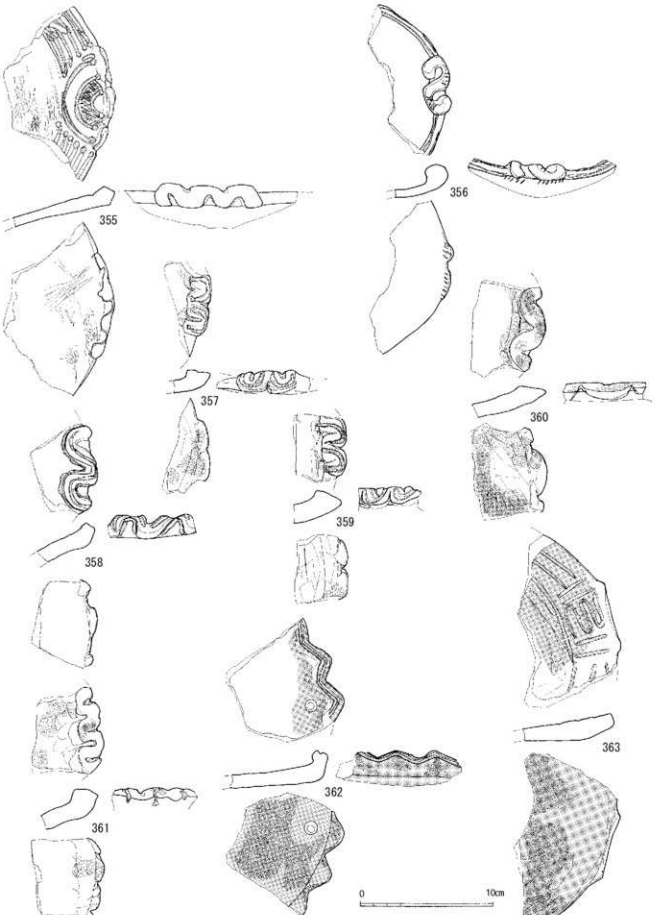
第63図　縄文土器(61)



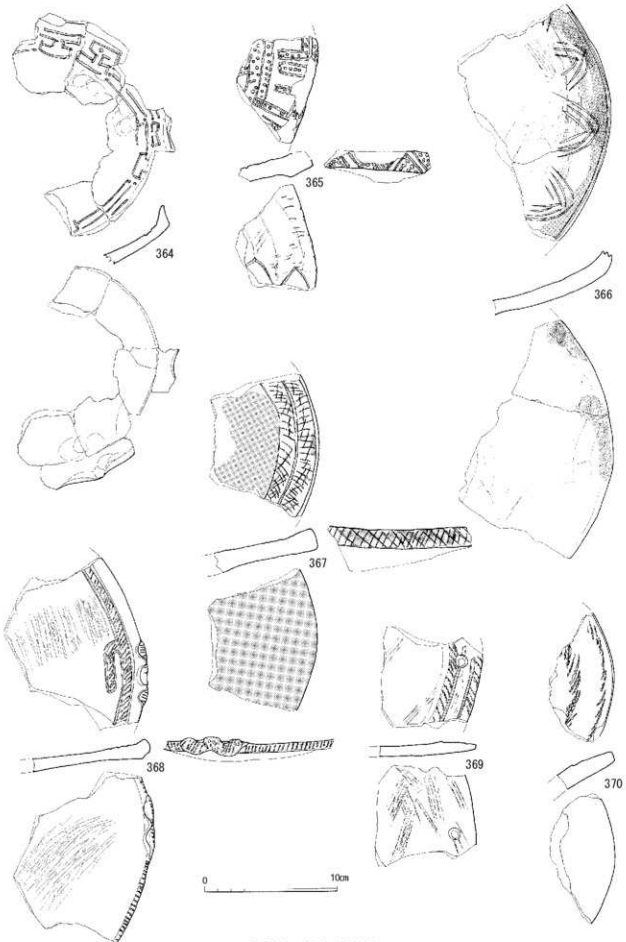
第64図　縄文土器(62)



第65図　縄文土器(63)

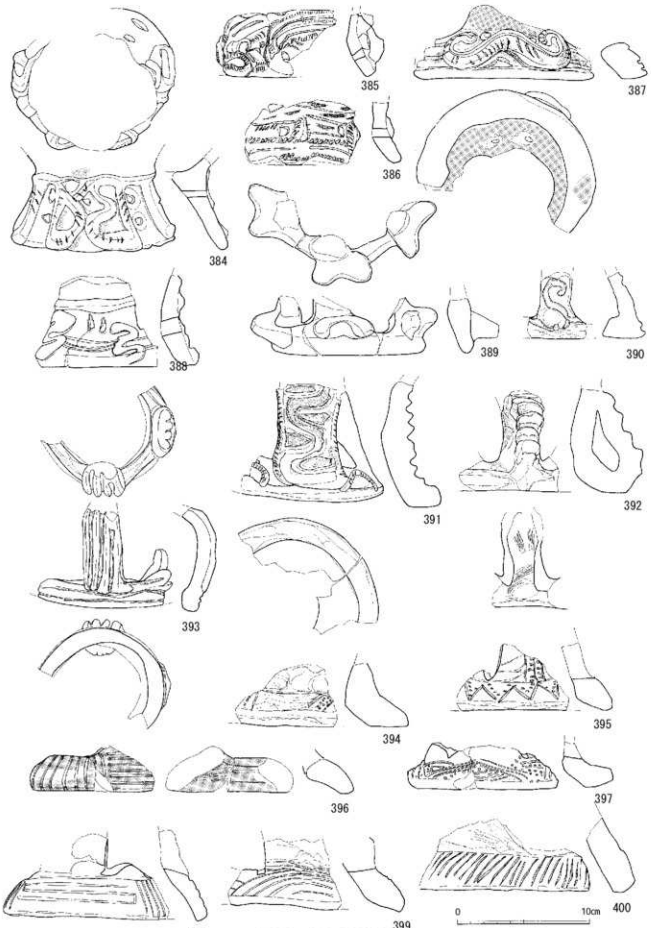


第66図　縄文土器(64)

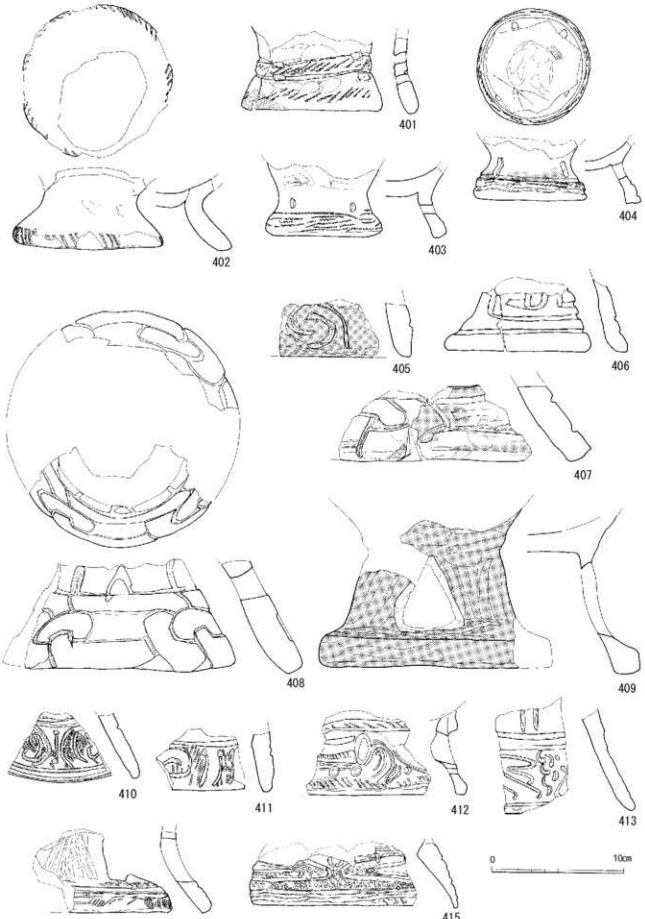


第67図　縄文土器(65)

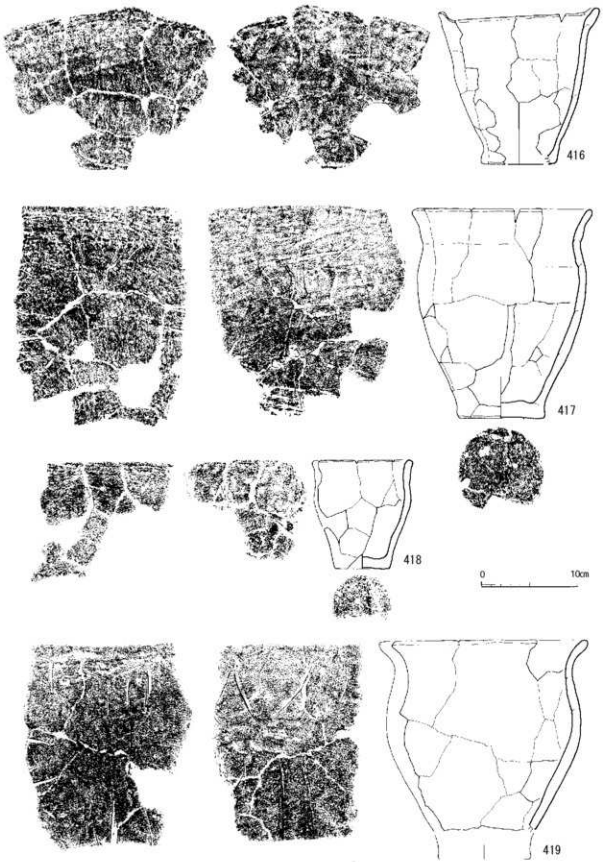
第68図　縄文土器(66)


384
385
386
387
388
389
390
391
392
393
394
395
396
397
398
399
400
0
10cm

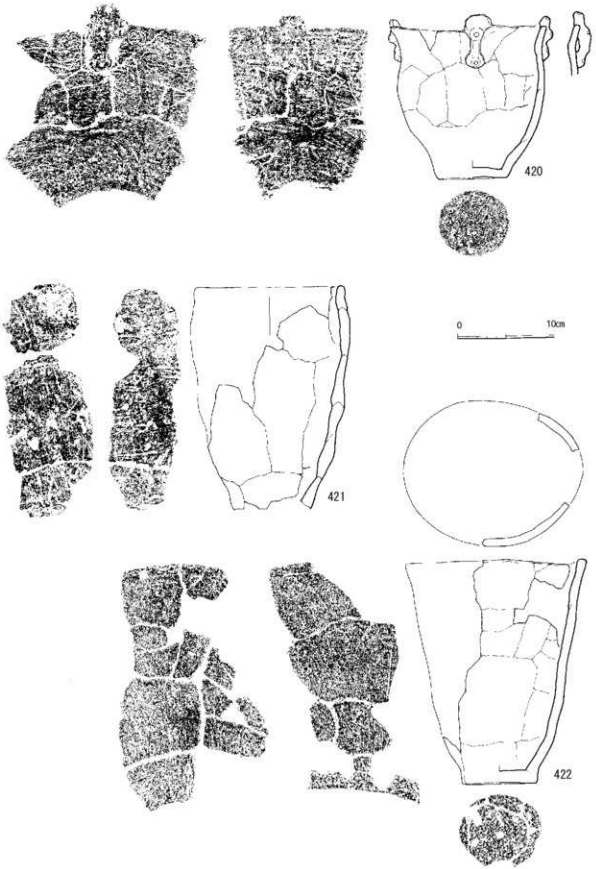
第69図　縄文土器(67)


401
402
403
404
405
406
407
408
409
410
411
412
413
414
415
0
10cm

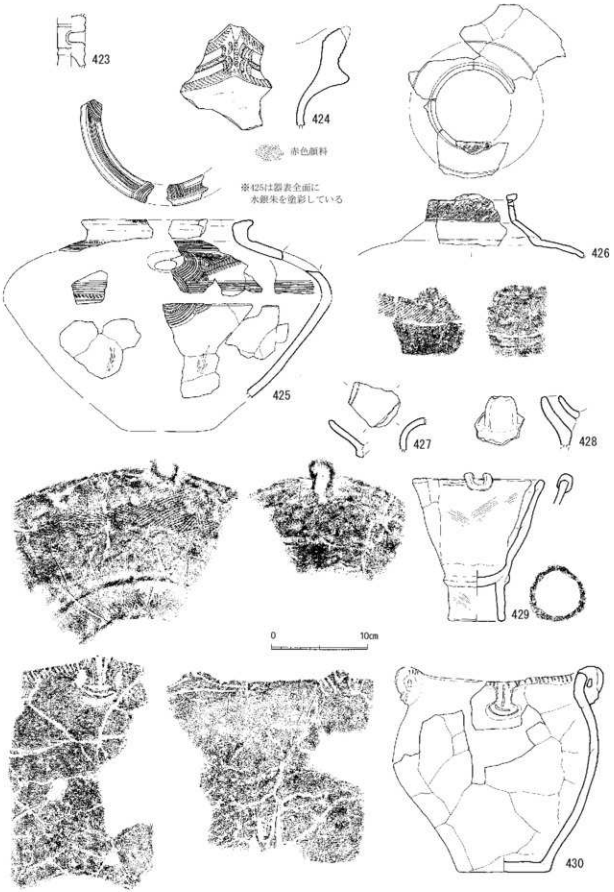
第70図　縄文土器(68)



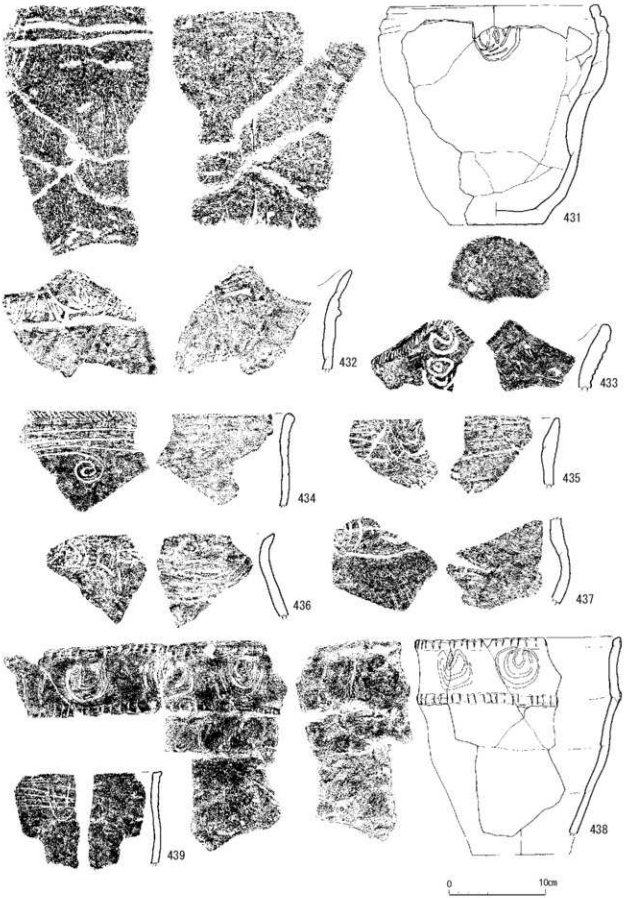
第71図　縄文土器(69)



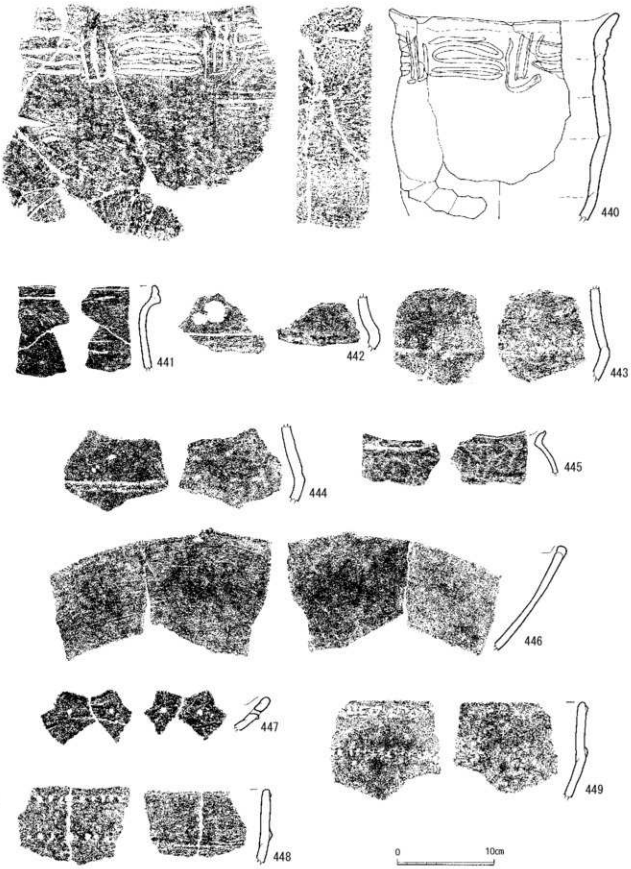
第72図　縄文土器(70)


423
424
赤色顔料
※425は器表全面に
水銀朱を塗彩している
426
425
427
428
429
0
10cm
430

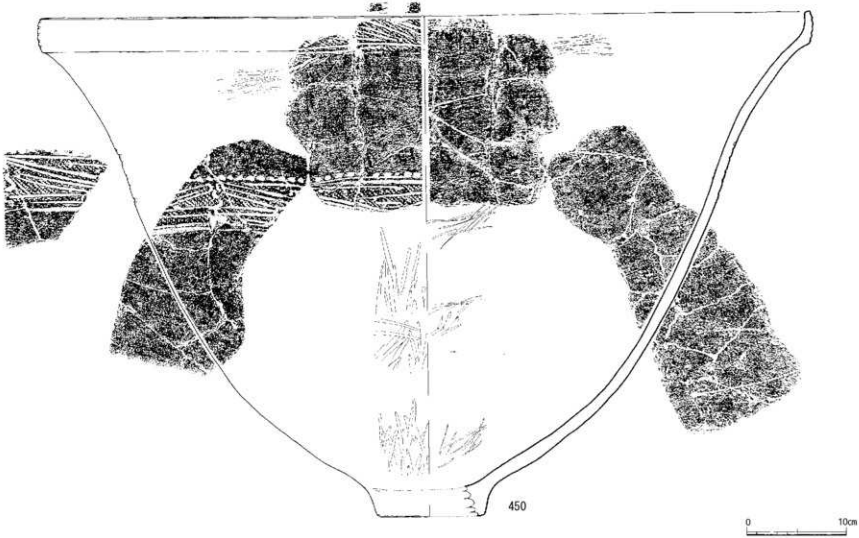
第73図　縄文土器(71)



第74図　縄文土器(72)



第75図　縄文土器(73)



第76図　縄文土器(74)

凡　例

1　色調についての表現は相対的なもので主観である。
2　胎土の状態について示した用語については、大まかに以下の点を目安として使用している。
　　砂粒多～概ね長さ2mm程度の粒子を含む。
　　細粒多～概ね長さ１～２mm程度の粒子を含む。
　　密～概ね１mm以下の粒子で構成され、緻密である。
3　胎土の項目の「火W」と「火B」はそれぞれ以下のような「火山ガラス」のことを指している。
　　「火W」～無色透明あるいは白色透明の火山ガラス
　　「火B」～黒褐色や需色をおびた火山ガラス
4　胎土の項目の「他」でみられる金箔金雲母，白ほ白色の粒子，茶は茶色の粒子のことを指している。
5　図版番号は干迫遺跡の本報告のものである。(鹿埋七　1997　『干迫-IV』)

第１表　出土遺物観察表(1)

検区	番号	種類	器別	型式等	器種	部位	出土区	層	遺物番号	標高(m)	色調 内面	色調 外面	胎土 状態	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃	胎土 火W	胎土 火B	胎土 他	成分	備考	図版
5	1	縄文土器	鉢	条痕	鉢	口縁部	13G	R1			明褐色	暗褐色	細粒多						金箔	良		60
	2	〃	〃	〃	〃	口縁部	12G	V	23891	12.58	明褐色		砂粒多				○		白	〃		
	3	〃	〃	〃	〃	口縁部	25G2	R2	38460		褐色	淡褐色	密			○		○		〃		
	4	〃	〃	〃	〃	口縁部	15G7	R1	27478		〃	明茶褐色	細粒多	○		○				〃		
	5	〃	〃	〃	〃	胴部片	15G12	R1	26914			暗褐色	砂粒多	○					金	2980-2418	60
	6	〃	〃	〃	〃	口～胴	14G6	R1	27634		暗茶褐色	暗褐色	細粒多	○		○	○		白	良	
	7	〃	〃	〃	〃	完形	20F3	R1	43196			黒褐色	砂粒多						金	〃	60
	8	〃	〃	〃	〃	口縁部	15G5	R1	26938			暗褐色	細粒多	○	○					〃	
	9	〃	〃	〃	〃	〃	12G	R1	28194		明茶褐色	暗茶褐色	砂粒多	○					金箔	〃	
	10	〃	〃	〃	〃	〃	19E	〃			暗茶褐色	黒褐色	細粒多	○	○				白	〃	
	11	〃	〃	〃	〃	口～胴	13H	R1	26802		黒褐色	明茶褐色	砂粒多		○	○			白	〃	
	12	〃	〃	〃	〃	口縁部	23G2	R2	38456			暗茶褐色	砂粒多						金	〃	Fe
	13	〃	〃	〃	〃	口縁部	22K	R2				明褐色	〃						金箔	〃	
	14	〃	〃	〃	〃	口～胴	14G4	R1	27114		暗褐色	暗褐色	細粒多				○	○	白	〃	27631
	15	〃	〃	〃	〃	口縁部	15G5	R1	28163		暗茶褐色	暗褐色	〃						白黒	〃	
	16	〃	〃	〃	〃	〃	22G	R2	38702			暗茶褐色	密	○	○					〃	Mn
	17	〃	〃	〃	〃	〃	22G	R2	38649		黒褐色	暗茶褐色	細粒多							〃	Mn多
	18	〃	〃	〃	〃	〃	22M	R2			明茶褐色		密	○	○					〃	
	19	〃	〃	〃	〃	〃	16G2	R1	26736		暗茶褐色		〃	○					金白	〃	
	20	〃	〃	〃	〃	〃	13H	R1			茶褐色	明茶褐色	細粒多						金白	〃	
	21	〃	〃	〃	〃	口～胴	13G4	R1	27907		淡茶褐色	暗茶褐色	〃						金白	〃	
	22	〃	〃	〃	〃	口縁部	20F9	R1	40766		明茶褐色	〃	密	○	○		○	○		〃	
	23	〃	〃	〃	〃	〃	13H	R1			黒茶褐色	〃	砂粒多	○			○			〃	
	24	〃	〃	〃	〃	〃	14G5	R1	26669		明茶褐色	〃	〃	○					金白	〃	補修孔
	25	〃	〃	〃	〃	〃	15F9	R1	24967		〃	明茶褐色	〃						金白	〃	
6	26	〃	〃	〃	〃	〃	15G	V	21859	12.64	明茶褐色	暗茶褐色	細粒多		○		○			〃	
	27	〃	〃	〃	〃	〃	16G	R1			黒茶褐色	〃	砂粒多	○	○					〃	
	28	〃	〃	〃	〃	〃	23M	撹乱			淡褐色	〃	〃	○	○		○			〃	
	29	〃	〃	〃	〃	〃	19-8M	〃	40770		暗褐色	明茶褐色	〃	○			○	○		〃	40783
	30	〃	〃	〃	〃	口～胴	15G	R1			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒多						金	〃	
	31	〃	〃	〃	〃	〃	15G7	R1	27416		淡茶褐色	暗褐色	〃	○					白	〃	
	32	〃	〃	〃	〃	〃	17E	VI	41227	13.61	淡褐色	淡褐色	〃	○			○	○	金	〃	
	33	〃	〃	〃	〃	〃	22N	R2			淡褐色	明茶褐色	密	○						〃	Mn多
7	34	〃	〃	〃	〃	〃	13H3	R1	26869		黒茶褐色	黒褐色	砂粒多						金白	〃	
	35	〃	〃	〃	〃	口縁部	13H	R1			淡茶褐色	淡褐色	〃	○		○			金白	〃	
	36	〃	〃	〃	〃	〃	13H7	R1	27329		黒茶褐色		〃						金	〃	
	37	〃	〃	〃	〃	〃	12H3	R1	28674		淡茶褐色		密				○	○		〃	
	38	〃	〃	〃	〃	〃	20I	〃	43697	13.43	明茶褐色	暗茶褐色	砂粒多						金白	〃	肥手
	39	〃	〃	〃	〃	〃	22N	撹乱	38621		暗茶褐色		〃						金白	〃	
	40	〃	〃	〃	〃	〃	13H	R1			明褐色	明茶褐色	〃						金白	〃	
	41	〃	〃	〃	〃	〃	15G	R1				明茶褐色	細粒多	○		○	○		金	〃	
	42	〃	〃	〃	〃	〃	13H	R1			暗褐色	明茶褐色	砂粒多	○		○	○		金白	〃	
	43	〃	〃	〃	〃	〃	13H3	R1	26802			淡褐色	細粒多			○	○		金	〃	
	44	〃	〃	〃	〃	〃	—	—				黒茶褐色	砂粒多	○	○				金	〃	
8	45	〃	〃	〃	〃	〃	15G	R1			明茶褐色	暗茶褐色	〃						金白	〃	
	46	〃	〃	〃	〃	〃	20F	VI			淡褐色		密		○	○			金	〃	肥手
	47	〃	〃	〃	〃	〃	13G	〃	41763	13.76	黒褐色	暗茶褐色	砂粒多				○	○	金黒白	〃	
	48	〃	〃	〃	〃	〃	20F	〃				暗褐色	細粒多	○						〃	
	49	〃	〃	〃	〃	口～胴	15G9	R1	28223			淡茶褐色	密	○		○	○			〃	肥手
	50	〃	〃	〃	〃	〃	20I	R1			暗褐色	暗茶褐色	〃			○			金	〃	
9	51	〃	石製品	剥片	〃	完形	20F6	R1	38945			暗茶褐色							茶	〃	10825
	52	〃	〃	〃	〃	胴完形	20H	R1	40924			明茶褐色	細粒多	○						〃	61
	53	〃	〃	〃	〃	〃	15G4	R1	26946		明茶褐色	明茶褐色	砂粒多	○						〃	
	54	〃	〃	〃	〃	完形	20H	撹乱	40881		淡茶褐色	暗褐色	細粒多						白	〃	
10	55	〃	〃	〃	〃	〃	15G6	R1	28189		暗茶褐色	明茶褐色	密	○						〃	
	56	〃	〃	〃	〃	胴完形	12H	R1			暗褐色	〃	〃			○	○			〃	
	57	〃	〃	〃	〃	〃	12H2	R1	28678			暗褐色	砂粒多	○			○			〃	
11	58	〃	〃	〃	〃	〃	13H	R1			暗茶褐色	明茶褐色	密							〃	61
	59	〃	〃	〃	〃	完形	18E	VI	33216	12.46			〃		○	○				〃	62
	60	〃	〃	〃	〃	口～胴	12H	R1				暗茶褐色	密				○		白	〃	
	61	〃	〃	〃	〃	完形	19H	〃			暗茶褐色	暗茶褐色	細粒多	○			○			〃	62
	62	〃	〃	〃	〃	口～胴	13G9	R1	28103		明茶褐色	暗褐色	砂粒多	○	○	○				〃	
	63	〃	〃	〃	〃	〃	13H7	R1	26484		暗褐色	暗茶褐色	細粒多	○	○				金	〃	
12	64	〃	〃	〃	〃	完形	18D	VI	33648	13.54		明茶褐色	〃	○					白	〃	
	65	〃	〃	〃	〃	口～胴	12H	R1				淡茶褐色	砂粒多	○			○		黒多	〃	
	66	〃	〃	〃	〃	完形	13H	R1			黒褐色	暗茶褐色	〃	○			○			〃	
13	67	〃	〃	〃	鉢型	口～胴	A-01H		16500			明茶褐色	細粒多						金多	〃	
	68	〃	〃	〃	〃	胴完形	15G3	R1	28353		黒褐色	明褐茶褐	細粒多				○			〃	
	69	〃	〃	〃	〃	完形			28609			暗茶褐色	密	○	○	○	○	○		〃	
	70	〃	〃	〃	〃	口～胴	16G3	R1	26133		明茶褐色	暗褐色	細粒多	○		○	○	○		〃	
	71	〃	〃	〃	〃	〃	13H	R1			黒褐色	明茶褐色	〃	○						〃	
	72	〃	〃	〃	〃	口縁部	13H	R1			明茶褐色	暗褐色	砂粒多	○	○				金白	〃	
14	73	〃	〃	〃	〃	〃	21F3	R1	29050		淡茶褐色	〃	〃	○	○	○	○			〃	
	74	〃	〃	〃	〃	〃	20C	〃	41334	13.48	暗褐色	明褐色	〃	○					白金	〃	
	75	〃	〃	〃	〃	〃	20F	R1	40793		淡褐色	明茶褐色	〃	○						〃	

第２表 出土遺物観察表(2)

掲載	番号	種類	類別	型式等	器種	部位	出土区	層	遺物番号	標高(m)	色調 内面	色調 外面	胎土 状態	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃	胎土 火山	胎土 火石	胎土 他	焼成	備考	図版
14	76	縄文土器	深鉢	勝坂	口縁部		20F42R1		38861		褐灰色		＠	○	○	○	○		多	良	胎土	
	77	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口～胴	13H19R1		27279		橙褐色	明褐色	細砂多	○			◎	○	白金	ＩＤ		37943
	78	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	19K	Ⅶ	41573	13.33	ＩＤ	明茶褐色	細砂多	○					ＩＤ	ＩＤ		
	79	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	胴完形	23G22R2		38481		暗茶褐色		密						金多	ＩＤ		63
15	80	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口～胴	14C30R1		26273		暗茶褐色		ＩＤ						金多	ＩＤ		
	81	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口縁部	13H	Ⅵ			明茶褐色	暗褐色	細砂多						金白	ＩＤ		
	82	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口～胴	13I	R1			明茶褐色		砂粒多						金白	ＩＤ	型手	
	83	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口縁部	22C20R2		38449		明茶褐色	明黒褐色	密	○			○		白	ＩＤ		
	84	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口～胴	19E	Ⅶ	41663	13.30	暗茶褐色	明黒褐色	細砂多	○		○				ＩＤ		
	85	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口縁部	22M20R2		38280		明茶褐色	暗茶褐色	密	○		○	○			ＩＤ	Ｆｅ	
	86	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	15G	R1			明茶褐色	暗茶褐色	細砂多	◎	○					ＩＤ		
	87	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	22K	R2			黒褐色		ＩＤ	○		○			金	ＩＤ		
16	88	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	13G34R1		28223		暗茶褐色		密	○	○	○				ＩＤ		
	89	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	15G20R1		27241		明茶褐色		砂粒多						金白	ＩＤ		
	90	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	20E	表			明褐色		細砂多						金	ＩＤ	Ｆｅ，ＰＶＣ	
	91	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口～胴	22F64R1		40498		暗褐色		密				◎			ＩＤ		
	92	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	23K	R2			明茶褐色	暗茶褐色	ＩＤ	○	○	○	○	○		ＩＤ		
	93	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口縁部	13G	Ⅵ	36885	13.83	ＩＤ	暗褐色	砂粒多						白金	ＩＤ	Ｆｅ	
17	94	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	胴完形	22N55R2		39671		ＩＤ	暗茶褐色	細砂多							ＩＤ		63
	95	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	完形	22D19R2		38442		黒褐色	明黒褐色	密	○						ＩＤ	Ｆｅ多	70
	96	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口～胴	12H	R1			明茶褐色		砂粒多	○	○	○	○		白多	ＩＤ		
	97	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口縁部	18G	Ⅵ	33096	13.43	明茶褐色		密	○	○					ＩＤ		
	98	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	19E	Ⅵ	41296	13.64	黒茶褐色	暗褐色	砂粒多	○	○				金	ＩＤ		
	99	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口～胴	15G	R1			暗茶褐色		密	○		○	◎	○		ＩＤ		63
	100	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口縁部	13G	R1			明黒褐色	黒褐色	砂粒多	○			◎	○		ＩＤ		
	101	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	19F	Ⅵ					密	○	○	○				ＩＤ		
18	102	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口～胴	15G35R1				暗茶褐色		ＩＤ						金多	ＩＤ		
	103	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口縁部	19G	R1	41597		暗茶褐色		ＩＤ	○			◎	◎		ＩＤ		
	104	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口～胴	13H	R1			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒多			○	○	○	多白	ＩＤ		
	105	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	13H	R1			暗褐色		ＩＤ		○				黒褐石	ＩＤ		
	106	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口縁部	13H43R1		28246		明茶褐色		ＩＤ	○	○					ＩＤ		
	107	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	20F53R1		41027		ＩＤ		砂粒多						白金	ＩＤ		
	108	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	16G72R1		28181				密						金白	ＩＤ		
	109	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	13H	R1			暗茶色		ＩＤ						金白	ＩＤ		
	110	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	20G27R1		13166		明茶褐色	暗褐色	ＩＤ						金白	ＩＤ		
19	111	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口～胴	13H	Ⅵ	27897	12.6	暗褐色	明褐色	密	○					金白	ＩＤ	27899	63
	112	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口縁部	13H	R1			明茶褐色	暗茶褐色	砂粒多	○		○	○		白金	ＩＤ	型手	
	113	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	13H37R1		27183		暗茶褐色	明茶褐色	密	○	○		○			ＩＤ		
	114	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口～胴	19F	Ⅵ	41587	13.52	明茶褐色	暗褐色	細砂多						白金	ＩＤ		
	115	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	暗茶褐色					R1	ＩＤ	○					白	ＩＤ		
20	116	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	15G34R1		26957		暗褐色	明黒褐色	細砂多			○			白	ＩＤ		
	117	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口～胴	13G	R1			明茶色		ＩＤ						白金	ＩＤ		
	118	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口縁部	13G	R1			ＩＤ		密	○	○	○	○	○		ＩＤ		
	119	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	完形	19E	Ⅵ	41398	13.7	暗茶褐色		密	○	○					ＩＤ	38579	70
	120	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	胴部	13H50R1		28894		暗茶褐色	黒褐色	砂粒多							ＩＤ		
	121	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	13H	R1			明茶褐色	暗褐色	ＩＤ						金白	ＩＤ		
21	122	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	23G21R2		38493		暗茶褐色	暗茶褐色	ＩＤ		○		○			ＩＤ		
	123	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	22K	R2			明茶色		ＩＤ		○				金白	ＩＤ		
	124	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	13G	R1			明茶褐色	暗褐色	ＩＤ		○		○			ＩＤ		
	125	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	13H	R1			ＩＤ		ＩＤ		○				白金	ＩＤ		
	126	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口～胴	13H	R1			暗茶褐色	黒	密	○		◎				ＩＤ		
	127	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口縁部	22C	R2			黒褐色	明茶褐色	ＩＤ			○				ＩＤ		
	128	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	13H53R1		27190		暗茶褐色		ＩＤ	○						ＩＤ		63
	129	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	13G75R1		26181		暗茶褐色	暗茶褐色	細砂多	○		○	○			ＩＤ		
	130	ＩＤ	ＩＤ	五尾	ＩＤ	ＩＤ	13G9R1		30201		暗茶褐色		砂粒多						金多	ＩＤ		
	131	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口～胴	20F38R1		40917		明茶褐色	暗茶褐色	ＩＤ	○	○		○	○		ＩＤ		
	132	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口縁部	16G	R1			暗茶褐色		ＩＤ						金白	ＩＤ		
22	133	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	22N46R2		38230		暗茶褐色		ＩＤ	○	○				金白	ＩＤ		
	134	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	22D21		37975		暗褐色		ＩＤ						白金	ＩＤ		
	135	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	20F29R1		41176		明茶褐色	暗褐色	ＩＤ	○		○	○	○		ＩＤ		
	136	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	13G52R1		27460		暗茶褐色		砂粒多	○	○					ＩＤ		
	137	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	13G17R1		27419		暗茶褐色	黒褐色	ＩＤ	○						ＩＤ	補修孔	
	138	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	13I	R1			明茶褐色	暗褐色	ＩＤ	○					白金	ＩＤ		
	139	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	14C90R1		27657		暗茶褐色	明褐色	密	○			○	○		ＩＤ		
	140	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口～胴	20F56R1		39830		明茶褐色	暗褐色	砂粒多						金白	ＩＤ		
	141	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	22N48R2		38662		明茶褐色	暗茶褐色	ＩＤ	○	○				金白	ＩＤ		
	142	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口縁部			27696		暗茶褐色		密	○	○	○	○	○		ＩＤ		
23	143	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	20F42R1		40887		明茶褐色	暗茶褐色	砂粒多	○					金白	ＩＤ		
	144	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	20F54R1		37212		ＩＤ	茶褐色	ＩＤ			○	○	○		ＩＤ		
	145	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	20F29R1		41179		ＩＤ	暗褐色	細砂多	○		○			白金	ＩＤ		
	146	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	21D	Ⅴ	37577	13.56	明茶褐色		砂粒多	○	○	○	○			ＩＤ		
	147	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	12H69R1		26548		暗褐色		細砂多	○		○	○	○		ＩＤ		
	148	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口～胴	22K	Ⅴ	34746	11.88	明茶褐色	暗褐色	砂粒多	○					白金	ＩＤ		
	149	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口縁部	13H	R1			明茶褐色		砂粒多	○			○	○		ＩＤ		
	150	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	19E	Ⅴ	34959	12.895	明茶褐色		細砂多	○		○	○	○		ＩＤ		
24	151	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	20F30R1		40863		暗褐色	黒褐色	ＩＤ	○	○		○			ＩＤ		
	152	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	20F72R1		28873		暗		密	○						ＩＤ		
	153	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	18D	Ⅵ	33617	13.37	明茶褐色	暗褐色	細砂多	○	○	○			金白	ＩＤ		
	154	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	13H	R1			暗褐色	暗茶褐色	密	○		○	○	○		ＩＤ		
	155	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	20F69R1		39186		暗茶褐色		砂粒多						白金	ＩＤ		
	156	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	16G15R1		26873		明茶褐色		ＩＤ		○				白金	ＩＤ		
	157	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口～胴	21F11R2		37295				ＩＤ	○						ＩＤ		
25	158	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口縁部	20F78R1		38894		明茶褐色		密	○						ＩＤ		
	159	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	15G	R1			ＩＤ		細砂多	○	○	○	○			ＩＤ		
	160	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	20F67R1		38861				ＩＤ	○					金白	ＩＤ	39178	64
	161	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口～胴	20F39R1		40869		明茶褐色		細砂多	○			○	○	白	良		
26	162	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	12H60R1		26854		明茶褐色	暗茶褐色	砂粒多	○		○			白	ＩＤ		
	163	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口縁部	20F	Ⅵ			ＩＤ		細砂多	○		○	○			ＩＤ		
	164	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	20F39R1		38820		明茶褐色		密	○	○	○				ＩＤ		
	165	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	20F75R1		39160		ＩＤ		砂粒多						金白	ＩＤ		
	166	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	口～胴	20F67R1		40923		ＩＤ		細砂多	◎	○					ＩＤ		
28	167	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	20F77R1		38868				砂粒多	○					金白	ＩＤ		
	168	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	21E30R1		39611		明茶褐色	暗茶褐色	ＩＤ	○	○	○	○	○		ＩＤ	Ｍｎ	
	169	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	ＩＤ	20F57R1		38826		明茶褐色		密	○	○	○	○			ＩＤ		

第3表 出土遺物観察表(3)

時期	番号	種類	器形	型式等	器種	部位	出土区	層	遺物番号	標高(m)	色調 内面	色調 外面	胎土 状態	胎土 石英	長石	角閃	赤Wi	火Bi	他	成或	備考	図版
29	170	縄文土器	鉢S	丸底	深鉢	口縁部					明茶褐色		細粒多	○			◎	◎		良		
	171	〃	〃	〃	〃	口～胴	12I17G1		28766		明茶褐色	暗茶褐色	〃						円金	〃		
	172	〃	〃	〃	〃	口縁部	20F57R1		38826		明茶褐色		密	○		○	○			〃		
	173	〃	〃	〃	〃	〃	16G14R1		28272		〃	〃	〃	○	○					〃		
30	174	〃	〃	〃	〃	口～胴	15G V		26823	12.94	〃	〃	細粒多	○			○			〃		
	175	〃	〃	〃	〃	口縁部	21F13R1		35642		淡褐色	暗茶褐色	細粒多	○			○	○		〃		
	176	〃	〃	〃	〃	〃	20F78R1		38801		明茶褐色	明茶褐色	〃	○	○	○	○			〃		
	177	〃	〃	〃	〃	口～胴	21F13R1		36651		暗褐色		密粒多						白金	〃		66
	178	〃	〃	〃	〃	〃	12H8R1		26541		明茶褐色		細粒多	○						〃		
31	179	〃	〃	〃	〃	口縁部	16G6R1		26409		黄茶褐色		細粒多						金円	〃		
	180	〃	〃	〃	〃	〃	21F53R1		35938		明茶褐色		密	○	○					〃	Fe	
	181	〃	〃	〃	〃	〃	13G57R1		27461		〃		細粒多						金円	〃		
32	182	〃	〃	〃	〃	口～胴	20F67R1		38855		暗茶褐色	明茶褐色	〃						金白	〃		
	183	〃	〃	〃	〃	口縁部	12I70R1		26541		暗茶褐色		細粒多	○		○				〃		
	184	〃	〃	〃	〃	〃	15G36R1		26919		明茶褐色	暗茶褐色	細粒多	○		○				〃		
	185	〃	〃	〃	〃	口～胴	20F80R1		38877		〃	〃	〃	○	○		○	○		〃		
	186	〃	〃	〃	〃	口縁部	12I100R1		26904		暗茶褐色		〃	○					金	〃		
	187	〃	〃	〃	〃	〃	15G27R1		27434		明茶褐色	暗茶褐色	細粒多	○						〃		
33	188	〃	〃	〃	〃	口～胴	20F78R1		38887		明茶褐色		細粒多	○					金白	〃		
	189	〃	〃	〃	〃	口縁部	20F R1				明茶褐色	暗茶褐色	〃						金円	〃		
	190	〃	〃	〃	〃	口～胴	20F R1				〃	暗茶褐色	〃						金白	〃		
	191	〃	〃	〃	〃	口縁部	12H8R1		26568		明茶褐色	暗茶褐色	〃	○	○	○			白	〃		
	192	〃	〃	〃	〃	〃	12I95R1		26719		黒茶褐色	明茶褐色	〃						円金	〃		
	193	〃	〃	〃	〃	口～胴	20F59R1		38160		明茶褐色	暗茶褐色	細粒多	○					白	〃		
34	194	〃	〃	〃	〃	口縁部	12I98R1		26711		暗茶褐色	〃	細粒多	○					金白	〃		
	195	〃	〃	〃	〃	〃	16G14R1		26372		黒茶褐色	〃	〃						金白	〃		
	196	〃	〃	〃	〃	〃	12I46R1		26876		明茶褐色	〃	〃	○						〃		
	197	〃	〃	〃	〃	〃	20F73R1		38180		〃	暗茶褐色	〃	○					金円	〃		
	198	〃	〃	〃	〃	〃	16G33R1		24893		明茶褐色	〃	〃	○					金白	〃		
	199	〃	〃	〃	〃	〃	16G12R1		7032		暗茶褐色	明茶褐色	〃						金金	〃		
35	200	〃	〃	〃	〃	鉢完形	21F34R1		37269		淡褐色		細粒多	○	○	○				〃		
	201	〃	〃	〃	〃	口縁部	12H R1				明茶褐色	暗茶褐色	〃	密						〃	Mn	
	202	〃	〃	〃	〃	〃	21F 表土				〃	〃	〃	○		○				〃		
	203	〃	〃	〃	〃	〃	13H8R1		26832		明茶褐色	暗褐色	〃	密						〃		
	204	〃	〃	〃	〃	〃	12I98R1		26715		〃		〃	○	○					〃	Fe, Mn	
	205	〃	〃	〃	〃	〃	16G43R1		24906			暗褐色	〃	○	○					〃		
36	206	〃	〃	〃	〃	口～胴	20F66R1		38176		明茶褐色	暗茶褐色	細粒多						白金	〃		
	207	〃	〃	〃	〃	鉢完形	12H R1				〃		細粒多				○			〃		64
	208	〃	〃	〃	〃	口縁部	13G29R1		25660			明茶褐色	〃	密			○			〃		
	209	〃	〃	〃	〃	〃	15G V		26996	12.950	暗茶褐色	暗茶褐色	細粒多	○					金白	〃		
37	210	〃	〃	〃	〃	〃	20F88R1		39189		明茶褐色	暗茶褐色	細粒多	○			○	○		〃		
	211	〃	〃	〃	〃	口～胴	16G36R1		24855			〃	〃	密		○				〃		
	212	〃	〃	〃	〃	〃	21F54R1		37341		明茶褐色	淡褐色	密粒多	○	○	○	○	○		〃		
	213	〃	〃	〃	〃	鉢完形	12G R1				暗褐色	明茶褐色	細粒多							〃		65
38	214	〃	〃	〃	〃	口縁部	15G25R1		26660		明茶褐色		細粒多	○	○	○				〃		
	215	〃	〃	〃	〃	口～胴	20F79R1		38880		明茶褐色	暗褐色	密	○	○	○				〃		
	216	〃	〃	〃	〃	口～胴	12H R1				暗茶褐色	暗茶褐色	細粒多	○	○				基	〃		
	217	〃	〃	〃	〃	口縁部	12H R1				暗茶褐色	明茶褐色	細粒多	○			○			〃		
	218	〃	〃	〃	〃	口～胴	12H8R1		26550		〃	明茶褐色	細粒多						金白	〃		
39	219	〃	〃	〃	〃	口縁部	16F93R1		28522		明茶褐色	暗茶褐色	〃						白金	〃		
	220	〃	〃	〃	〃	口～胴	21F21R1		36706		暗茶褐色		〃	○					金円	〃		
	221	〃	〃	〃	〃	〃	11H R1				明茶褐色		〃						金白	〃		
	222	〃	〃	〃	〃	〃	16F V		15491	13.104	明茶褐色	暗茶褐色	〃	○	○				白金	〃		
	223	〃	〃	〃	〃	〃	〃				暗茶褐色		〃	○					金白	〃		
	224	〃	〃	〃	〃	口縁部	15F90R1		26524		明茶褐色		細粒多	○	○					〃		
40	225	〃	〃	〃	〃	〃	15F99R1		28366		明茶褐色	暗茶褐色	細粒多						金白	〃		
	226	〃	〃	〃	〃	〃	16F V		23172	12.894	暗茶褐色		〃	○	○				金白	〃		
	227	〃	〃	〃	〃	〃	〃		27321		明茶褐色	暗茶褐色	〃						白金	〃		
	228	〃	〃	〃	〃	鉢完形	21F34R1		36151		〃	明褐色	〃						金白	〃		66
	229	〃	〃	〃	〃	口～胴	21F07R1		36622		暗褐色	明茶褐色	〃	○	○	○			白	〃		
41	230	〃	〃	〃	〃	〃	20F76R1		39176		明茶褐色		細粒多	○	○		○			〃		66
	231	〃	〃	〃	〃	鉢完形	20F72R1		38784		明茶褐色	黒褐色	細粒多	○						〃		66
	232	〃	〃	〃	〃	口～胴	12H R1				〃	明茶褐色	〃						白金	〃		
	233	〃	〃	〃	〃	口縁部	12H R1				明茶褐色		細粒多	○						〃		
42	234	〃	〃	〃	〃	〃	16G33R1		26111		黒褐色	明茶褐色	密	○	○	○	○			〃		
	235	〃	〃	〃	〃	〃	15G18R1		26246		〃	明茶褐色	細粒多	○	○				円	〃		
	236	〃	〃	〃	〃	〃	20F67R1		38872		〃	暗褐色	細粒多	○			○	○		〃		
	237	〃	〃	〃	〃	完形	21F34R1		37399		暗褐色	明褐色	細粒多	○					金	〃		64
	238	〃	〃	〃	〃	〃	21F42R1		37328		鉢茶褐色	〃	〃			○			金白	〃		65
	239	〃	〃	〃	〃	口縁部	16F V		23156	12.584	明茶褐色	暗褐色	細粒多	○		○	○	○		〃		
	240	〃	〃	〃	〃	〃	15G78R1		2692		暗褐色	明茶褐色	細粒多		○	○				〃		
43	241	〃	〃	〃	〃	〃	18E V		30351	13.67	明茶褐色	暗褐色	細粒多	○	○		○			〃		
	242	〃	〃	〃	〃	〃	16G05R1				〃	暗褐色	細粒多	○					金白	〃	鉄	
	243	〃	〃	〃	〃	〃	12H98R1		28715			暗茶褐色	細粒多	○						〃	鉄	
	244	〃	〃	〃	〃	〃	20F R1				明茶褐色	暗褐色	密			○				〃		
	245	〃	〃	〃	〃	口～胴			38892		暗茶褐色	明茶褐色	細粒多				○			〃		65
	246	〃	〃	〃	〃	〃	15G V		24718	12.63	暗茶褐色		〃	○	○				白	〃		
	247	〃	〃	〃	〃	口縁部	21F43R1		36792		明茶褐色		細粒多	○	○	○				〃		
	248	〃	〃	〃	〃	〃	21F31R1		35496		明茶褐色	暗茶褐色	〃	○	○				白	〃		
	249	〃	〃	〃	〃	〃	16G04R1				暗茶褐色		細粒多	○		○				〃		
44	250	〃	〃	〃	〃	〃	14G80R1		27635		黒褐色		〃	○		○				〃		
	251	〃	〃	〃	〃	〃	16F V		21207	13.84	明茶褐色	黒茶褐色	密粒多	密		○				〃		
	252	〃	〃	〃	〃	口～胴	21F32R1		37299		暗茶褐色	〃	〃	○		○		○	白	〃		
	253	〃	〃	〃	〃	鉢完形	13H R1				明茶褐色	暗褐色	細粒多	○						〃		65
	254	〃	〃	〃	〃	完形	20F68R1		38865		暗褐色		〃						金多	〃		66
	255	〃	〃	〃	〃	口縁部	20F85R1		38997		黒茶褐色		密						金	〃	PBC	
45	256	〃	〃	〃	〃	〃	13G80R1		27145		暗茶褐色		細粒多						金円	〃		
	257	〃	〃	〃	〃	口～胴	12H76R1		28796		〃		細粒多	○						〃		
	258	〃	〃	〃	〃	口縁部	20F68R1		38862		暗茶褐色	黒茶褐色	細粒多	○		○	○	○		〃		
	259	〃	〃	〃	〃	鉢完形					明茶褐色		〃	○	○	○				〃		65
	260	〃	〃	〃	〃	完形	20F78R1		38888		〃		細粒多	○			○			〃		66
46	261	〃	〃	〃	〃	口縁部	12H R1				明茶褐色	暗茶褐色	細粒多						金円	〃		
	262	〃	〃	〃	〃	口～胴	20F77R1		38890		明茶褐色	〃	〃	○	○	○				〃		
	263	〃	〃	〃	〃	口縁部	21F VI		37897	13.69	暗茶褐色	暗茶褐色	〃	○					白金	〃		

第4表 出土遺物観察表(4)

挿図	番号	種類	器形	型式等	器種	部位	出土区	層	遺物番号	標高(m)	色調 内面	色調 外面	胎土 状態	胎土 石英	胎土 長石	胎土 角閃	胎土 火 W	胎土 火B	胎土 他	成度	備考	図版
46	264	縄文土器	深鉢	無文	口縁部		21F31R1		36747		明褐色		密粒多	○	○				良			
	265	〃	〃	〃	〃	〃	19E 〃 V		36837	13.58	淡赤褐色		〃	○			◎		良	〃		
	266	〃	〃	〃	〃	〃	19G 〃 VII		40628	12.64	黒褐色	暗赤褐色	〃		○				良	〃		
	267	〃	〃	〃	〃	〃	〃		36842		暗茶褐色		細粒多	○	○	○			良	〃	Fe多	
	268	〃	〃	〃	〃	口縁部	20F67R1		38807		明茶褐色	明茶褐色	〃				○	○	良	〃		
47	269	〃	〃	〃	〃	〃	16G12R1		26271		暗茶褐色		密粒多						金良	〃		
	270	〃	〃	〃	〃	〃	20F77R1		39187		黒褐色		〃	○			◎	◎	良	〃		
	271	〃	〃	〃	〃	口～胴	14G 〃 V		23214	12.802	淡赤褐色	暗赤褐色	〃		○	○			良	〃		
	272	〃	〃	〃	〃	口縁部	18D 〃 VI		30859	13.581	暗茶褐色	明茶褐色	細粒多		○	○				〃	Mn	
	273	〃	〃	〃	〃	〃	16G 〃 R1				暗茶褐色		粗粒多	○					良	〃		
	274	〃	〃	〃	〃	〃	20D 〃 V		37742	13.68	暗茶褐色	暗茶褐色	細粒多	○			○		良	〃	Fe	
	275	〃	〃	〃	〃	〃	〃				明茶褐色		密			○	○		良	〃		
	276	〃	〃	〃	〃	〃	12F87R1		26556		暗褐色	明茶褐色	細粒多		○				良	〃		
	277	〃	〃	〃	〃	口～胴	18F 〃 V		12542	12.919	明茶褐色		密粒多				○		良	〃		
	278	〃	〃	〃	〃	〃	19G 〃 V		21971	12.908	明茶褐色	暗茶褐色	〃						金良	〃		
48	279	〃	〃	〃	〃	口縁部	21D 〃 V		26206	13.61	〃	黒茶褐色	〃						金良	〃		
	280	〃	〃	〃	〃	〃	11G08R1		29089		〃	暗褐色	〃		○	○				〃		
	281	〃	〃	〃	〃	〃	20F64R1		38851		〃		〃						金 良	〃		
	282	〃	〃	〃	〃	〃	20F66R1		38861		淡赤茶褐色		細粒多		○				良	〃		
	283	〃	〃	〃	〃	〃	19E 〃 VI		41218	12.66	明茶褐色	〃	〃	○	○	○			良	〃		
	284	〃	〃	〃	〃	口～胴	19E 〃 VI		41234	13.63	暗茶褐色		〃			○	○		金 良	〃		
	285	〃	〃	〃	〃	口縁部	12H 〃 V				明茶褐色	暗茶褐色	〃	○					金良	〃		
	286	〃	〃	〃	〃	胴部	12H 〃 R1				暗茶褐色	暗黒茶褐	〃	○		○			良	〃		
	287	〃	〃	〃	〃	〃	15G31R1		27444		明茶褐色	暗茶褐色	〃		○				金良	〃		
49	288	〃	〃	鉢類	台付鉢	空胴	13G22R1		26797		暗褐色	明茶褐色	細粒多	○			◎	◎	良	〃	白雲	67
	289	〃	〃	〃	〃	底部	16G46R1		36385		明黒褐色		〃		○	○				〃	炭起	
	290	〃	〃	〃	〃	〃																
	291	〃	〃	〃	〃	〃																
50	292	〃	〃	〃	〃	〃	18E 〃 VI		32274	13.58	明茶褐色		密	○	○		◎	◎	良	白雲		
	293	〃	〃	〃	〃	〃	20F29R1		40860		〃		〃				◎	◎		〃	10872	
	294	〃	〃	〃	〃	空胴	22D09R2		36417		〃		細粒多	○	○		○	○	良	〃	白雲	67
51	295	〃	〃	〃	〃	底部	18D 〃 VI		30833	13.655	明茶褐色		密				○	○		〃	白雲	
	296	〃	〃	〃	〃	〃	20E 〃				〃		〃			○	○	○		〃	白雲	
	297	〃	〃	〃	〃	〃	11H 〃 R1				〃		細粒多				○	○		〃	白雲	
52	298	〃	〃	〃	〃	空胴	13H71R1		26485		暗褐色	明茶褐色	〃				○	○		〃	茶白雲	68
	299	〃	〃	〃	〃	〃																
	300	〃	〃	〃	〃	底部	19E 〃 VI		41141	13.66	暗褐色	明茶褐色	細粒多		○		○	○	良	茶白雲		67
53	301	〃	〃	〃	〃	〃	22D56R2		38673		明茶褐色		密		○	○	○	○		〃		
	302	〃	〃	〃	〃	〃	15G 〃 R1				〃		細粒多				◎	◎		〃	炭雲	
	303	〃	〃	〃	〃	〃														〃	炭起	
	304	〃	〃	〃	〃	〃	16G54R1		26144		明茶褐色		密	○	○		◎	◎		〃	赤雲	68
54	305	〃	〃	〃	〃	〃	15G 〃 R1				〃		細粒多				○	○		〃	〃	
	306	〃	〃	〃	〃	〃	18G95R1		28160		〃		〃				○	○		〃	白雲, Mn	
	307	〃	〃	〃	〃	〃	20H98R1		41021		〃		密				○			〃	赤雲	
	308	〃	〃	〃	〃	〃	16G06R1		27612		明茶褐色		細粒多				○	○		〃	白雲	
	309	〃	〃	〃	〃	〃	16F 〃 R1				〃		〃				◎	◎		〃	赤雲	
	310	〃	〃	〃	〃	〃	15G 〃		24760	12.59	暗茶褐色	明茶褐色	〃				◎	◎		〃	赤雲?	
55	311	〃	〃	〃	〃	〃	12H48R1		26867		明茶褐色		〃		○	○	◎	◎		〃	白雲	
	312	〃	〃	〃	〃	〃	22N00R1		38328		明茶褐色	暗茶褐色	〃	○	○		○	○		〃	赤雲	
	313	〃	〃	〃	〃	〃	19G 〃 VII		41270	12.87	淡茶褐色	明茶褐色	密		○		◎	◎		〃	白雲	
	314	〃	〃	〃	〃	〃	22D71		37671		明茶褐色		細粒多				◎	◎		〃		
	315	〃	〃	〃	〃	〃	22N 〃 R2				〃		〃			○	◎	◎		〃	赤雲	
56	316	〃	〃	〃	〃	〃	14C 〃 V		16498	13.069	〃	密粒多	〃		○		○	○		〃	Fe	
	317	〃	〃	〃	〃	〃	20C 〃 VI		40374	13.56	〃		〃		○		◎	◎		〃		
	318	〃	〃	〃	〃	〃	13G 〃 R1				〃	密					◎	◎		〃	白雲	
	319	〃	〃	〃	〃	〃	12H88R1		27866		明茶褐色	密粒多	〃	○	○	○	○	○		〃	白雲	
	320	〃	〃	〃	〃	〃	16G41R1		27037		明茶褐色	細粒多	〃				◎	◎		〃	赤雲	
	321	〃	〃	〃	〃	〃														〃		
	322	〃	〃	〃	〃	〃														〃		
57	323	〃	〃	〃	〃	〃	21F21R1		36798		明茶褐色		密	○			○	○		〃	赤雲	
	324	〃	〃	〃	〃	〃	13H 〃 R1				〃	密粒多	〃	○			◎	◎		〃		
	325	〃	〃	〃	〃	〃	15G 〃 R1				〃	〃	〃				◎	◎		〃		
	326	〃	〃	〃	〃	〃	19G 〃 VII		41750	13.375	〃	〃	〃			○	◎	◎		〃	白雲	
	327	〃	〃	〃	〃	〃	13G 〃 R1				〃	〃	〃			○	○	○		〃	白雲	
	328	〃	〃	〃	〃	〃														〃		
58	329	〃	〃	〃	〃	〃	14G 〃 V		1279	13.929	明茶褐色	密粒多					○	○		〃	白雲	
	330	〃	〃	〃	〃	〃	15G74R1		28182		淡黒褐色	細粒多					◎			〃	白雲?	
	331	〃	〃	〃	〃	〃														〃		
	332	〃	〃	〃	〃	〃	13H 〃 R1				明茶褐色		密				◎	◎		〃	赤白雲	
	333	〃	〃	〃	〃	〃	16G05R1		26087		〃		細粒多				◎	◎		〃	赤雲	
59	334	〃	〃	〃	〃	〃	18E 〃 VI		33914	13.34	暗茶褐色	明茶褐色	〃							〃		68
	335	〃	〃	〃	〃	〃	16G53R1		24922		〃	淡赤	〃						金白	〃	赤雲	67
	336	〃	〃	〃	〃	〃														〃		
	337	〃	〃	〃	〃	〃	14G66R1		27690		明茶褐色	密	〃		○					〃		
	338	〃	〃	〃	〃	〃	14G79R1		27654		淡黒褐色	〃					○			〃	赤雲	
	339	〃	〃	〃	〃	〃	15G33R1		27709		明茶褐色	細粒多					◎	○		〃	赤雲	
60	340	〃	〃	〃	〃	〃																
61	341	〃	〃	〃	〃	〃																69
62	342	〃	〃	〃	〃	〃	12G82R1		28110		淡黒茶褐色	細粒多	○	○					良			
	343	〃	〃	〃	〃	〃																68
63	344	〃	〃	〃	〃	〃	20H 〃 V				明茶褐色	密							良	赤雲, Mn		
	345	〃	〃	〃	〃	〃	14G 〃 R1				暗茶褐色	明茶褐色	細粒多		○		◎	○	良	〃	赤雲	
64	346	〃	〃	〃	〃	〃																69
	347	〃	〃	〃	〃	〃	22N07R2		38196		明茶褐色	密粒多					◎	◎	良			
	348	〃	〃	〃	〃	〃	11H 〃 R1				暗茶褐色	明茶褐色					◎	◎	良			
	349	〃	〃	〃	〃	〃	17H 〃 V		31989	13.7	暗茶褐色		〃				◎	◎	良			
65	350	〃	〃	〃	〃	〃	17C 〃		23864	13.624	暗茶褐色	明茶褐色	〃	○	○	○	○	○	良	〃		
	351	〃	〃	〃	〃	〃	14G49R1		26680		淡茶褐色		〃	○			◎	◎		〃	15021B	
	352	〃	〃	〃	〃	〃	20F50R1		38935		明茶褐色	密粒多	〃		○	○	○	○		〃		
	353	〃	〃	〃	〃	〃	12H68R1		26519		〃	〃	〃	○		○	○	○		〃		
	354	〃	〃	〃	〃	〃	12M 〃				〃	密	〃	○			○	○		〃		
66	355	〃	〃	〃	〃	〃	12H 〃 R1				淡黒褐色	細粒多					◎	○		〃		
	356	〃	〃	〃	〃	〃	14G58R1		26280		茶褐色	明茶褐色	密				◎			〃		
	357	〃	〃	〃	〃	〃					明茶褐色		〃				○			〃		

第5表 出土遺物観察表(5)

掲図	番号	種類	類別	型式等	器種	部位	出土区	層	遺物番号	標高(m)	色調 内面	色調 外面	胎土	焼成	備考	図版
66	358	縄文土器	縄文	西溝	深鉢	底部	14G	V	9610	13.114	暗茶褐色	明黄褐色	繊維多	良		
	359	″	″	″	″	″	20F	撹			明黄褐色	黒	少	″		
	360	″	″	″	″	″	13G	R1			明黄褐色	明黄褐色	繊維多	″		
	361	″	″	″	″	″	14G20R1		26681		″	″	少	″		
	362	″	″	″	″	″	15G	R1			″	黒	少	″		
	363	″	″	″	″	″	20F8R1		34913		″	″	少	″		
	364	″	″	″	″	″	21F21R1		36709		″	繊維多	少	″		
	365	″	″	″	″	″	15G38R1		26927		暗橙色	″	少	″		
	366	″	″	″	″	″	13G1R1		26843		暗褐色	明茶褐色	密	″	Fe	
67	367	″	″	″	″	″	12G74R1		28121		明茶褐色	砂粒多	少	″		
	368	″	″	″	″	″	23K	R2			砂質赤褐色	″	少	堅		
	369	″	″	″	″	″	15G36R1		26673		暗褐色	明茶褐色	少	″		
	370	″	″	″	″	″	21F59R1		35993		明茶褐色	″	少	金白		
	371	″	″	″	壺	胴部	13H	R1			明茶褐色	″	少	″		
	372	″	″	″	″	″	12H46R1		27289		″	″	少	″	37232	
	373	″	″	″	″	″	12H	R1			″	″	少	″		
	374	″	″	″	″	″	21F	VI	39364	13.89	″	″	少	″		
	375	″	″	″	″	″	20F48R1		40905		暗茶褐色	″	少	″		
	376	″	″	″	″	″	13H	R1			明茶褐色	繊維多	少	″		
68	377	″	″	″	″	″	22M	撹乱			暗茶褐色	明茶褐色	少	″		
	378	″	″	″	″	″	23G22R2		38469		明茶褐色	暗茶褐色	少	″		
	379	″	″	″	″	″	12G00R1		26572		明茶褐色	砂粒多	少	″		
	380	″	″	″	″	″	12H	R1			暗褐色	明茶褐色	少	″		
	381	″	″	″	″	″	16G44R1		26237		明茶褐色	黒	少	″	36610	
	382	″	″	″	″	″	15G58R1		26063		明茶褐色	砂粒多	少	″		
	383	″	″	″	″	″	14G69R1		27151		明茶褐色	繊維多	少	″		
	384	″	″	″	″	″	15G	R1			暗茶褐色	明茶褐色	繊維多	良	白	
	385	″	″	″	″	″	13H	R1			明茶褐色	繊維多	少	″		
	386	″	″	″	″	″					″	″	少	″		
	387	″	″	″	″	″	19H	VII	41710	13.33	明茶褐色	繊維多	少	″		
	388	″	″	″	″	″	12H	R1			″	砂粒多	少	堅		
	389	″	″	″	″	″	13H	R1			″	″	少	不良	白	
	390	″	″	″	″	″	17G	VI	39469	13.44	暗茶褐色	黒	少	良		
69	391	″	″	″	″	″	13H	R1			淡茶褐色	明茶褐色	繊維多	″		
	392	″	″	″	″	″	12H67R1		27296		″	″	少	″		
	393	″	″	″	″	″	13G81R1		27268		″	″	少	″	37982	
	394	″	″	″	″	″	21F22R1		37289		″	砂粒多	少	″		
	395	″	″	″	″	″	15G	V	24628	12.71	黒茶褐色	淡茶褐色	少	″		
	396	″	″	″	″	″	16G	R1			暗茶褐色	明茶褐色	砂粒多	″		
	397	″	″	″	″	″	20G	VI	40221	13.59	″	″	少	″		
	398	″	″	″	″	″	23K	VI			明茶褐色	暗茶褐色	少	″		
	399	″	″	″	″	″	18E	VI	39341	13.62	暗茶褐色	″	少	″	Mn	
	400	″	″	″	″	″	12H	R1			暗褐色	″	少	″	Mn	
	401	″	″	″	″	″	18E	VI	41472	13.63	暗茶褐色	″	少	″	Mn	
	402	″	″	″	″	″	22N59R2		38669		暗黄茶褐色	″	少	堅	″	
	403	″	″	″	″	″	15G	R1			暗褐色	明茶褐色	″		″	
	404	″	″	″	″	″	22K84R2		38614		暗茶褐色	″	繊維多	″	″	
	405	″	″	″	″	″	20F85R1		38947		明茶褐色	黒	少	″	″	
	406	″	″	″	″	″	21E	VII	37042	13.7	淡黄茶褐色	繊維多	少	″	″	
70	407	″	″	″	″	″	16G24R1		26146		淡茶褐色	明茶褐色	砂粒多	″	″	
	408	″	″	″	″	″	12H	R1			明茶褐色	″	少	″	″	
	409	″	″	″	″	″	13E	V	3886	12.224	″	黒	少	″	″	38861
	410	″	″	″	″	″	19F	VI	41247	13.583	暗褐色	黒茶褐色	繊維多	″	″	
	411	″	″	″	″	″	20F	R1			暗褐色	″	少	悪多	″	
	412	″	″	″	″	″	19G	R1			明茶褐色	砂粒多	少	″	″	
	413	″	″	″	″	″	18G	表土			暗褐色	″	少	堅	″	
	414	″	″	″	″	″	12H11R1		28671		″	″	少	″	″	
	415	″	″	″	″	″	14F	V	30141	13.85	暗茶褐色	明茶褐色	″	白	″	
	416	″	″	無文	深鉢	穴部	19E	VII	41618	13.663	黒褐色	″	少	″	Mn	
71	417	″	″	″	″	″	23D24R2		38729		暗褐色	明茶褐色	少	茶白	″	
	418	″	″	″	″	″	21D	撹乱			明茶褐色	黒	少	″	″	
	419	″	″	″	″	略完形	—	—			暗褐色	砂粒多	少	″	″	
	420	″	″	″	″	完形	16G81R1		26447		暗褐色	明茶褐色	繊維多	″	″	
72	421	″	″	″	″	略完形	20F96R1		35168		″	″	″	赤	″	
	422	″	″	″	″	完形	19E	VII	41721	13.48	″	砂粒多	少	″	黒	
	423	″	″	太型縄文	表杯	口縁	17J	V	3861		明茶褐色	″	少	″	白	
	424	″	″	沖美	深鉢	口縁部	14G67R1		26696		明茶褐色	暗茶褐色	少	″	金粒	
	425	″	″	兰博利系	浅口	略完形	13H00R1		27368		暗黄褐色	黒	少	″	大粒大量	
73	426	″	″	—	″	口縁部	13H53R1		27268		暗褐色	砂粒多	″	赤白	″	
	427	″	″	—	″	口縁	14G60R1		26589		暗褐色	黒褐色	″	茶白	Fe, Mn	
	428	″	″	—	″	″	23N	V			茶褐色	″	少	″	Fe	
	429	″	″	型式不明	深鉢	穴部	—	—			明茶褐色	″	少	″	″	
	430	″	″	″	″	″	19E	VII	41447	13.52	明黄茶褐色	″	少	茶多	良	70
	431	″	″	″	″	″	15G	R1			明茶褐色	繊維多	″	白茶	″	
	432	″	″	″	″	口縁部	19E	VII	41331	13.68	明茶褐色	暗褐色	繊維多	良	Mn, Fe	
	433	″	″	″	″	″	14G	V	22461	12.894	″	″	少	白	Mn	
	434	″	″	″	″	″	19E	VII	41331	13.68	暗褐色	明茶褐色	″	″	Mn	
74	435	″	″	″	″	″	21F21R1		35666		黒褐色	淡茶褐色	″	堅	Mn	
	436	″	″	″	″	″	12H	R1			暗茶褐色	″	″	良	Mn	
	437	″	″	″	″	″	18D	VI	32138	13.36	黒褐色	淡茶褐色	″	″	Mn	
	438	″	″	″	″	頸部	19E	VII	41329	13.71	暗茶褐色	″	少	良	Fe	
	439	″	″	″	″	頸部	19E	VII	41311	13.68	黒褐色	淡茶褐色	″	白	Mn	
	440	″	″	″	″	略完形	20F40R1		40961		明茶褐色	暗茶褐色	″	″	″	70
	441	″	″	上加貫目	鉢	口縁部	23K	撹乱			暗茶褐色	明茶褐色	繊維多	″	良	
	442	″	″	″	″	胴部	18L	V			淡茶褐色	明茶褐色	″	″	″	
	443	″	″	″	″	″	14G	アゼ			明茶褐色	暗黄茶褐色	砂粒多	白	金	
75	444	″	″	″	″	″	14G	V	29433	13.3	淡茶褐色	″	少	白	″	
	445	″	″	無目	浅鉢	口縁部	17M	VI	31492	13.13	黒茶褐色	繊維多	少	″	白	
	446	″	″	″	鉢	″	15G	R1			黒褐色	淡黄茶褐	砂粒多	″	″	
	447	″	″	″	浅鉢	″	15G	R1			″	黒茶褐色	″	″	″	
	448	″	″	刻目突帯	深鉢	″	12D	V	29828	13.93	暗茶褐色	淡茶褐色	″	白	″	
	449	″	″	″	″	″	12D	V	29828	13.93	淡茶褐色	暗茶褐色	″	白	″	
76	450	″	″	平行	″	穴部										45

あ と が き

平成６年４月に本格的な発掘調査を開始した中原遺跡であったが，遺跡の東側にある思川にかかる国道の重富橋が通行不能になるという不測の事態が生じたため，６月には調査中断を余儀なくされることとなった。調査区内に仮設の国道を敷設することになったためである。調査に入る前年の平成５年は鹿児島を大水害が襲った年で，姶良町は８月１日に大きな被害を受けていた。その時橋が受けていたダメージが限界に達したというわけである。遺跡の東端から検出された大型道路は水害の影響を受け崩壊していることがわかった。私たちにとって平成５年の水害は忘れることのできない出来事であるが，大型道路が崩壊した当時の人々の思いはどうであっただろうか。

錦江湾を挟んで，鹿児島のシンボルである桜島を東側に見ながらの発掘調査であったが，「ドカ灰」の影響を受け，辺りが真っ暗になり調査ができない日もあった。低地部が水浸しポンプを使って毎日のように水を汲み上げる作業もあった。

発掘調査後半には調査期限をにらみながら，雨の日でも外で作業を黙々と続ける日々が続いた。あの時の作業員の方々から発せられる使命感のような気力・熱気を忘れることができない。

報告書作成に関しても，多くの方々にご協力いただいた。発掘調査から７年という年月を経ての刊行であるが，この間様々な人々や遺跡との出会いによって，さらに調査成果が明らかになってきた部分も多い。報告書の不十分な内容については，今後少しずつでも補足していくつもりである。本遺跡に関わった多くの方々と，その後の自分を成長させてくれた多くの遺跡に感謝したい（郁）。

鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（54）
国道10号姶良バイパス建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書

中　原　遺　跡

発行年月　2003（平成15）年３月
発　　行　鹿児島県立埋蔵文化財センター
〒899-4461 鹿児島県国分市上之段1175番地1
℡0995－48－5811
印　　刷　中央印刷株式会社
〒892-0804 鹿児島市春日町12－16
℡099－247－3300